4. 鳥類

選定・評価方法の概要

鳥類は、東京都の本土部で記録のある種の中から、生息数や生息地域が限られる 173 種（亜種を含む）を検討対象種とし、これらの生息状況を精査してランクを判定した。鳥類は移動能力が大きいため、本来の生息地から大きく離れて移動し、偶発的に記録される迷行記録や、安定した生息とはならない不定期記録も多く存在する。このような種は「非分布」として扱った。また、日本が主要な越冬地でないため、国内全体の生息数が少ない場合もあり、これは対象外とした。

判定にあたっては定量的要件を原則としたが、生息状況についての把握が十分ではない種が多く、定性的要件による評価も並行して行った。鳥類は季節移動が大きく、生息数が時期により大きく異なるが、個体群保全に重要な世代交代にかかわる繁殖期の生息状況を重視した。本土部全体の評価は、各種の主要な生息地となる地域区分の評価を中心としつつ、都としての保全の観点を加えて行った。

選定・評価結果の概要

評価の結果、本レッドリストの掲載種は合計で 160 種と 2 亜種の 162 種となった。前回の本土部レッドリスト 2010 と数は同じだが、新規掲載が 10 種、削除種（本土部レッドリスト 2010 に掲載されていて今回の改定によりレッドリストから外れた種）が 10 種と変動があった。新しく掲載種となったホシハジロ、ゴイサギ、オナガ、イワツバメ、セッカ、ホオジロ、カシラダカは近年まで極めて普通に生息していたものばかりである。ホシハジロとカシラダカは全国的にも減少している。ハジロカイツブリは資料の精査の上、生息数が少数と判断した。ウミネコとリュウキュウサンショウクイは、近年、都内で繁殖期に少数個体が生息するようになった。

カシラダカ

削除種となった種の中で、シラコバトは『日本鳥類目録 改訂第 7 版』の記載に基づき、東京で記録があったものは外来生物とした。その他はデータの精査の結果、主要な生息地でないといった理由により「非分布」として対象外とされた種である。生息状況が好転し、ランク外となったものは、多摩地域におけるダイサギだけである。

また、絶滅した鳥類の判定には困難が伴った。日本国内全般において、明治期に狩猟のため大型鳥類が大きく減少し、都内においてもトキやコウノトリ、ツル類やハクガンなどの生息が消失したと思われる。しかし、これらの記録の精査は困難であるため、日本野鳥の会（1975）による『東京の鳥 －東京都産鳥類目録－』の記載を元に、1930 年代以降に定常的な生息がなくなった種を絶滅とした。繁殖していた種については、50 年以上の繁殖記録の消失によって絶滅とした。

絶滅危惧（CR、EN、VU）と判定された種を目別に見ると、チドリ目が 37 種と最も多いほか、カイツブリ目やサギ目、ツル目（クイナ科）といった干潟や湿地を生息環境とする鳥類が含まれる。また、キジ目やスズメ目でも、オオヨシキリやオオジュリンなど湿性草地（ヨシ原）、ヒバリやモズ、ホオジロ、セッカなど草地性の鳥が多く含まれ、湿地や草地環境の減少や悪化が、絶滅のおそれを増大させていることを示唆している。チドリ目は北極圏から赤道・南半球まで渡る鳥も多く、地球規模での環境変化の影響を受けて生息数が減少しているとされる。

タカ目、ハヤブサ目、フクロウ目の食物連鎖の上位に位置し、猛禽類と称される捕食性鳥類は合わせて 21 種となった。生態系全体の劣化に注意する必要がある。樹洞を主な営巣場所とするフクロウ類では、樹洞を持つ大樹が少なくなってきていることも減少要因として考えられる。都内の樹木は植樹などから年数が経って生長し、猛禽類など大型鳥類の営巣可能木も増加しているが、台風による倒木及びその対策や森林施業としての伐採もあるため、営巣木の保全には留意する必要がある。

スズメ目の中では、国外から渡ってくる夏鳥 20 種が含まれる。都内の生息環境の変化だけでなく、越冬地や中継地の環境変化などの影響を受けている可能性がある。

カモ類は、休息地となる公園などの水域環境には大きな変化は無いが、都内全体として 1990 年代以降の減少が著しい。東京都では人による給餌を行わないように呼びかけていることから、公園の池ではこの効果による減少があると思われる。また、温暖化により国内の越冬分布が変化していることも提起されているが、湿地の減少や湾岸の底生生物の変化などで食物条件が悪化している可能性もある。

地域別にみると、区部が掲載種 123 種ともっとも多い。開発が進み、鳥類の生息環境条件の悪化が大きく進行しているといえる。特に湾岸部の干潟や湿地に生息する鳥類がリストに多く挙げられた。1960 年代に埋め立てが進行し、1970 年代から 1990 年代前半には埋立地が自然湿地の代替機能をもっていたが、その後土地利用が進み、現在、野鳥の生息環境となる干潟・湿地は、東京港野鳥公園や葛西海浜公園、多摩川河口域などごく一部に限られる。内陸部も畑や未利用地が減り、宅地化や都市化が進んで緑地が減少し、ヒバリやセッカ、モズなど林縁や草地に生息する種が減少している。北多摩は掲載種 82 種であった。武蔵野台地上に畑地や樹林が多かったが、1980 年代以降急速に宅地化や都市化が進行し、樹林や農地などの緑地の減少が現在も大きく進行している。南多摩は掲載種 105 種で区部に次いで多い。丘陵地を主体とした谷戸地形が多く、多摩ニュータウンに代表される 1960 年代からの大規模な宅地開発などで、地形も大きく変わった場所もある。現在でも丘陵地が多く比較的良好な鳥類の生息環境が残っている。西多摩は掲載種 99 種となった。ほぼ全域が山地帯で、スギ、ヒノキの植林地が多いが、標高 1,000 m以上ではブナ帯の落葉広葉樹林も多く、都内でも自然環境がもっとも残っている。リストには山林性の種が多い。外来生物のガビチョウやソウシチョウが増加する一方、ニホンジカの増加による林床や林縁植生の減少が生じており、コルリやコマドリ、ウグイスなど低木層を生活空間としている鳥類の生息状況の悪化を引き起こしているおそれがある。

ニホンジカの食害を受けた林床（奥多摩町）

コルリ

北多摩と南多摩の境を流れる多摩川の中流部と区部の下流部、更に区部に位置する江戸川と荒川の下流部では、河川敷や中州がヒバリやセッカ、オオヨシキリ、イカルチドリなどシギ・チドリ類の貴重な生息地となっている。これらの河川環境は、河川の整備や利用により、湿地や草地環境が失われるなど生息環境の減少および悪化が生じてきた。河川においては、湿地環境の保全や堰の管理で自然環境の保全措置も行われるようになり、鳥類の生息環境の向上も期待されるが、近年は、5 月から 7 月の繁殖期の降雨の激甚化が生じており、河川での増水による営巣育雛への影響にも注意が必要である。

現時点では絶滅のおそれはないが、特定の生息地への集中が強いスズガモ、カンムリカイツブリとニホンジカによる植生変化の影響が大きいウグイスについては、環境条件の変化により生息状況が急変する可能性があるので、注意喚起のため留意種とした。ウミネコは、都内での繁殖数は少ないが、新たに繁殖を開始し、営巣状況の変動が大きいために留意種とした。

鳥類への脅威としての違法捕獲は、取り締まりの強化が進んでいるが無くなってはいない。猛禽等希少種への違法捕獲による個体数への影響はかつてより少なくなっていると考えられるが、依然として注意は必要である。鳥類に対しては、観察者による営巣行動等のかく乱の影響が大きい。特に営巣時期・営巣場所での写真撮影は、深刻な影響を及ぼす。絶滅危惧種ほか写真撮影の圧力が大きい種の営巣情報の取り扱いには注意が必要である。

なお、本解説版（本土部レッドデータブック 2023）の執筆については、本土部レッドリスト 2020 版公表後に得られた情報も含めて行った。

（金井 裕）

引用文献

環境省自然環境局，2020．第 50 回ガンカモ類の生息調査報告書．

日本鳥学会（目録編集委員会），2012．日本鳥類目録 改訂第 7 版．

日本野鳥の会奥多摩支部，2014．多摩の鳥 鳥類目録 2000-2012．

日本野鳥の会東京，2016．東京の野鳥たち～月例探鳥会 7 か所・20 年間の記録～．

日本野鳥の会東京，2018．東京の野鳥たち・2 ～月例探鳥会 3 か所・20 年間の記録 および 明治神宮・高尾山・新浜の長期記録～．

東京都環境保全局，1998．東京都鳥類繁殖状況調査報告書．

東京都産鳥類目録作成委員会，2009．東京都産鳥類目録 2000 自治体編 Ver.1.

※この他、全国鳥類繁殖分布調査及び東京都繁殖分布調査の未公開データの提供を受けた。

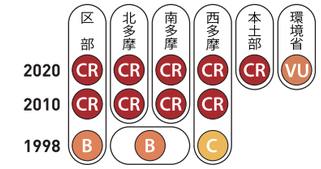
写真提供者

井上裕由、土橋信夫、御手洗望

ウズラ

Coturnix japonica

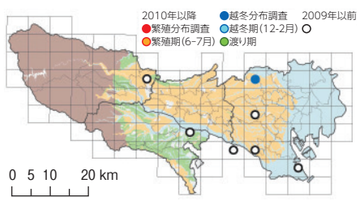
キジ目
キジ科



種の特性と生息状況：体長20cm。小さくて体が丸く、尾は短い。雄成鳥夏羽は顔から脇が赤褐色。白っぽい頭央線と眉斑がある。平地から低山帯の草原に生息し、地表で植物の種子や小型の果実、昆虫類やクモ類などを食べる。北海道、本州（中部以北）では夏鳥。本州（中部以南）、四国、九州、南西諸島では冬鳥。都内では海岸の埋立地や河川敷の草地で見られたが、近年は観察記録がほとんどない。

生存を脅かす要因：東京ではもともと多い種ではなく、全国的にはやや回復傾向がみられるものの、大きく減少し、東京に渡来しなくなったことが減少の主原因である。東京においても海岸の埋立地や河川敷の広大な草地の減少も本種の生存を脅かしている。また、飼育ウズラの放鳥により、遺伝子のかく乱が生じるおそれがある。

特記事項：繁殖期にウズラの生息が確認された場合には、必要に応じて草地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。個体数の減少に伴い2007年から捕獲禁止措置がとられ、2013年からは狩猟鳥獣から外された。この施策との因果関係はわからないが、全国でのウズラの観察例は増えている。



東京都外　1989 年

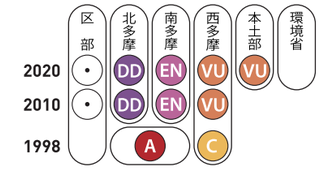
執 筆 者　植田睦之

文献一覧　8, 10, 45, 47

ヤマドリ

Syrmaticus soemmerringii

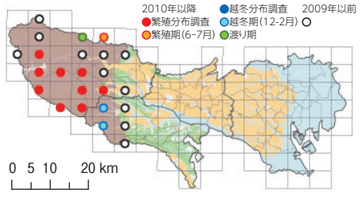
キジ目
キジ科



種の特性と生息状況：体長雄 125cm、雌 55cm。雄成鳥は尾が非常に長くて目立ち、体全体は赤褐色。丘陵地から山地の樹林に生息し、木の根元や岩陰などの地上に営巣する。地表で植物の種子や昆虫類、土壌動物などを食べる。本州、四国、九州で留鳥。都内では南多摩西部や西多摩に生息する。

生存を脅かす要因：森林伐採・外来種による捕食。生息地である樹林の減少や分断、外来種（アライグマ）やノネコなどによる卵や雛の捕食が本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

特記事項：日本固有種。近年のシカの増加やササの一斉開花による枯死による下層植生の変化も、本種の生息状況に影響を与えている可能性がある。北多摩では70年代の記録はあるものの、それ以降の確実な記録はない。



八王子市　2012 年

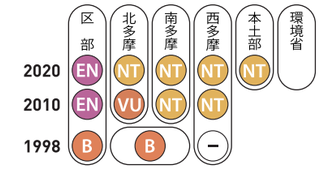
執 筆 者　田畑伊織

文献一覧　8, 16, 61, 62

キジ

Phasianus colchicus

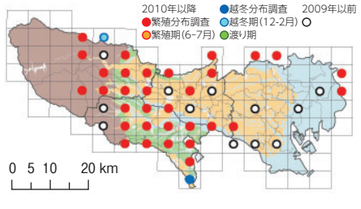
キジ目
キジ科

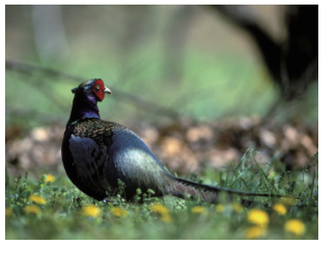


種の特性と生息状況：体長雄80cm、雌60cm。雄成鳥は顔の皮膚が裸出して赤く、胸、腹は緑色光沢がある。平地や山地の草地、耕作地、河原などに生息し、地表で植物の種子や昆虫類、クモ類、土壌動物などを食べる。本州、四国、九州で留鳥。自然分布のほかに北海道や対馬、南西諸島、伊豆諸島に亜種コウライキジや亜種不明のキジが放鳥され、定着している。都内では河川敷、平地や丘陵地の耕作地、造成地の草地に生息する。草丈の高い草地が多い公園でも見られることがある。

生存を脅かす要因：農地や丘陵地の宅地化や、採草地の放棄による樹林化に伴う草地環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。また、狩猟鳥の放鳥事業による遺伝子のかく乱や、犬・猫・アライグマなどにより卵や雛が捕食されることも大きな要因であると考えられる。

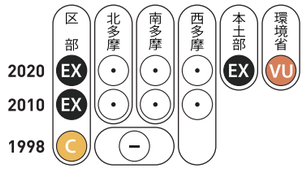
特記事項：生息場所となる草地環境を可能な限り保全することが望ましい。狩猟鳥の放鳥事業を行う場合、放鳥個体は都内の個体群を増殖させたものを用いるなど留意する必要がある。また、必要に応じて犬・猫・アライグマなどの増加を防止する対策を講じることが望ましい。





執 筆 者　植田睦之　文献一覧　8, 10, 45

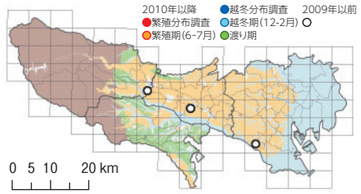
ヒシクイ
Anser fabalis
カモ目 カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長85cm。成鳥の上面は暗褐色で、体下面と上・下尾筒は白く、尾は黒色。嘴は黒く、先が橙色で、先端が黒い。湖沼、池、水田、湿地などに生息し、植物の葉、茎、根、種子、果実などを食べる。北海道では旅鳥。本州では冬鳥。以前は東京でも東京湾岸や皇居の外堀で越冬していたが、現在は広い河川敷で稀に飛来するのみある。関東での越冬数は増加傾向にあり、東京への飛来も増える可能性がある。

■**生存を脅かす要因**：水田地帯や干潟、河川敷などの湿地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現在、稀に渡来する河川では、水際から後背地の草地まで可能な限り広く保全することが望ましい。

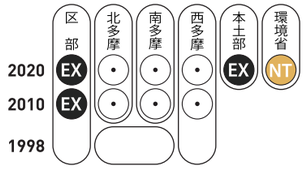
■**特記事項**：過去の国内生息数減少は狩猟によるところが大きいが、現在は都内の生息環境が無くなっている。



執筆者 金井裕
文献一覧 43, 48

東京都外　2013 年

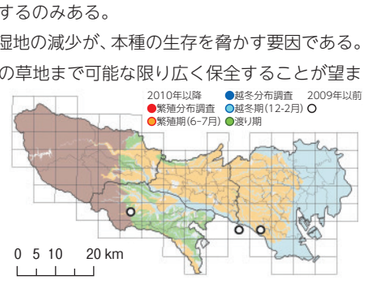
マガン
Anser albifrons
カモ目 カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長72cm。成鳥の上面は暗褐色で胸から腹は白く、黒色横斑がある。嘴は桃橙色で、基部周辺は白い。湖沼、水田、池、湿地に生息し、植物の葉、茎、根、種子、果実などを食べる。北海道では旅鳥。本州では冬鳥。以前は東京でも東京湾岸や皇居の外堀で越冬していたが、現在は広い河川敷で稀に飛来するのみある。

■**生存を脅かす要因**：水田地帯や干潟、河川敷の湿地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現在、稀に渡来する河川では、水際から後背地の草地まで可能な限り広く保全することが望ましい。

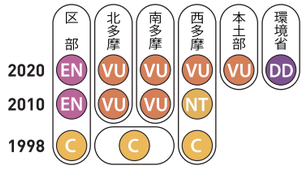
■**特記事項**：過去の国内生息数減少は狩猟によるところが大きいが、現在は都内の生息環境が無くなっている。



執筆者 金井裕
文献一覧 43, 48

東京都外　2010 年

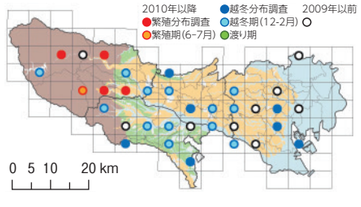
オシドリ
Aix galericulata
カモ目 カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長45cm。雄は冠羽や銀杏羽とよばれる羽毛があり、全体に派手な羽色、雌は茶系の地味な羽色である。全国の山地の渓流や湖沼、池などに生息し、本州では留鳥または漂鳥。シイやカシの実を好んで食べる。主に西多摩の山地の樹洞で営巣するが、ときに区部の樹木が生い茂った池のある緑地で繁殖することもある。秋冬期は平地の樹木に囲まれた水辺で、群れで越冬する。しかし、越冬地としている区部の池では、環境変化で、飛来しなくなったり、数が少なくなった場所が年々増えている。

■**生存を脅かす要因**：繁殖については西多摩の渓流沿いの山林で記録されているが、越冬地である平地部の池・湖・河川で、個体数の減少が見られる。繁殖のようすを執拗に撮るカメラマンの存在は繁殖に悪影響を与えている。区部の緑地では、池周辺の樹木が選定され、彼らが隠れる場所がなくなり、飛来数が年々減少したり、まったく飛来しなくなった場所が目立つ。また、多数のカメラマンが撮影のために近づくことによる悪影響も少なくない。

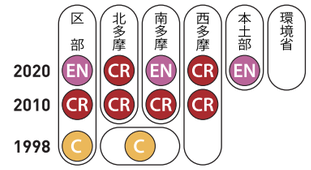
■**特記事項**：区部の定期的な越冬地としては新宿御苑だけとなっている。



執筆者 川内博
文献一覧 8, 76

東京都外　2020 年

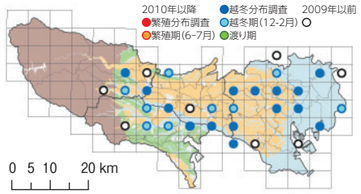
ヨシガモ
Anas falcata
カモ目 カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長48cm。雄成鳥は額から後頭と眼先から頬線にかけて赤紫色で、眼から後頭にかけては緑色光沢がある。湖沼、池、河川、内湾などに生息する。河川や湖沼、公園の池に生息し、水中の藻類や水草を主に食べるほか、水際の草地で種子などを食べる。北海道では少数が夏鳥。本州、四国、九州では冬鳥。都内では河川や公園の池などで少数が見られる。

■**生存を脅かす要因**：食物となる水中の藻類や水草への影響の大きい水質汚濁やアメリカザリガニなどの外来生物の増加が本種の生存を脅かす要因である。

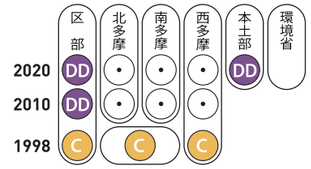
■**特記事項**：



執筆者 金井裕
文献一覧 43, 54, 55

東京都外　2011 年

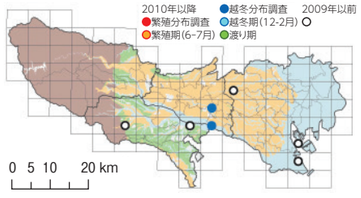
シマアジ
Anas querquedula
カモ目 カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長38cm。雄成鳥は頭頂が黒く、後頸まで伸びる太く白い眉斑がある。胸は褐色地に黒い鱗状斑がある。湖沼、池、河川、水田、干潟などに生息し、水際の草地で種子などを食べる。北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。海岸の干潟周辺や河川、湖沼、公園の池で稀に見られる。カモ類の調査が少ない春・秋の渡り時期に飛来するため、生息状況は不明

■**生存を脅かす要因**：カモ類共通の要因として、採食地となる草地環境や河川の湿性草地の減少があげられる。また、飛来があった場合には写真撮影者が集中するなどの人為的ストレスによるかく乱も生じる可能性がある。

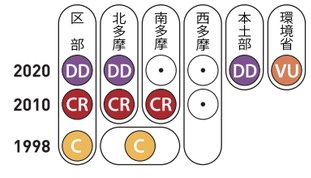
■**特記事項**：



執筆者 金井裕
文献一覧 26, 29, 43

三鷹市　2021 年

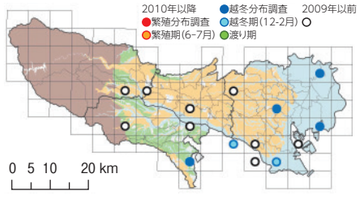
トモエガモ
Anas formosa
カモ目 カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長40cm。雄成鳥の顔の模様は、黄白色と緑色、黒色の巴形をしている。背の上面は褐色で、下尾筒は黒く、白い横線がある。湖沼、池、河川などに生息し、水田や水際の草地で種子などを食べる。北海道では旅鳥。本州、四国、九州では冬鳥。都内では河川や公園などの池で見られるが、渡来数は少ない。

■**生存を脅かす要因**：カモ類共通の要因として、採食地となる草地環境や河川の湿性草地の減少があげられる。また、飛来があった場合には写真撮影者が集中するなどの人為的ストレスによるかく乱も生じる可能性がある。

■**特記事項**：国内には、不定期的に大群で飛来する場合があり、その一部が都内にも飛来することがある。

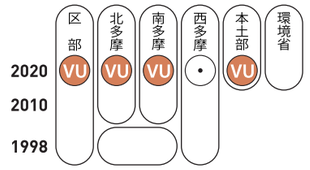


執筆者 金井裕
文献一覧 26, 43

東京都外　2009 年

ホシハジロ
Aythya ferina

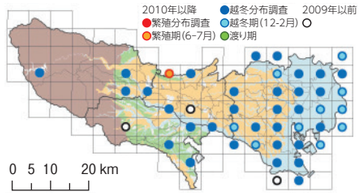
カモ目
カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長 45cm。湖沼、池、河川、内湾の海岸・干潟などに生息し、水中にもぐって底泥中の貝類や軟体動物等の底生生物を採食する。北海道では旅鳥。本州、四国、九州では冬鳥。都内では海岸や河川、公園などの池で見られる。全国的に近年の減少傾向が著しい。

■**生存を脅かす要因**：採食地となる池沼や河川、海岸の干潟の水質や底質の変化による食物の貝類や湿性草地の減少があげられる。

■**特記事項**：水質については、汚染ではなく栄養塩類や有機物の減少による貧栄養化が進み、食物となる底生生物の減少が起こっている可能性も指摘されている。



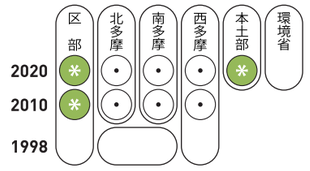
江戸川区　2016 年

執筆者　金井裕

文献一覧　26, 46, 54, 55

スズガモ
Aythya marila

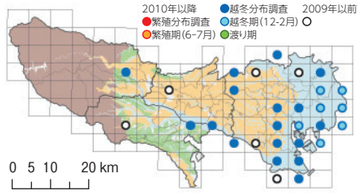
カモ目
カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長45cm。雄成鳥は頭部から胸、上・下尾筒、尾が黒く、頭部には緑や紫の光沢がある。背には細かく黒い波状斑がある。河口、内湾、港などに生息する。潜水して貝類など底生生物を食べる。北海道、本州、四国、九州で冬鳥。都内では主に海岸付近や河口で見られる。葛西沖は数千から数万羽が集中する大規模な越冬地・中継地である。国内の生息数は多いが、近年は減少傾向にあると言われ、東京湾においても同様である。

■**生存を脅かす要因**：海岸周辺の埋立てによる生息場所の減少や、生息水域に船が通行することによるかく乱のほか、採食地となる海岸の干潟や浅海域の水質や底質の変化による食物の貝類など底生生物の減少があげられる。なお、集団越冬地では、船舶の事故による油の流出や伝染病の発生などにより、個体群全体へ大きな影響を及ぼす可能性があることに留意する必要がある。

■**特記事項**：個体数は多いが、東京湾内では市川・船橋沖と葛西沖に集中している。特定の場所への集中は、病気の発生など生息保全上のリスクがあるので、生息場所の拡散状況や病気・事故の発生がないか留意する必要性があるため、留意種とした。葛西沖の葛西海浜公園のラムサール条約登録基準。



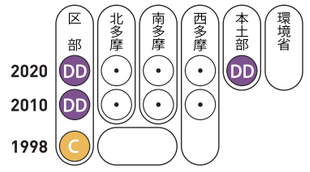
江戸川区　2022 年

執筆者　金井裕

文献一覧　26, 46, 54, 55

ビロードキンクロ
Melanitta fusca

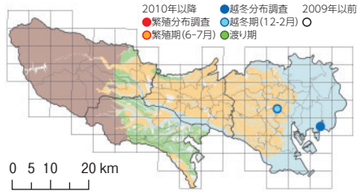
カモ目
カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長55cm。雄成鳥は全体が黒く、眼の下に白い三日月斑がある。嘴は赤色で、先端からまわりが黄色。沿岸や沖合などに生息し、潜水して主に貝類を食べる。北海道、本州、四国、九州で冬鳥。都内では沖合の海上で見られるが、東京湾の沖合の海上調査がほとんど行われていないため、生息状況は不明である。

■**生存を脅かす要因**：採食地となる海岸の干潟や浅海域の水質や底質の変化による食物の貝類など底生生物の減少があげられる。

■**特記事項**：海岸付近を除き、東京湾での生息状況が不明であるため、東京湾沖合の海上調査を行い、海面の鳥類の生息状況把握が望まれる。



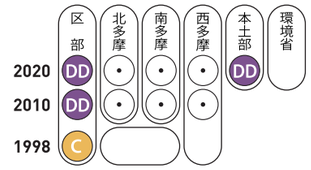
東京都外　2010 年

執筆者　金井裕

文献一覧　26, 46

クロガモ
Melanitta americana

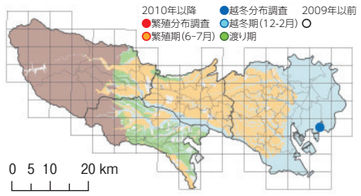
カモ目
カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長48cm。雄成鳥は全身が黒く、嘴も黒いが、上嘴の基部はこぶ状に膨らんでいて黄色い。沿岸、沖合、内湾、港などに生息し、貝類、甲殻類、昆虫類、魚類の卵などを食べる。北海道、本州、四国、九州で冬鳥。生息域である東京湾の沖合の海上調査がほとんど行われていないため、生息状況は不明である。

■**生存を脅かす要因**：採食地となる海岸の干潟や浅海域の水質や底質の変化による食物の貝類など底生生物の減少があげられる。

■**特記事項**：海岸付近を除き、東京湾での生息状況が不明であるため、東京湾沖合の海上調査を行い、海面の鳥類の生息状況把握が望まれる。



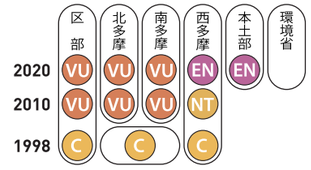
東京都外　2010 年

執筆者　金井裕

文献一覧　26, 46

ホオジロガモ
Bucephala clangula

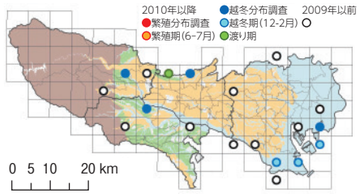
カモ目
カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長45cm。雄成鳥は頭部が緑色光沢のある黒色で、嘴基部に白斑がある。内湾、河口、河川、湖沼などで潜水して甲殻類やイカ類、貝類などの軟体動物を食べる。北海道、本州、四国、九州で冬鳥として渡来。本土部の各地で記録があり、東京湾・多摩湖・多摩川上流では現在も定期的な渡来がある。

■**生存を脅かす要因**：河川開発、渡りの目的地（繁殖地・越冬地）および経路の環境悪化。

■**特記事項**：渡来は継続的であるが、いずれの地域でも渡来数そのものが少ない。



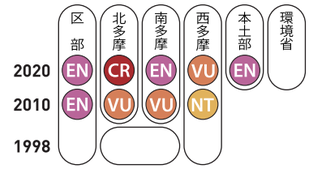
東京都　2018 年

執筆者　御手洗望

文献一覧　16, 54, 61, 65

ミコアイサ
Mergellus albellus

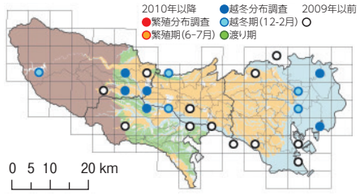
カモ目
カモ科



■**種の特性と生息状況**：体長42cm。雄は全体に白色で、冠羽があり、目の周囲や翼、尾などが黒い。雌は全体に茶褐色で顔の部分が白い。九州以北に冬鳥として渡来し、大きな川や湖、開けた濠、入江などに渡来し越冬する。潜水して主に魚類を捕るが、両生類や甲殻類、植物の根、種子なども食べる。かつては北多摩の多摩湖や多摩川の中流域に群れで越冬していたが、多摩市多摩川では2005年を最後に記録されなくなった。1990年代から2010年代半ばまで区部の皇居外苑濠に毎年数羽が渡来していた。

■**生存を脅かす要因**：北・南多摩の多摩川中流域での観察では、河川の改良工事や台風などにより、河川環境が変化し、生息に適さなくなったと思われる。また、河川敷や堤防に散歩する人やカメラマンの増加なども原因と思われる。一方、1990年代になると区部の皇居濠に数羽が毎年越冬した。これは水質改善により、水草や小魚などが増加したためと考えられるが、その後、水質改善・外来魚の駆逐などにより、小魚類が減少したため飛来しなくなったと考えられる。

■**特記事項**：

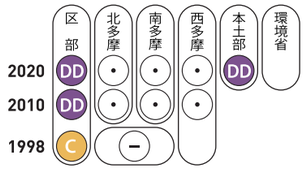


2008 年

執筆者　川内博　文献一覧　16, 51, 54

ウミアイサ
Mergus serrator

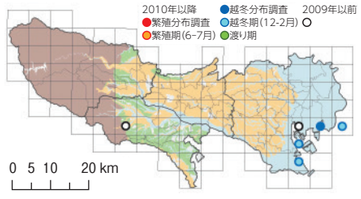
カモ目 カモ科

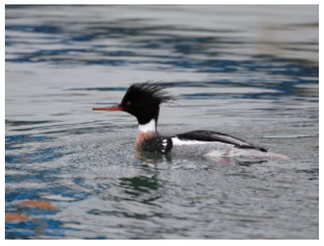


■**種の特性と生息状況**：体長55cm。雄成鳥は頭部が緑色光沢のある黒色で、後頭に冠羽がある。胸は茶褐色で黒色斑がある。背は黒く、腹は白色。沿岸、河口、内湾などに生息するが、稀に海岸近くの池沼に入ることもある。潜水して魚類を食べる。北海道、本州、四国、九州で冬鳥。都内では海岸や河口の広い水域で見られる、かつては多かったとされるが、現在は河口部や海上での調査が少ないため、生息状況は不明な部分が多い。

■**生存を脅かす要因**：海岸周辺の埋立てによる生息場所の減少や、生息水域に船が通行することによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。生息水域を可能な限り保全することが望ましい。

■**特記事項**：海岸付近を除き、東京湾での生息状況が不明であるため、東京湾の海上調査を行い、海面の鳥類の生息状況把握が望まれる。





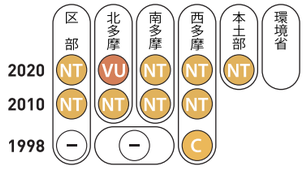
東京都外　2020 年

執筆者 金井裕

文献一覧 26, 46, 48, 54

カイツブリ
Tachybaptus ruficollis

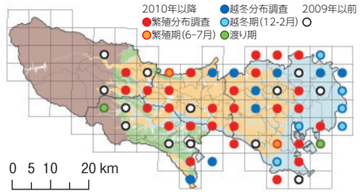
カイツブリ目 カイツブリ科



■**種の特性と生息状況**：体長26cm。雌雄同色で全身茶褐色。日本産カイツブリ科では最小種で、飛ぶことはあまり得意でない。北海道で夏鳥、本州以南では留鳥。水中にもぐり、小魚や水生昆虫・甲殻類などを捕る。比較的開けた水面を好み、池、川、湖、海岸などに生息し、水面に浮き巣を作り繁殖する。ときに人工的な調整池でも営巣することがあり、西多摩での繁殖記録が増えている。都心部から丘陵地の水辺で広く繁殖していて、東京湾岸の水辺でも繁殖例が見られる。

■**生存を脅かす要因**：生息・繁殖に関しては、食物となる水生動物の量の多少が大きな問題で、水質の悪化による水生生物の生育不良とともに、ブラックバス、ミシシッピアカミミガメなどの外来動物による小魚などの捕食が直接関係する。また、営巣場所となる岸辺の水草の生育悪化なども影響する。市街地の池などでは、岸辺に近いところで営巣する場合も多く、散歩する人や犬、子育てのようすを撮るカメラマンなども繁殖に悪影響を与える。

■**特記事項**：通常の繁殖期外の冬期に繁殖する事例が見られる。



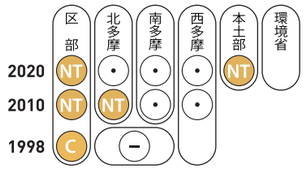
町田市　2020 年

執筆者 川内博

文献一覧 8, 39

アカエリカイツブリ
Podiceps grisegena

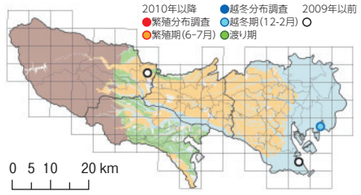
カイツブリ目 カイツブリ科



■**種の特性と生息状況**：体長47cm。頭は三角形で首が長く、嘴は黄色で先が黒い。繁殖期に近づくと首が赤くなる。冬は沿岸に生息し、湖沼や池、河川などにも見られる。水中に潜って魚類、甲殻類、昆虫類などを食べる。本州、四国、九州では冬鳥。北海道では夏鳥。都内では主に沿岸域や大河川の河口付近に見られるが、湖沼や河川の堰の湛水域など、比較的面積が広く、見通しの良い水域でも少数が見られる。

■**生存を脅かす要因**：海岸周辺の埋立てによる生息場所の減少や、生息水域に船が通行することによるかく乱、食物となる沿岸・河口域の魚類の生息数の減少が、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：



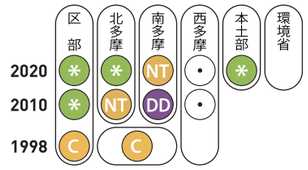
東京都外　2016 年

執筆者 金井裕

文献一覧 46, 54

カンムリカイツブリ
Podiceps cristatus

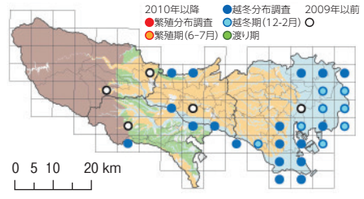
カイツブリ目 カイツブリ科



■**種の特性と生息状況**：体長56cm。日本産カイツブリ科では最大。首は特に長く白色で、嘴はピンク色。湖沼、池、河川、河口、海岸などの広い水域に生息する。水中に潜って魚類、甲殻類、昆虫類などを食べる。本州、四国、九州では冬鳥。本州の一部（青森、秋田、琵琶湖など）では繁殖。都内では主に海上や河口部の広い水域や、一部の湖沼に生息する。大河川の堰の湛水域など比較的面積が広く、見通しの良い水域でも稀に見られる。葛西沖は数百から数千羽が集中する高密度の越冬場所となっている。

■**生存を脅かす要因**：海岸周辺の埋立てによる生息場所の減少や、生息水域に船が通行することによるかく乱、沿岸・河口域の魚類の生息数の減少が、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：区部はかつては個体数が少なかった。近年は個体数が大きく増加しているが、大部分の個体が葛西海浜公園周辺海上に集中している。特定の場所への集中は、病気の発生など生息保全上のリスクがあるので留意種とした。



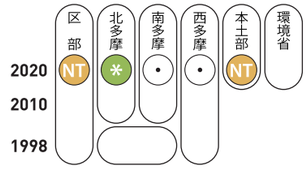
東京都外　2006 年

執筆者 金井裕

文献一覧 46, 54

ハジロカイツブリ
Podiceps nigricollis

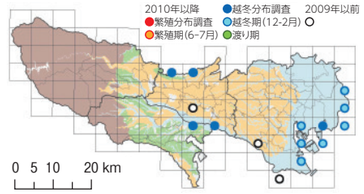
カイツブリ目 カイツブリ科

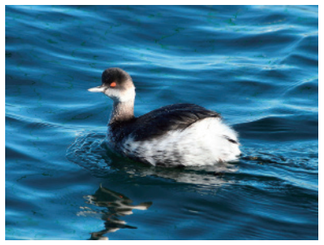


■**種の特性と生息状況**：体長 30cm　冬は沿岸に生息し、湖沼や池、河川などにも見られる。水中に潜って魚類、甲殻類、昆虫類などを食べる。本州、四国、九州では冬鳥。都内では主に沿岸域や大河川の河口付近に見られるが、湖沼や河川の堰の湛水域など、比較的面積が広く、見通しの良い水域でも少数が見られる。

■**生存を脅かす要因**：海岸周辺の埋立てによる生息場所の減少や、生息水域に船が通行することによるかく乱、沿岸・河口域の魚類の生息数の減少が、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：





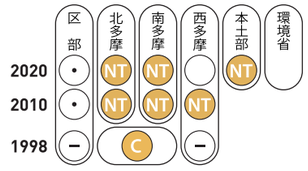
江戸川区　2022 年

執筆者 金井裕

文献一覧 46, 54

アオバト
Treron sieboldii

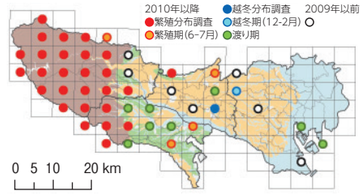
ハト目 ハト科



■**種の特性と生息状況**：体長33cm。雌雄ほぼ同色で全体に緑色。雄の雨覆は赤紫色で識別できる。留鳥または夏鳥として全国の森林に生息し、独特の鳴き声で、姿は見えなくても生息が確認できる。年間を通して各種の木の実を食べる。全国的には1970年代から分布拡大が顕著で、都内でも西多摩で繁殖期の記録が全域で増えている。また、年間を通して記録されているが、その記録の6割は５・６月に集中していて、７・８月には山地でしか記録がなく、丘陵地では見られないとのことである。秋冬期には丘陵地や平地にも下りるので、市街地の公園などでも見かけることがある。

■**生存を脅かす要因**：全国および都内での繁殖期の状況の推移から、現状ではその生息が脅かされる要因は考えられない。

■**特記事項**：塩水を飲む行動が知られているが、当地では不明。

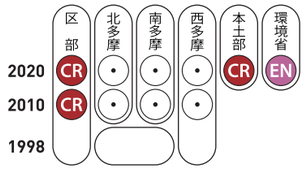


練馬区　2006 年

執筆者 川内博

文献一覧 8, 10, 40

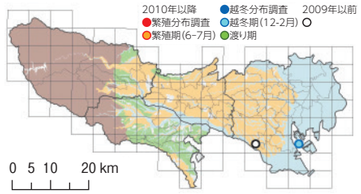
サンカノゴイ
Botaurus stellaris
ペリカン目 サギ科



■**種の特性と生息状況**：体長70cm。ずんぐりした体形の大型のサギ類。体色はバフ色地に黒褐色の頭頂線と顎線、背面に縦斑がある。湿地、湖沼、河川の湿性草地に生息する。魚類や甲殻類、カエル類などを食べる。北海道では夏鳥。本州、四国、九州では冬鳥。本州の一部（茨城、千葉、滋賀）では繁殖。都内では海岸の埋立地や河川のヨシやガマが生育する湿性草地で稀に見られる。

■**生存を脅かす要因**：河川改修や植生遷移の進行、アレチウリの繁茂などによる、ヨシやガマが生育する広大な湿地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。河川改修などの際にはヨシやガマが生育する湿地環境を可能な限り保全することや、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。

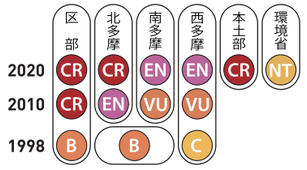
■**特記事項**：



執筆者 金井裕
文献一覧 48, 54

江戸川区　2018 年

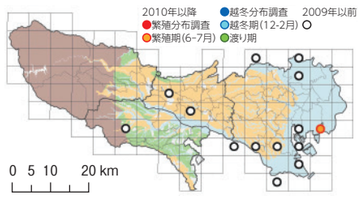
ヨシゴイ
Ixobrychus sinensis
ペリカン目 サギ科



■**種の特性と生息状況**：体長36.5cm。サギ類の中では最小。背面は茶褐色で、飛ぶと黒褐色の風切や初列雨覆が目立つ。湖沼、河川のヨシなどが生育する湿地とその周辺に生息し、繁殖する。魚類やカエル類、昆虫類などを食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。都内では海岸の埋立地や河川のヨシやガマが生育する草地で見られる。渡りの時期には、公園の池などでも見られる。2016-2021年に行われた東京都鳥類繁殖分布調査では繁殖の可能性の高い記録はなかった。

■**生存を脅かす要因**：河川改修や植生遷移の進行、アレチウリの繁茂などによる、ヨシやガマが生育する湿地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。ブラックバスなどの外来魚の増加に伴う小魚の減少もその原因と考えられている。

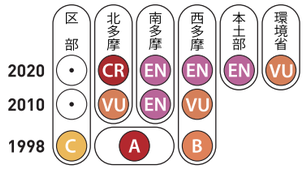
■**特記事項**：河川改修などの際にはヨシやガマが生育する湿地環境を可能な限り保全することや、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。外来魚対策も重要である。



執筆者 植田睦之
文献一覧 8, 10, 33, 45

東京都外　2009 年

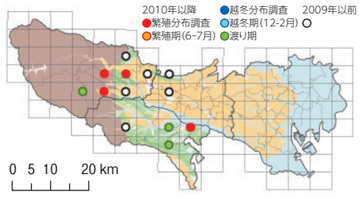
ミゾゴイ
Gorsachius goisagi
ペリカン目 サギ科



■**種の特性と生息状況**：体長39cm。頭部は栗色で、暗褐色の背面や雨覆に淡色斑がある。丘陵から山地で樹上に営巣する。渓流や湿地で甲殻類やミミズ類、爬虫類などを食べる。本州、四国、九州では夏鳥で、九州では少数が越冬する。南多摩と西多摩の丘陵から山地の渓畔林や谷戸の斜面林で繁殖しているが、北多摩では近年の状況が不明である。全国的に減少傾向にあり、西多摩では営巣地の消失が報告されている。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採、河川開発、湿地開発、市街地開発、道路建設、渡りの目的地（繁殖地・越冬地）および経路の環境悪化。急傾斜地での防災・災害復旧のための工事が増加しており、工事に際しては配慮が必要である。

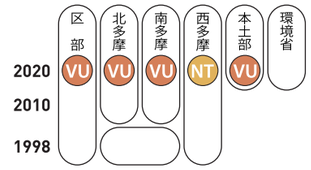
■**特記事項**：区部では渡りの時期の記録があるが、通過個体と考えられることから「非分布」として扱った。



執筆者 御手洗望
文献一覧 15, 25, 61, 88

東京都　2014 年

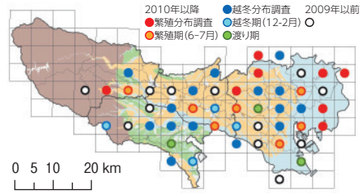
ゴイサギ
Nycticorax nycticorax
ペリカン目 サギ科



■**種の特性と生息状況**：体長58cm。雌雄同色で、成鳥の頭と背は濃紺色で頭部に2本の飾り羽がある。幼鳥はホシゴイと呼ばれ、羽色は異なる。ほぼ全国に留鳥または夏鳥として生息し、湖沼や池、川、海岸などで、夜間、魚類や両生類、ザリガニ、水生昆虫類などを捕る。全国的に減少傾向が見られ、都内でも、南多摩・北多摩の営巣地が消失または衰退している。その原因の一つは、主要な食物である小型の魚の減少が挙げられていている。また、多摩川流域では大きなコロニーが確認されていたが、これも近年見られなくなっている。

■**生存を脅かす要因**：小型の魚類が減少している原因としては、オオクチバスやコクチバスなどの外来魚の増加。

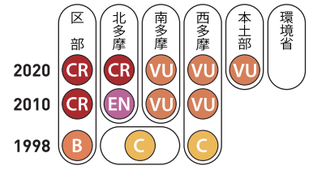
■**特記事項**：



執筆者 川内博
文献一覧 8, 10

練馬区　2001 年

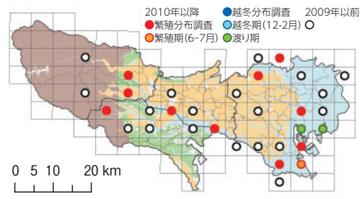
ササゴイ
Butorides striata
ペリカン目 サギ科



■**種の特性と生息状況**：体長52cm。雌雄同色で、成鳥の頭部は青みがかった黒色で冠羽がある。九州以北の全国に夏鳥として渡来する。川や池などの水辺で小型の魚類やカエル類、昆虫類などを捕る。かつては多摩川沿いの河川敷で営巣がよく見られたが、近年は観察例が少なくなっている。逆に以前は見られなかった区部で営巣が複数個所で確認されている。

■**生存を脅かす要因**：区内の営巣場所はいずれも池のある小さな緑地で、付近で遊ぶ親子や散歩をする人との距離が近い場所である。カメラマンの接近によるストレスなども大きいと思われる。多摩川河川敷での生息数・営巣数の減少については、外来の魚の増加により小型の魚の減少によるところが大きいと思われる。

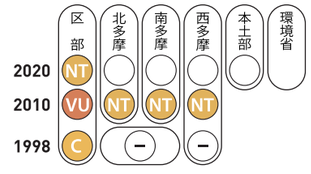
■**特記事項**：



執筆者 川内博
文献一覧 8, 61

2005 年

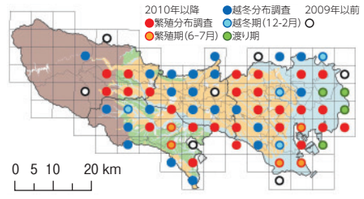
ダイサギ
Ardea alba
ペリカン目 サギ科



■**種の特性と生息状況**：体長90cm。全身が白い。夏羽は嘴が黒く、胸や背に長い飾り羽がある。冬羽は嘴が黄色くなる。水田、湿地、河川、湖沼、池、河口、干潟などの浅い水域で採食し、人やカラス類によるかく乱の少ない樹林で集団で営巣する。魚類や甲殻類、カエル類、昆虫類などを食べる。本州では漂鳥。四国、九州では留鳥。都内では山間部を除く河川、水路、湖沼、池、干潟などで周年見られるが、営巣場所は限られる。

■**生存を脅かす要因**：埋立てによる干潟など浅い水域の減少、河川改修、水田の減少による採食地の減少や、営巣場所における人・カラス類によるかく乱の増加が、本種の生存を脅かす要因である。採食地となる水域を可能な限り保全することや、営巣地では必要に応じて人為的かく乱を抑制するための注意喚起を行うことが望ましい。

■**特記事項**：営巣場所が少ないことがランク判定の根拠となっている。

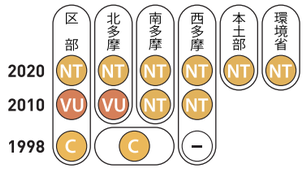


執筆者 金井裕
文献一覧 8, 54

あきる野市　2004 年

チュウサギ
Egretta intermedia

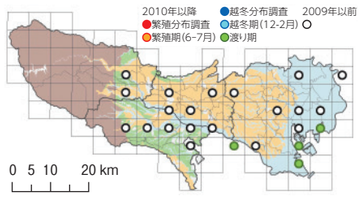
ペリカン目
サギ科



■**種の特性と生息状況**：体長69cm。雌雄とも全身白色で、夏羽の嘴は黒く、背にみの状の飾り羽、胸にも小さな飾り羽が出る。冬には嘴が黄色くなる。九州から本州にかけての水田や草地、河川などに夏鳥として渡来する。主に草地・水田・湿地・湖沼・河川などに生息し、魚類や昆虫などを捕る。コサギやアオサギなどと一緒に採食している。1970年代までは皇居内で繁殖していたが、近年は春秋の渡りの時期に記録され、繁殖記録はない。

■**生存を脅かす要因**：渡りの時期には河川敷や湿地、海岸線、水田などで観察されている。埋立地の減少や海岸線の堤防の完備、水田の減少などで、この鳥が好む環境が減っている。

■**特記事項**：

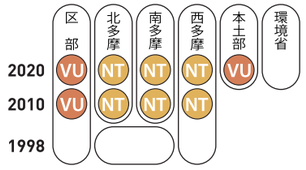


執筆者 川内博

文献一覧 10, 61

コサギ
Egretta garzetta

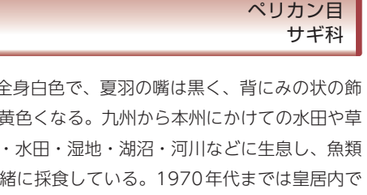
ペリカン目
サギ科



■**種の特性と生息状況**：体長61cm。全身が白いく足指の黄色が目立つ。夏羽は後頭と背や胸に長い飾り羽が出る。水田、河川、湖沼、干潟など浅い水辺で採食し、人やカラス等捕食者によるかく乱の少ない樹林に集団で営巣し、休息する。魚類やカエル類、甲殻類や昆虫類などを食べる。本州、四国、九州では留鳥または漂鳥。都内では山間部を除く河川、水路、湖沼、池、干潟などで周年見られるが、営巣場所は極めて少ない。

■**生存を脅かす要因**：埋立てによる干潟など浅い水域の減少、河川改修、水田の減少による採食地および食物の水生生物の減少や、営巣場所における人・カラス類によるかく乱の増加が、本種の生存を脅かす要因である。採食地となる水域を可能な限り保全することや、営巣地では必要に応じて人為的かく乱を抑制するための注意喚起を行うことが望ましい。

■**特記事項**：営巣場所が少ないことがランク判定の根拠となっている。

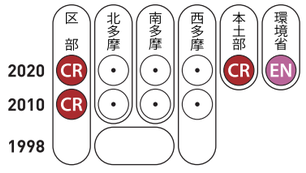


執筆者 金井裕

文献一覧 8, 54

クロツラヘラサギ
Platalea minor

ペリカン目
トキ科

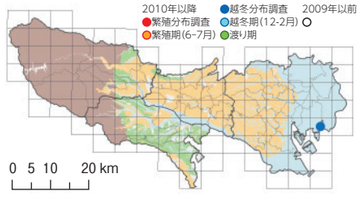


■**種の特性と生息状況**：体長73.5cm。全身が白く、嘴と足が黒い。嘴から額、眼先の皮膚の裸出部は黒く、嘴は長く、へら状をしている。干潟、水田、湿地、河川、湖沼などに生息し、昆虫類や甲殻類、魚類などを食べる。海岸の砂洲や防波堤で休息する。主に九州、中国地方、南西諸島で冬鳥。都内では干潟環境が残っている場所で見られることがある。

■**生存を脅かす要因**：干潟の減少に伴う採食場所の減少、釣り人などによる休息場所のかく乱などが、本種の生存を脅かす要因である。現存する干潟の保全や、必要に応じて釣り人への注意喚起を行うことが望ましい。

■**特記事項**：

江戸川区　2019 年

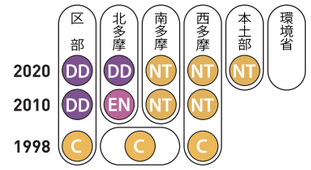


執筆者 金井裕

文献一覧 1, 54

クイナ
Rallus aquaticus

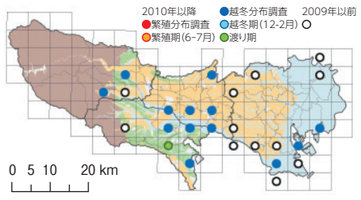
ツル目
クイナ科



■**種の特性と生息状況**：体長29cm。雌雄同色で、全体に茶系の羽色で顔から胸にかけて青灰色。北海道、本州北部では留鳥または漂鳥で、東京地方以南では主に冬鳥。湖沼や池、川、埋立地のヨシやマコモなどが密生する湿地の草原に生息する。単独または2羽で地面を歩きながら植物の種子や昆虫類、両生類、魚類などを食べる。都内各地の池や川に冬鳥として渡来し、草むらの中で生活し、人や犬などが近づくとすぐ隠れてしまう。

■**生存を脅かす要因**：警戒心の強い鳥で、好む生息環境が決まっているので、適した環境が開発等で消失したり、手が加えられることで生存が脅かされる確率が高い。河川改修や土地改良工事などの場合、本種の生息を事前に確認し、計画を立てる必要がある。

■**特記事項**：

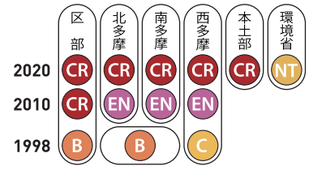


執筆者 川内博

文献一覧 43

ヒクイナ
Porzana fusca

ツル目
クイナ科

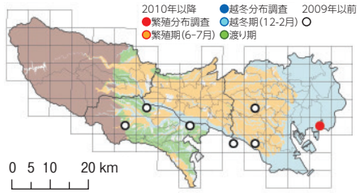


■**種の特性と生息状況**：体長22.5cm。成鳥は額や顔、腹が赤褐色で、頭頂から尾までの上面は暗緑褐色。平地から低山地の河川、湖沼、湿地、水田などに生息し、植物の種子や昆虫類、カエル類、小魚などを食べる。北海道、本州、四国、九州北部では夏鳥。九州南部、南西諸島では留鳥。都内では海岸の埋立地や河川のヨシやガマが生育する湿地に生息する。以前は繁殖もしていたが、近年は一時的に観察されるだけで繁殖記録は稀である。

■**生存を脅かす要因**：河川改修や海岸の埋立、水田の減少による採食地および食物の水生生物の減少や、営巣環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。採食地および営巣地となる湿地を可能な限り保全・再生することが必要である。

■**特記事項**：近年、越冬域が北上している。

板橋区　2021 年

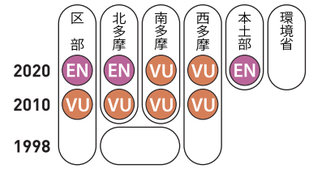


執筆者 金井裕

文献一覧 8, 48, 54

バン
Gallinula chloropus

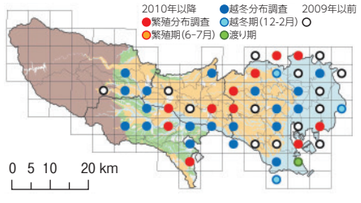
ツル目
クイナ科



■**種の特性と生息状況**：体長32.5cm。成鳥は全体に黒色だが、脇には白い縦斑がある。額板と嘴は赤く、嘴の先は黄色い。湖沼、池、河川、湿原、水田等に生息し、植物の種子や昆虫類、貝類、ミミズ類などを食べる。北海道、本州（東北）では夏鳥。本州（関東以南）、四国、九州、南西諸島では留鳥。都内では河川の河道跡などの池沼や堰の湛水域、公園や住宅団地の池など、水際にヨシやガマが生育する水辺で見られるが、生息確認地点は減少を続けている。

■**生存を脅かす要因**：水際部の改修などによるヨシやガマが生育する湿地の減少や、水質の悪化に伴う食物となる生物の減少、カラス類やオオクチバスなどの増加によるふ化直後のヒナの捕食の増加などが、本種の生存を脅かす要因である。生息地では、営巣場所となるヨシやガマの生育する湿地の保全や、水質の改善による食物資源の回復を図ることが望ましい。

■**特記事項**：

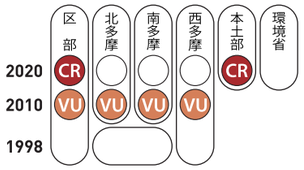


練馬区　2002 年

執筆者 金井裕

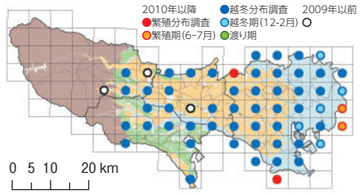
文献一覧 8, 54

オオバン
Fulica atra
ツル目 クイナ科



■**種の特性と生息状況**：体長39cm。成鳥は全身が黒く、嘴と額板は白い。主にヨシなどが生育する湖沼、池、河川、水田などに生息し、水草の葉、茎、種子や昆虫類、貝類、甲殻類などを食べ、ガマやヨシに営巣する。北海道、本州（東北北部）では夏鳥。本州（東北南部以南）、四国、九州では留鳥。南西諸島では冬鳥。都内では沿岸域の穏やかな海上、河川敷の池沼、堰の湛水域やダム湖、公園の池など、水際にヨシやガマが生育する比較的開放的な水域で見られる。近年は繁殖期には記録が少ないが、越冬数は増加している。

■**生存を脅かす要因**：水際部の改修などによるヨシやガマが生育する湿地の減少や、水質の悪化に伴う食物となる生物の減少、ブラックバスなどの増加によるふ化直後の捕食などが、本種の生存を脅かす要因である。生息地では、営巣場所となるヨシやガマの生育する湿地の保全や、水質の改善による食物資源の回復を図ることが望ましい。

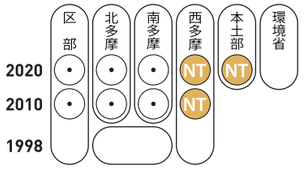


■**特記事項**：ランクは繁殖状況による評価

執筆者 金井裕 文献一覧 8, 54

東京都外　2003 年

ジュウイチ
Hierococcyx hyperythrus
カッコウ目 カッコウ科

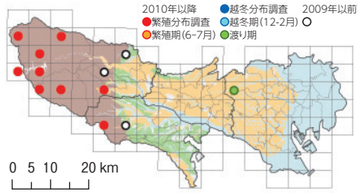


■**種の特性と生息状況**：体長 32 cm。成鳥は頭部から背、翼は灰黒色で、胸から腹は淡橙褐色。尾は灰色で数本の黒帯がある。日本産カッコウ類では最も標高の高い山地にまで生息し、ヒタキ科の鳥を宿主とする。主に昆虫類を食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。都内では5月に西多摩に渡来し繁殖する。東京都本土部での宿主についての知見はほとんどない。春・秋の渡りの時期は、都市部の公園などの樹林でも見られる。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採・シカの食害・渡りの目的地（繁殖地・越冬地）および経路の環境悪化　オオルリ・コルリ・ルリビタキ・コマドリなど、山地の樹林に生息する宿主となる鳥の減少が、本種の生存を脅かす要因と考えられる。

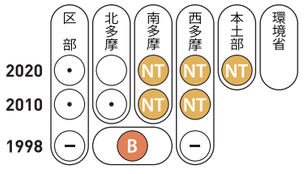
■**特記事項**：

執筆者 田畑伊織
文献一覧 8, 16



東京都外　2000 年

ホトトギス
Cuculus poliocephalus
カッコウ目 カッコウ科

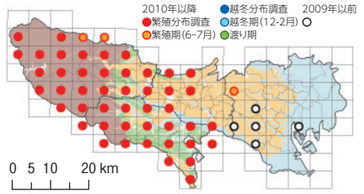


■**種の特性と生息状況**：体長27.5cm。成鳥は頭部から背、上尾筒、胸は暗青灰色で、翼と尾は黒褐色。腹は白く、黒色横斑がある。平地から亜高山帯の樹林に生息し、主に昆虫類を食べる。北海道、本州、四国、九州、南西諸島で夏鳥。都内では山地から丘陵地、平地の樹林に生息し、繁殖していて、宿主はウグイスと考えられる。春・秋の渡りの時期は、公園などの樹林でも見られる。都内では1970年代から1990年代にかけて急減したが、2010年代にかけて分布を拡大している。それにはウグイスの平地部への分布拡大が影響している可能性が高い。

■**生存を脅かす要因**：シカの影響でウグイスが減少した場所ではホトトギスも減少していることが報告されており、東京でも今後そうした影響が出てくる可能性がある。

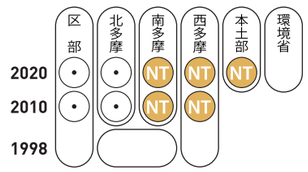
■**特記事項**：現存する生息地の樹林を可能な限り保全することや、渡りの時期には、公園の樹林などで毛虫を採食することがあるため、薬剤散布を控えることが望ましい。

執筆者 植田睦之
文献一覧 8, 10



2010 年

ツツドリ
Cuculus optatus
カッコウ目 カッコウ科

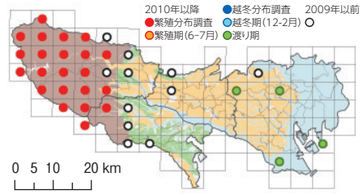


■**種の特性と生息状況**：体長 32.5 cm。成鳥は頭部から背、上尾筒、胸は青灰色で、翼と尾は黒褐色。腹は白く、黒色横斑がある。宿主は低山から亜高山帯に生息するムシクイ類。樹林に生息し、主に昆虫類を食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。都内では南多摩および西多摩の丘陵地から山地の樹林に４月に渡来する。東京都本土部での宿主についての知見はほとんどない。春・秋の渡りの時期は、都市部の公園などの樹林でも見られる。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採・シカの食害・渡りの目的地（繁殖地・越冬地）および経路の環境悪化。宿主となるセンダイムシクイ・メボソムシクイなど樹林に生息するムシクイ類の減少が、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

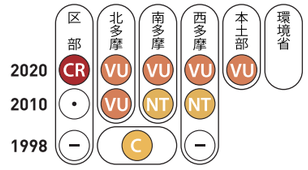
■**特記事項**：

執筆者 田畑伊織
文献一覧 8, 16, 61, 62



2009 年

カッコウ
Cuculus canorus
カッコウ目 カッコウ科

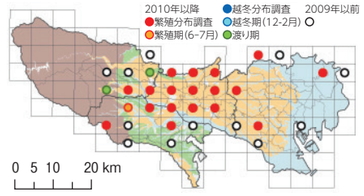


■**種の特性と生息状況**：体長35cm。成鳥は頭部から背、上尾筒、胸は青灰色で、翼と尾は黒褐色。体下面は白く、細い黒色横斑がある。林縁や草原などの開けた環境を好み、様々な鳥を宿主とする。主に昆虫類を食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。都内では西多摩、南多摩、北多摩の丘陵地から平地一帯、河川敷などの樹林や草地に生息し、少数が繁殖をしている。全国では、1970年代から1990年代にかけて急減し、その後やや回復傾向にある。都内でも同様の傾向にあると考えられる。東京都本土部での宿主についての知見はほとんどないがホオジロ、オオヨシキリ、モズ、オナガ、ヒヨドリなどの可能性がある。春・秋の渡りの時期は、都市部の公園などの樹林でも見られる。

■**生存を脅かす要因**：草地などに生息する宿主となる種の減少が、本種の生存を脅かす要因である。

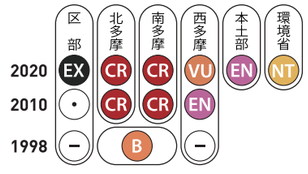
■**特記事項**：宿主の生息する河川敷のヨシ原や耕作地の草地、疎林を可能な限り保全することや、渡りの時期には、公園の樹林などで毛虫を採食することがあるため、薬剤散布を控えることが望ましい。

執筆者 植田睦之
文献一覧 8, 10



2010 年

ヨタカ
Caprimulgus indicus
ヨタカ目 ヨタカ科

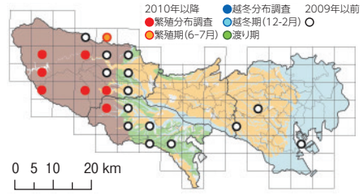


■**種の特性と生息状況**：体長29cm。成鳥は全身がほぼ黒褐色で、複雑な虫食い状の斑紋がある。平地から山地の樹林と草地が混在する場所に生息し、飛翔性昆虫類を食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。西多摩では山林、伐採地、採石場、河川敷などに広く生息するが、市街地に近い地域では見られなくなっている。北多摩・南多摩では繁殖期にごく少数が観察されるか、渡り途中の個体が観察されるのみである。区部では昭和初期に記録があるが現在は絶滅したと考えられる。

■**生存を脅かす要因**：管理放棄、渡りの目的地（繁殖地・越冬地）および経路の環境悪化。餌環境の悪化も一因と考えられる。

■**特記事項**：近年、山地では森林施業による伐採地が増加しているため、一部は生息状況が改善していると考えられるが、分布域は縮小傾向にある。

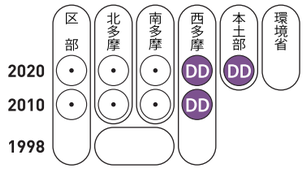
執筆者 御手洗望
文献一覧 15, 16, 50, 61, 77



東京都　2020 年

アマツバメ
Apus pacificus

アマツバメ目
アマツバメ科



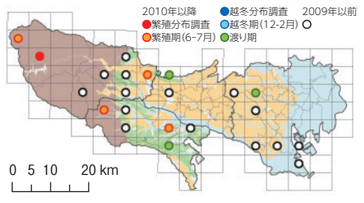
■**種の特性と生息状況**：体長20cm。成鳥は体の大部分が黒色で、腰が白い。翼は細長く鎌形。海岸から高山帯まで生息し、飛翔性昆虫類を食べる。山地の断崖や海岸の岸壁の亀裂などに営巣する。北海道、本州、四国、九州、南西諸島（北部）で夏鳥。都内では西多摩で繁殖期に生息が確認されることがある。春・秋の渡りの時期には上空を群れで飛ぶ姿が見られる。

■**生存を脅かす要因**：渡りの目的地（繁殖地・越冬地）および経路の環境悪化。生息状況が不明であるため、詳細な生息状況の把握が望まれる。

■**特記事項**：

執筆者 田畑伊織

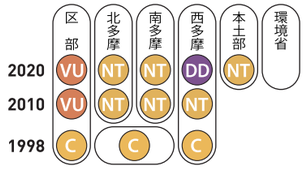
文献一覧 8, 16



東京都外　2010 年

ヒメアマツバメ
Apus nipalensis

アマツバメ目
アマツバメ科



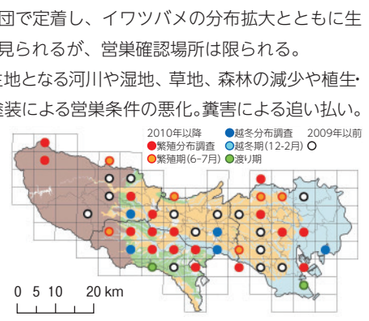
■**種の特性と生息状況**：体長13cm。成鳥は体の大部分が黒色で、喉から頸と腰が白く翼は鎌形。関東以西の本州、四国、九州に留鳥として生息する。主に平地から低山地の開けた場所で、飛翔性昆虫類を空中で捕食する。コンクリートの高架下やビルの軒下などの建築物に羽毛を集めて巣とするが、イワツバメの巣を巣台として利用することが多い。東京都では1970年代から、多摩川の橋脚などでイワツバメのコロニーに集団で定着し、イワツバメの分布拡大とともに生息地を広げ、沿岸域や都心部の高層ビル街でも見られるが、営巣確認場所は限られる。

■**生存を脅かす要因**：食物の飛翔性昆虫類の発生地となる河川や湿地、草地、森林の減少や植生・環境悪化による昆虫類の減少。建築物の構造や塗装による営巣条件の悪化。糞害による追い払い。

■**特記事項**：イワツバメの巣を営巣やねぐらとすることが多いので、イワツバメの減少は本種の減少要因ともなる。営巣分布については不明点が多く、今後情報の蓄積が望まれる。

執筆者 金井裕・川内博

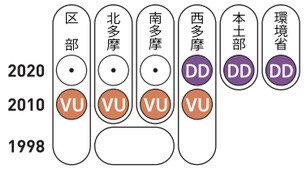
文献一覧 17, 30, 45, 57



東京都外　2010 年

ケリ
Vanellus cinereus

チドリ目
チドリ科



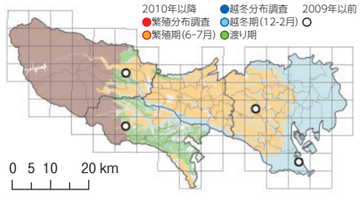
■**種の特性と生息状況**：全長36cm。大型のチドリ類。雌雄同色。頭部から上胸にかけて青灰色、背から上面は灰褐色で腹部は白い。初列風切の黒色、次列風切の白色が飛翔時に目立つ。尾は白色で黒帯がある。主に東アジア地域に分布する。平野部の農耕地や河川敷に生息し、日本では東北地方から西日本にかけて局所的に生息している。繁殖期テリトリーの侵入者に威嚇を行う。昆虫などの小動物を採食する。2016-2021年に行われた東京都鳥類繁殖分布調査では繁殖の可能性のある記録はなかった。

■**生存を脅かす要因**：水田などの農耕地、河川敷の草地などの生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が極端に少ない。また耕起や湛水による繁殖の失敗が報告されており、農事暦の変化なども脅威になりえる。

■**特記事項**：水田などの圃場整備の際に湿地環境をできるだけ残し保全することが望ましい。また、農耕地で繁殖することが多く、繁殖期間中に近づかないなどの配慮が必要である。

執筆者 守屋年史

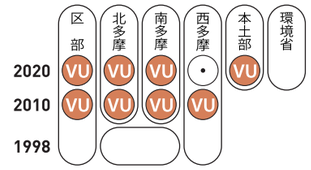
文献一覧 8, 44, 83



東京都外　2009 年

ムナグロ
Pluvialis fulva

チドリ目
チドリ科



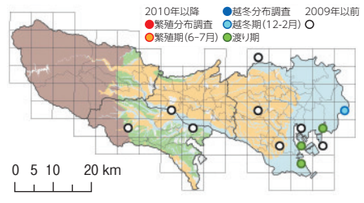
■**種の特性と生息状況**：全長24cm。大型のチドリ類。雌雄ほぼ同色。成鳥夏羽は顔から腹部までが黒く、額から側脇まで白色、背面は黄色、白色、黒色の斑模様。冬羽は全体に淡褐色となり、背面には黄褐色斑がある。主に水田、畑、草地に生息し、干潟にも渡来する。昆虫などの小動物を採食する。日本では主に旅鳥で、春と秋の渡り期に全国的にみられる。南西諸島や小笠原諸島では越冬する。東京湾奥では少数の越冬記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河川敷、水田や畑、草地などに生息するため生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が極端に少ない。

■**特記事項**：繁殖地に渡る前に集結する日本の水田の重要性が指摘されている。水田などの圃場整備の際に、できるだけ湿地環境が保全されるように整備することが望ましい

執筆者 守屋年史

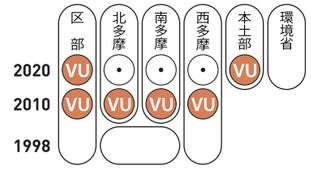
文献一覧 84, 87



東京都外　2010 年

ダイゼン
Pluvialis squatarola

チドリ目
チドリ科



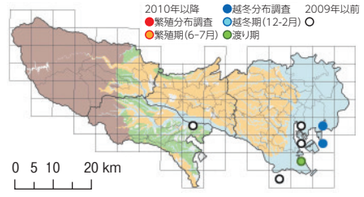
■**種の特性と生息状況**：全長29cm。大型のチドリ類。雌雄ほぼ同色。成鳥夏羽は顔から腹部までが黒く、額から側脇まで白色、背面は白色、黒色の斑模様。冬羽は全体に灰褐色となり、腹部は白色に薄墨色の縦斑がある。主に干潟、河口に生息する。ゴカイなどの小動物を採食する。日本では旅鳥・冬鳥で、春と秋の渡り期には全国的にみられ、関東以南の干潟では越冬する。東京湾奥ではほぼ周年記録がある。

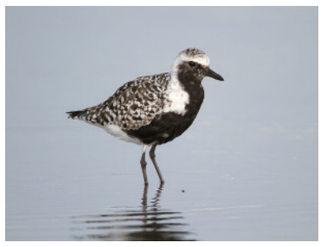
■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

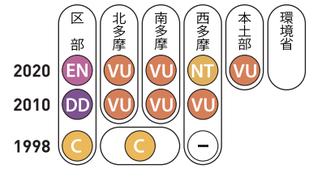




東京都外　2010 年

イカルチドリ
Charadrius placidus

チドリ目
チドリ科



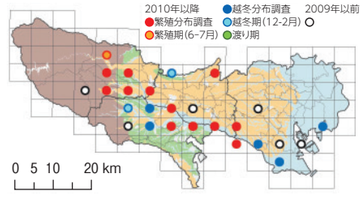
■**種の特性と生息状況**：全長21cm。雌雄ほぼ同色。背は灰褐色、腹部は白色、頭部と胸には黒色の帯がある。成鳥の夏羽では、雄は眼の付近の羽が雌より黒くなり、頭部前面の黒色の帯は雌より広い。冬羽では頭部前面にバフ色の羽が多くなる。主に東アジア地域に分布する。国内では主に留鳥だが一部は渡り、北海道では夏鳥である。河川中流域の砂礫地を好んで生息し、冬期には河川の泥地や水田などでも見られる。小型の水生昆虫などを捕える。2016-2021年に行われた東京都鳥類繁殖分布調査では、多摩川の中流域、柳瀬川で周年記録があり、繁殖も確認されている。

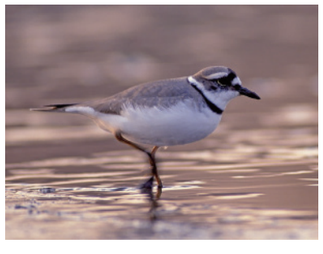
■**生存を脅かす要因**：河川中流の礫河原などで生息するため、河川改修や植生遷移など生息環境の減少や変化、人や車などの立ち入りなどのかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：河川改修の際に、河原の保全、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。また、繁殖期の立入り制限、ネコなどの捕食者対策も重要である。

執筆者 守屋年史

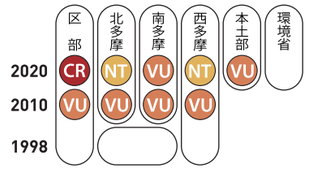
文献一覧 8, 12





コチドリ
Charadrius dubius

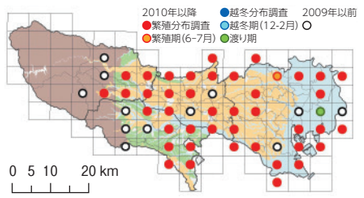
チドリ目
チドリ科



種の特性と生息状況：全長16cm。雌雄はほぼ同色。成鳥夏羽は、背面は灰褐色、腹部は白色、頭部と胸には黒色の帯がある。雌雄ともに黄色のアイリングが目立つ。冬羽は、頭部の黒色部が暗褐色となり、額と胸の帯は目立たなくなる。干潟、河川、農地など植生のまばらな場所に生息し、工事現場などの裸地でも繁殖を行うことがある。越冬期には水田なども利用する。水際や湿地で昆虫などを捕食する。九州以北に夏鳥として渡来し、本州中部以南で少数が越冬する。2016-2021年に行われた東京都鳥類繁殖分布調査では、河川、沿岸部を中心に低地から丘陵地にかけて広く繁殖の記録がある。

生存を脅かす要因：河川、干潟や砂浜などで生息するため、河川ら海岸改修や植生遷移など生息環境の減少や変化、人や車などの立ち入りなどのかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。

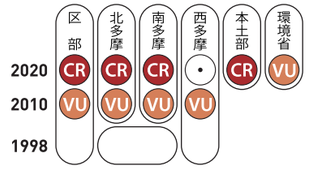
特記事項：河川改修の際に、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。また、繁殖期の立ち入り制限、捕食者対策も重要である。



執筆者 守屋年史
文献一覧 8, 18

シロチドリ
Charadrius alexandrinus

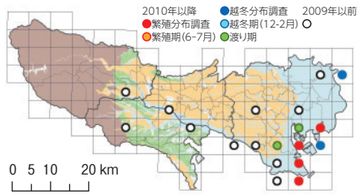
チドリ目
チドリ科



種の特性と生息状況：全長17cm。成鳥雄の夏羽では、前頭部に黒斑があり、後頭部は茶色。頸部は白色。背面は灰褐色、喉から腹部は白色となる。雄の冬羽は、前頭部の黒斑がなくなり、後頭部、背、側胸は一様に灰褐色となる。雌は雄の冬羽に似る。北海道から南西諸島まで留鳥として周年観察されるが、北海道では主に夏鳥。砂浜、河川の中洲などの砂地、砂礫地で繁殖し、砂浜、河口の干潟、河川、湖沼などに渡り期や越冬期に生息する。地表にいる小動物を捕食する。全国的に個体数が減少している。2016-2021年に行われた東京都鳥類繁殖分布調査では、周年記録があり、沿岸部の人口海浜、埋立地などで少数の繁殖記録がある。

生存を脅かす要因：沿岸の砂浜や砂礫地などで生息するため、海岸整備、植生遷移など生息環境の減少や変化、人や車などの立ち入りなどのかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。

特記事項：干潟や砂浜を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、繁殖期の立入り制限、ネコなどの捕食者対策も重要である。

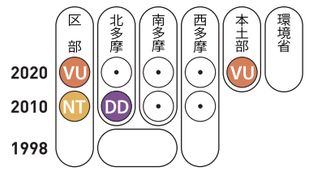


江戸川区　2021 年

執筆者 守屋年史
文献一覧 8, 74

メダイチドリ
Charadrius mongolus

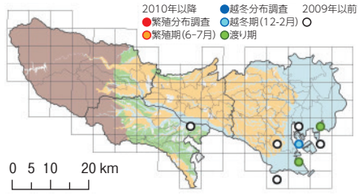
チドリ目
チドリ科



種の特性と生息状況：全長20cm。雌雄ほぼ同色。成鳥雄夏羽は後頭部から胸にかけて明るい橙色。額、過眼線はつながり黒色。背面は灰褐色で、腹部は白色。雌はより淡色になる。冬羽は橙色、黒色部分が灰褐色になる。主に旅鳥として、日本国内の干潟、砂浜、河川などの砂泥地に春季、秋季の渡り期に渡来する。関東以南では少数が越冬する。沖縄では冬鳥。地表や地中にいる小動物を捕食する。東京都では、渡り期に沿岸部の人工湿地などで記録がある。

生存を脅かす要因：沿岸の砂浜や干潟などで生息するため、海岸整備や植生遷移による生息環境の減少や変化、人の立ち入りなどのかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

特記事項：河口部や沿岸部の干潟や砂浜を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。

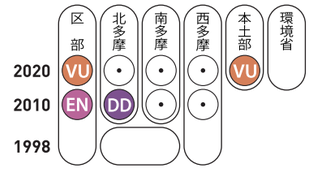


東京都外　2017 年

執筆者 守屋年史
文献一覧 53, 64

ミヤコドリ
Haematopus ostralegus

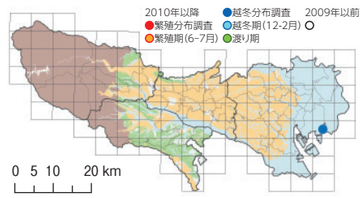
チドリ目
ミヤコドリ科



種の特性と生息状況：全長45cm。ミヤコドリ科に属する。大型で頭部から胸部、背面が黒色、腹部は白色。嘴、足が赤橙色で目立つ形態を持つ。旅鳥、冬鳥として干潟、海岸に渡来する。東京湾、伊勢湾、博多湾などでは越冬し、近年、一部で越夏する個体も観察されている。砂泥質の海岸で、二枚貝類を好んで捕食する。国内では1970年代に希であったが、近年越冬個体数が増加しており、それに伴って東京湾奥部は国内の主要な越冬地となってきている。東京都では、東京湾の個体群が沿岸の人工海浜で冬期に観察される。

生存を脅かす要因：沿岸の砂浜や干潟などで生息するため、海岸整備による生息環境の減少や変化、休息場所への人の立入りなどのかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

特記事項：河口部や沿岸部の干潟や砂浜を可能な限り保全することが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。

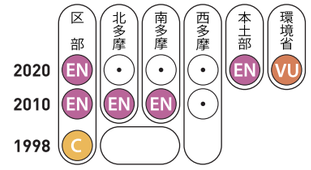


江戸川区　2013 年

執筆者 守屋年史
文献一覧 34, 53

セイタカシギ
Himantopus himantopus

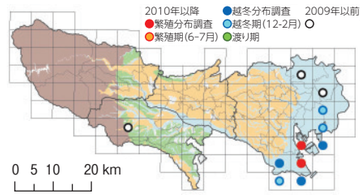
チドリ目
セイタカシギ科

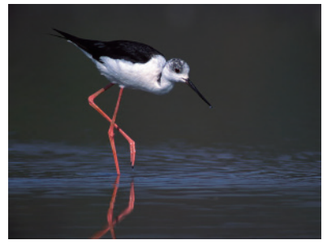


種の特性と生息状況：全長37cm。非常に長い赤い脚と、細長い嘴が特徴的。成鳥雄夏羽は、頭頂から後頸が黒色、背面が光沢のある黒色、前頭部から腹部にかけて白色。雌は背面の黒色に光沢があまりない。主に旅鳥として、全国の干潟、水田、湖沼、湿地に渡来する。1970年代に国内で初めて繁殖が確認され、局地的に繁殖している。水生昆虫や水生生物、小魚を捕食する。全国的に旅鳥としての個体数は増加傾向にあるが、繁殖個体の増減傾向は不明である。2016-2021年に行われた東京都鳥類繁殖分布調査では、沿岸部で周年記録があり、人工湿地や埋立地で少数の繁殖が確認されている。

生存を脅かす要因：河川や池沼などの淡水湿地で生息するため、河川改修、湖沼や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では極端に生息環境が少ない。

特記事項：繁殖分布は局地的であり、繁殖地は立ち入りを避けることが重要。圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。

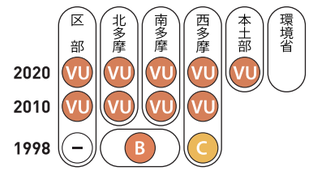




執筆者 守屋年史
文献一覧 10, 53, 64

ヤマシギ
Scolopax rusticola

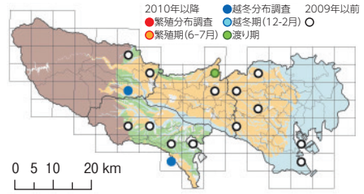
チドリ目
シギ科



種の特性と生息状況：全長34cm。太った体型の中型のシギ。頸と脚が短く、嘴が長い。雌雄同色。全身が茶褐色。後頭部に4本の横斑がある。東日本および伊豆諸島で繁殖し、西日本では主に越冬する。繁殖期には林内で営巣し、林内や草地で採食する。夜行性で昼間は林内などで休息するが、夜間には河川敷や草地などで採食する。主に動物食でミミズを好む。東京都では、平地や丘陵地で主に冬期に記録があり、2016-2021年に行われた東京都鳥類繁殖分布調査では、八丈小島で繁殖期の生息が確認されている。

生存を脅かす要因：河畔林や雑木林、農地などで生息するため、河川改修、森林や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。

特記事項：河川改修、森林開発などの際には河畔林、雑木林などを可能な限り保全することが望ましい。狩猟鳥であるが、個体数は正確に把握されておらず、資源管理の観点からもモニタリングが必要である。

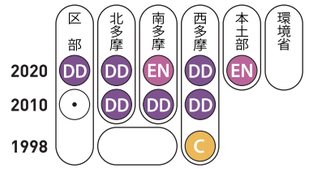


東京都外　2019 年

執筆者 守屋年史
文献一覧 8, 32

アオシギ
Gallinago solitaria

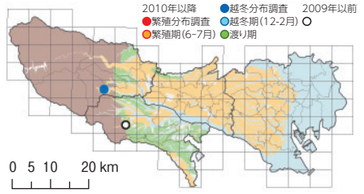
チドリ目
シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長31cm。雌雄同色。横長で太い体型の中型のシギ。頸と脚が短く、嘴が長い。全体に茶褐色で、顔や腹部の白色は灰色味がある。冬鳥として渡来し、山間部の渓流や護岸の小河川などの浅い水場に渡来する。水生昆虫や水生生物を捕食する。東京都では、台地から丘陵地にかけて冬期に記録がある。

■**生存を脅かす要因**：丘陵部の渓流や護岸された小河川などで生息するため、河川改修や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：河川改修や圃場の用水路の改修などの際には、水生生物や底泥中の小動物が生息できるような湿地環境を可能な限り保全・回復させることが望ましい。



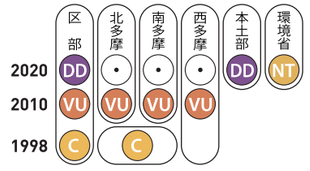
東京都外　2006 年

執筆者　守屋年史

文献一覧　53, 64

オオジシギ
Gallinago hardwickii

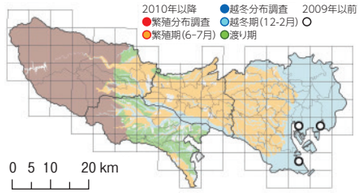
チドリ目
シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長30cm。雌雄同色。体型は横長で太い中型のシギ。頸と脚が短く嘴が長い。日本のジシギ類では最大。全体に茶褐色で、腹部は白色。形態は、他のジシギ類と非常によく似ており、野外での識別は難しい。東アジア～オーストラリア地域に生息する。主に旅鳥として農地や湿原に渡来し、北海道や本州の高原では夏鳥として繁殖する。ミミズや昆虫類などの土壌動物を捕食する。東京都では、沿岸部を中心に記録があるが観察時期などは不明、近年は記録がない。

■**生存を脅かす要因**：農地や湿原などで生息するため、河川改修や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：休耕田などの内陸湿地の減少に影響を受けており、圃場整備や宅地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。

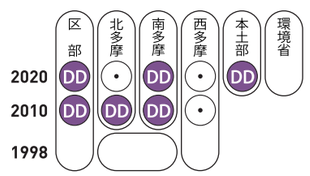


執筆者　守屋年史

文献一覧　13, 53, 64

チュウジシギ
Gallinago megala

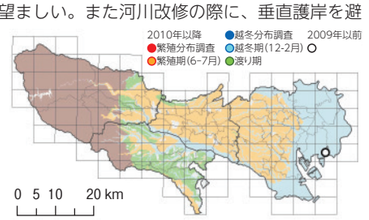
チドリ目
シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長27cm。雌雄同色。体型は横長で太い中型のシギ。頸と脚が短く、嘴が長い。全体に茶褐色で、腹部は白色。形態は、他のジシギ類と非常によく似ており、野外での識別は難しい。旅鳥として、農地や湿原に渡来する。ミミズや昆虫類などの土壌動物を捕食する。東京都では、定期的な生息は確認されていない。

■**生存を脅かす要因**：農地や湿原などで生息するため、河川改修や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では極端に生息環境が少ない。

■**特記事項**：休耕田などの内陸湿地の減少に影響を受けており、圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。また河川改修の際に、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。



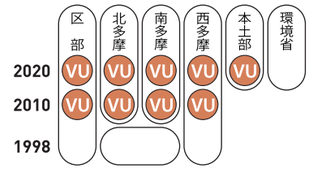
東京都外　2010 年

執筆者　守屋年史

文献一覧　53, 64

タシギ
Gallinago gallinago

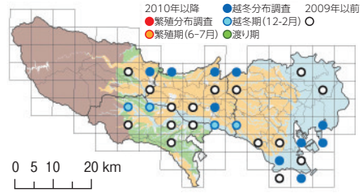
チドリ目
シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長27cm。雌雄同色。体型は横長で太い中型のシギ．頸と脚が短く、嘴が非常に長い。全体に茶褐色で，腹部は白色．翼の次列風切先端が白く、飛翔時に目立つ。本州中部以南に冬鳥として渡来し、河川、水田や湿原などの淡水湿地に生息する。ミミズや昆虫類などの土壌動物を捕食する。東京都では、低地から丘陵地にかけて冬期の記録がある。

■**生存を脅かす要因**：農地や湿原などで生息するため、河川改修や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では極端に生息環境が少ない。

■**特記事項**：休耕田などの内陸湿地の減少に影響を受けており、圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿地環境を保全・回復させることが望ましい。また河川改修の際に、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。

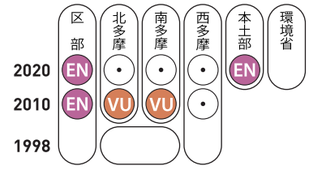


執筆者　守屋年史

文献一覧　53, 64

オグロシギ
Limosa limosa

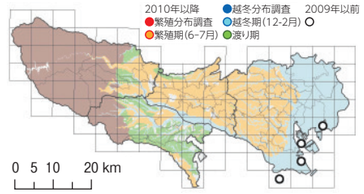
チドリ目
シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長38.5cm。雌雄はほぼ同色だが、雌はやや淡色。嘴は長く直線的で足も長い中型のシギ。成鳥雄は頭部から胸部が赤褐色で、背面は黒色、茶褐色、赤褐色のまだら模様。尾羽は白色で先端が黒い。冬羽は全身に灰色味がある。旅鳥として、水田や干潟などの湿地に渡来し、土中の昆虫類や甲殻類などを捕食する。東京都では、2009年以前に沿岸部を中心に記録があるが、近年は記録がない。

■**生存を脅かす要因**：干潟や池沼などの淡水湿地で生息するため、河川改修、湖沼や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では極端に生息環境が少ない。

■**特記事項**：干潟や休耕田などの内陸湿地の減少に影響を受けており、圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。また河川改修の際に、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。

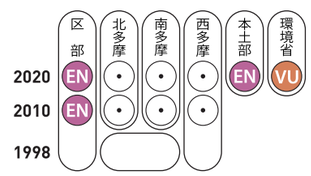


執筆者　守屋年史

文献一覧　53, 64

オオソリハシシギ
Limosa lapponica

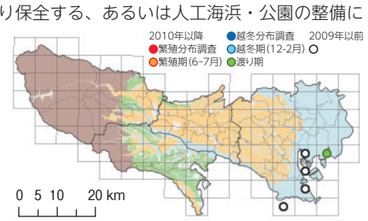
チドリ目
シギ科

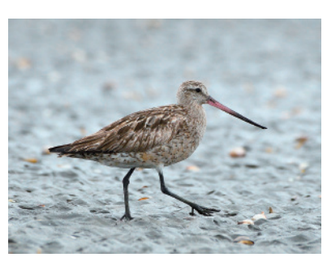


■**種の特性と生息状況**：全長39cm。長い嘴は上に反り、足も長い中型のシギ。成鳥雄は顔から腹部が赤褐色で、背面は淡褐色、茶褐色のまだら模様。雌はやや淡色で雄より大きい。冬羽は全身に灰色味がある。尾羽は白地に黒色の横斑がある。旅鳥として、干潟や河口などに渡来し、土中の甲殻類、水生生物などを捕食する。東京都では、渡り期に沿岸部の河口や人工湿地に記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。





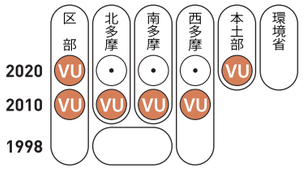
東京都外　2021 年

執筆者　守屋年史

文献一覧　53, 64

チュウシャクシギ
Numenius phaeopus

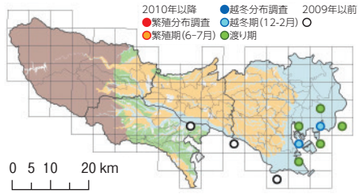
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長42cm。雌雄同色。長い嘴は下に曲がり、足も長い中型のシギ。全身が淡褐色で、腹部はより白色味がある。頭側線と過眼線は褐色で頭央線は白色。夏羽と冬羽はよく似る。旅鳥として、干潟や河川、農地などに渡来する。土中の甲殻類、昆虫類、水生生物などを捕食する。東京都では、渡り期に沿岸部の河口や人工湿地に記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。



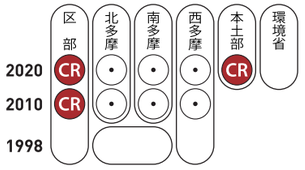
江戸川区　2021 年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

ダイシャクシギ
Numenius arquata

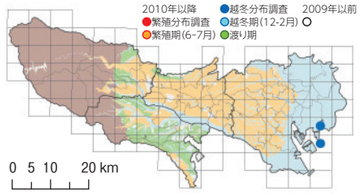
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長60cm。雌雄同色。嘴は非常に長く下に曲がり、足も長い大型のシギ。頭部から胸部は淡褐色で褐色の縦斑がある。背面は黒褐色で白色の斑がある。腹部、腰は白色。ホウロクシギに比べて白い。冬鳥、旅鳥として、干潟など湿地に渡来し、土中の甲殻類、ゴカイ類などを捕食する。東京都では、渡り期に沿岸部の人工湿地で少数の記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。



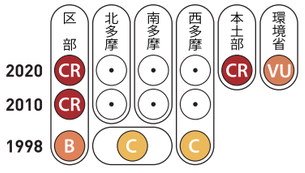
江戸川区　2021 年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

ホウロクシギ
Numenius madagascariensis

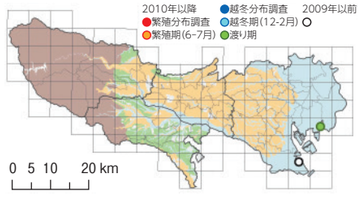
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長63cm。雌雄同色。嘴は非常に長く下に曲がり、足も長い大型のシギ。全身に褐色みがあり、黒褐色の縦斑がある。腹部は淡褐色。ダイシャクシギによく似ているが、腹部や腰に白色みはない。旅鳥として、干潟など湿地に渡来する。土中の甲殻類、ゴカイ類などを捕食する。日本を含む東アジア～オーストラリア地域にのみ分布する。東京都では、渡り期に沿岸部の人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。



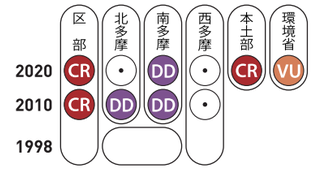
東京都外　2010 年

執筆者 守屋年史

文献一覧 5, 53, 64

ツルシギ
Tringa erythropus

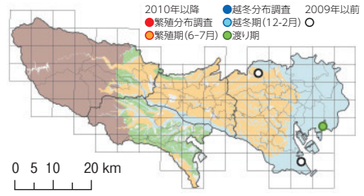
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長32cm。雌雄同色。足は長く赤色、嘴は細く黒色で下嘴は一部赤みがある細身の中型のシギ。成鳥夏羽は全身が黒くなり、背面には白色斑がある。目の周りが白い。冬羽は腹部が白色で、背面は灰褐色。飛翔時に背中に白くスリットが入る。旅鳥として、水田や湿原など湿地環境に渡来し、水生昆虫や甲殻類などを捕食する。東京都では、渡り期に沿岸部の人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：主に池沼などの淡水湿地で生息するため、河川改修、湖沼や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では極端に生息環境が少ない。

■**特記事項**：休耕田などの内陸湿地の減少に影響を受けており、圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。また河川改修の際に、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。



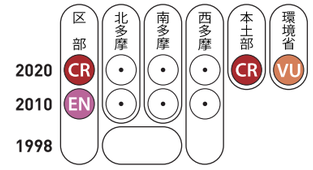
東京都外　2009 年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

アカアシシギ
Tringa totanus

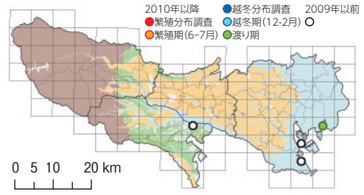
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長27.5cm。雌雄同色。足は長く赤色、嘴は赤く先端が黒い細身の中型のシギ。成鳥夏羽は、背面は灰褐色で黒褐色斑がある。腹部は白地に黒褐色縦斑がある。目先と周りが白い。冬羽は背面が一様に灰褐色。飛翔時に背中と次列風切の白色が目立つ。主に旅鳥として、水田や干潟など湿地に渡来する。北海道の一部地域では夏鳥、南西諸島では越冬する。水生昆虫や甲殻類などを捕食する。東京都では、渡り期に沿岸部の人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：干潟、池沼などの淡水湿地で生息するため、海岸や河川改修、湖沼や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：休耕田などの内陸湿地の減少に影響を受けており、圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。また河川改修の際に、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。



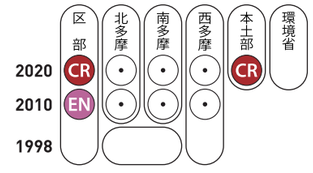
東京都外　2009 年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

コアオアシシギ
Tringa stagnatilis

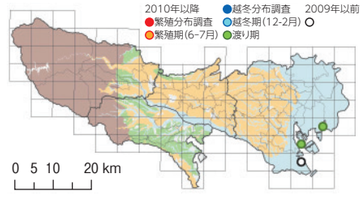
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長24cm。雌雄同色。足は黄色で長く、嘴は細く長い細身の中型のシギ。成鳥夏羽は、頭部から腹部は白地に灰褐色の小斑が密にある。背面は灰褐色で黒褐色斑がある。冬羽は背面が一様に灰褐色で白い羽縁がある。旅鳥として、水田や湿原など湿地に渡来する。水生昆虫や甲殻類などを捕食する。東京都では、渡り期に沿岸部の人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：水田や池沼などの淡水湿地、干潟で生息するため、河川改修、湖沼や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では極端に生息環境が少ない。

■**特記事項**：休耕田などの内陸湿地の減少に影響を受けており、圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。また河川改修の際に、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。



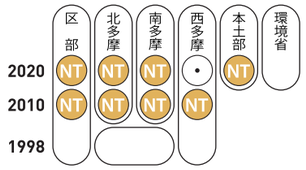
東京都外　2011 年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

アオアシシギ
Tringa nebularia

チドリ目 シギ科

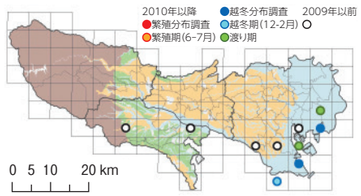


東京都外　2009 年

■**種の特性と生息状況**：全長35cm。雌雄同色。足は長く黄緑色、嘴はやや上に反る中型のシギ。成鳥夏羽は、頭部は灰白地に灰褐色の小斑が密にある。腹部は白色で、背面は灰褐色で黒褐色斑と白色の羽縁がある。冬羽は背面が一様に淡くなり、下面は白色。旅鳥として、水田や干潟など湿地環境に渡来する。水生昆虫や甲殻類などを捕食する。東京都では、冬期、渡り期に沿岸部の河口や人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域、内陸湿地などに生息するため、河川や海岸開発、圃場や湿地開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

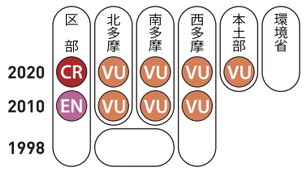
■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟、内陸湿地を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。



執筆者 守屋年史
文献一覧 53, 64

クサシギ
Tringa ochropus

チドリ目 シギ科

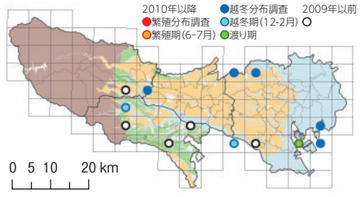


東京都外　2010 年

■**種の特性と生息状況**：全長22cm。雌雄同色。足は長くくすんだ緑色、嘴は頭長よりやや長い中型のシギ。目のアイリングは白く、頭部から胸部にかけて白地に黒褐色の斑がある。背面は黒褐色に白色斑、腹部は白色。冬羽は全体的に灰色みがかる。タカブシギに類似するが、眉斑が目先のみ。旅鳥もしくは冬鳥として、水田や湿原など湿地に渡来し、本州関東以南では越冬する。水生昆虫や甲殻類などを捕食する。東京都では、主に冬期に台地、河川、沿岸部で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：干潟や池沼などの淡水湿地で生息するため、河川改修、湖沼や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では極端に生息環境が少ない。

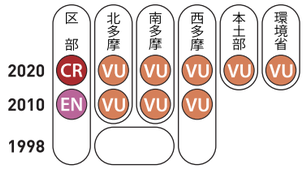
■**特記事項**：休耕田などの内陸湿地の減少に影響を受けており、圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。また河川改修の際に、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。



執筆者 守屋年史
文献一覧 53, 64

タカブシギ
Tringa glareola

チドリ目 シギ科

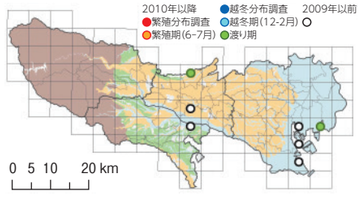


東京都外　2004 年

■**種の特性と生息状況**：全長20cm。雌雄同色。足は長く緑黄色、嘴は頭長よりやや長い中型のシギ。眉斑は夏羽では不明瞭。頭部から胸部にかけて白地に黒褐色の斑がある。背面は黒褐色に白色のまだら模様、腹部は白色。冬羽の背面は灰褐色に白色斑があり、眉斑は明瞭になる。クサシギに類似する。旅鳥もしくは冬鳥として、水田や湿原など湿地に渡来し、本州関東以南では越冬する。地表の昆虫類や甲殻類などを捕食する。東京都では、渡り期に沿岸部の人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：干潟や池沼などの淡水湿地で生息するため、河川改修、湖沼や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では極端に生息環境が少ない。

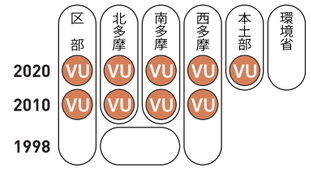
■**特記事項**：休耕田などの内陸湿地の減少に影響を受けており、圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。また河川改修の際に、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。



執筆者 守屋年史
文献一覧 53, 64

キアシシギ
Heteroscelus brevipes

チドリ目 シギ科

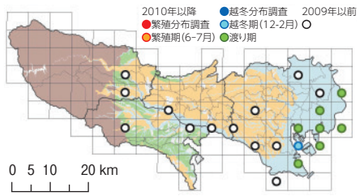


江戸川区　2020 年

■**種の特性と生息状況**：全長25cm。雌雄同色。足は黄色、嘴は頭長よりやや長い中型のシギ。夏羽は顔から胸部、脇まで白地に灰色の斑がある。背面は灰色、腹部は白色。冬羽は、灰色部に褐色みがかかる。過眼線は黒く、眉斑・アイリングは白い。旅鳥として、干潟や沿岸の護岸、河川、農地などに渡来、沖縄では一部越冬する。地表や水中から昆虫類や甲殻類などを捕食する。日本を含む東アジア～オーストラリア地域にのみ分布する。東京都では、渡り期に沿岸部で記録があるが、2010年以降は河川沿いの内陸での記録がない。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域に生息するため生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

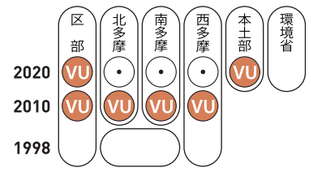
■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。



執筆者 守屋年史
文献一覧 53, 64

ソリハシシギ
Xenus cinereus

チドリ目 シギ科

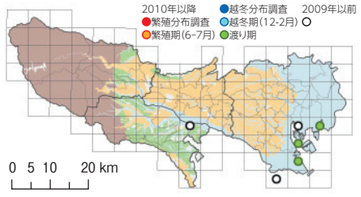


東京都外　2021 年

■**種の特性と生息状況**：全長23cm。雌雄同色。足はやや短く橙色、上に反った嘴は黒く基部は橙色の中型のシギ。夏羽は頭部、胸部に白地に灰色斑がある。背面は灰褐色で黒色、黒褐色の縦斑がある。腹部は白色。冬羽は、一様に灰褐色。過眼線は黒く、眉斑は不明瞭。旅鳥として、干潟や河川、農地などに渡来する。地表や水面から、昆虫類や甲殻類などを捕食する。東京都では、渡り期に沿岸部の人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟や砂浜などの浅海域に生息するため、生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

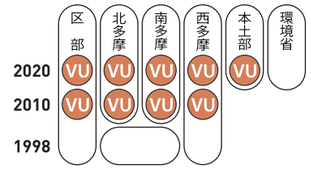
■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。



執筆者 守屋年史
文献一覧 53, 64

イソシギ
Actitis hypoleucos

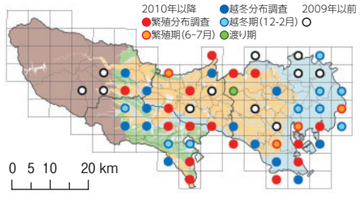
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長20cm。雌雄同色。足はやや短く緑黄色、嘴は頭長よりやや長く黒褐色の小型のシギ。夏羽は頭部、側胸、背面は茶褐色、脇に白色部が食い込む。腹部は白色。飛翔時は白い翼帯が目立つ。白いアイリングと不明瞭な眉斑がある。留鳥、夏鳥として、河川や池などの湿地に生息する。本州中部以北では夏鳥。地表や地中にいる昆虫類などを捕食する。2016-2021年に行われた東京都鳥類繁殖分布調査では、周年生息し、河川周辺、沿岸部を中心に低地から丘陵地にかけて広く繁殖の可能性がある。

■**生存を脅かす要因**：河川敷、沿岸部などで生息するため、河川、海岸改修や植生遷移など生息環境の減少や変化、人や車などの立ち入りなどのかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。

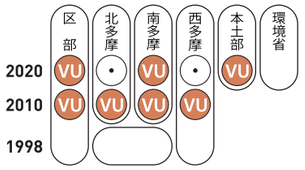
■**特記事項**：河川改修の際に、河原の保全、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。また、繁殖期の立入り制限、ネコなどの捕食者対策も重要である。



執筆者 守屋年史
文献一覧 8, 53, 64

キョウジョシギ
Arenaria interpres

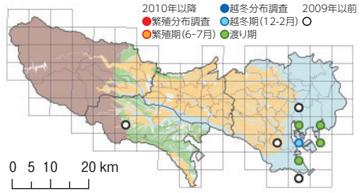
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長22cm。雌雄はほぼ同色。足は短く橙色、黒く短い嘴の小型のシギ。雄夏羽の頭部は白色に黒い文様、胸部は黒く、背面は赤褐色、黒色、白色のまだら模様。腹部は白色。成鳥雌は赤色味が弱く、全体に褐色。冬羽も成鳥雌に似る。旅鳥として、干潟や岩礁、農地などに渡来、本州中部以南では一部越冬する。地表から昆虫類や甲殻類などを捕食する。コアジサシなどの卵も食べる。東京都では、渡り期に沿岸部の人工湿地で記録があり、越冬の記録もある。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。



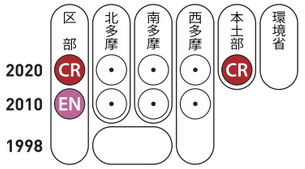
港区　2022年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

オバシギ
Calidris tenuirostris

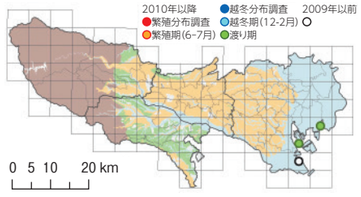
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長28.5cm。雌雄同色。足は緑黄色、頭長よりやや長い黒い嘴の中型のシギ。夏羽は頭部から胸部にかけて白色に黒い縦斑があり、胸部は密になる。腹部は白色時に黒斑がある。背面は褐色に白い羽縁のうろこ模様で、肩羽の赤褐色が目立つ。幼鳥羽は全身が白黒のまだら模様。旅鳥として、干潟や砂浜、河口などに渡来する。地中の貝類や甲殻類などを捕食する。主に日本を含む東アジア～オーストラリア地域に分布し、東京都では渡り期に沿岸部の人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。



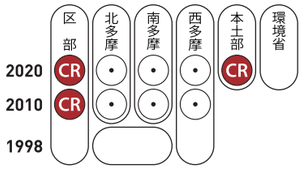
東京都外　2015年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

コオバシギ
Calidris canutus

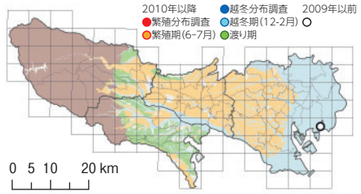
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長24.5cm。雌雄同色。足は緑黄色、頭長ほどの長さで黒い嘴の中型のシギ。夏羽は顔から腹部まで赤橙色で目立つ。頭頂から背面にかけて橙色、黒色、白色のまだら模様。幼鳥羽は頭部、胸部、背面が灰褐色で錨模様の羽がある。旅鳥として、干潟や砂浜、河口などに渡来し、地中の貝類や甲殻類などを捕食する。東京都では、沿岸部の人工湿地で記録があるが、2010年以降の記録はない。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。



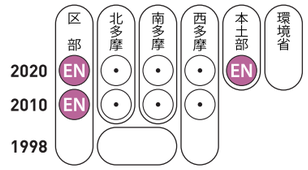
東京都外　2022年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

ミユビシギ
Calidris alba

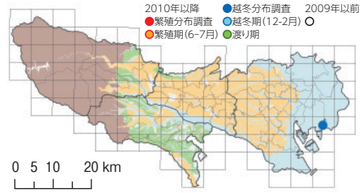
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長19cm。雌雄同色。足は黒色で後趾を欠く、黒い嘴は頭長より短い小型のシギ。夏羽は頭部から胸部、背面まで赤橙色、黒色、白色のまだら模様で、腹部は白色。冬羽は、頭頂から背面にかけて灰白色、顔から腹部にかけては白色。冬鳥、旅鳥として、干潟や砂浜、河口などに渡来する。波打ち際などで貝類や甲殻類などを捕食する。東京都では、冬期に沿岸部の人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：砂浜、干潟などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。



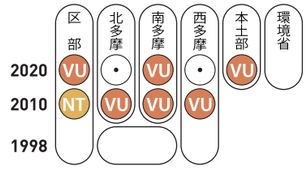
東京都外　2013年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 56, 64

トウネン
Calidris ruficollis

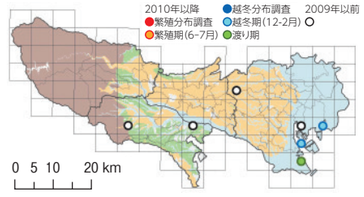
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長15cm。雌雄同色。足は黒色で短く、黒い嘴は頭長より短い小型のシギ。夏羽は顔から胸部まで赤褐色、背面は赤褐色、黒色、白色のまだら模様で、腹部は白色。冬羽は、頭頂から背面にかけて灰褐色、顔から腹部にかけては白色。旅鳥として、干潟や砂浜、水田などの湿地に渡来する。地表や地中から、ゴカイ類や甲殻類などを捕食する。主に日本を含む東アジア～オーストラリア地域に分布し、東京都では、冬期、渡り期に沿岸部の河口や人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河口、干潟などの浅海域、水田に生息するため、河川や海岸開発、圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、休耕田などの圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。



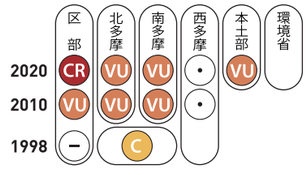
東京都外　2010年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

オジロトウネン
Calidris temminckii

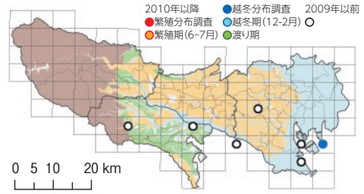
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長14.5cm。雌雄同色。足は短く黄緑色、嘴は短く黒い小型のシギ。夏羽は頭部から胸部、背面まで濃い灰褐色で背面には橙色や黒色の斑がある。腹部は白色。冬羽は、頭頂から胸部、背面にかけて灰褐色、喉や腹部は白色。旅鳥として、水田や湿原などの湿地に渡来する。地表や地中から、小型の昆虫類や甲殻類などを捕食する。東京都では、冬期に沿岸部の河口や人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：水田や池沼などの淡水湿地で生息するため、河川改修、湖沼や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では極端に生息環境が少ない。

■**特記事項**：休耕田などの内陸湿地の減少に影響を受けており、圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。また河川改修の際に、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。



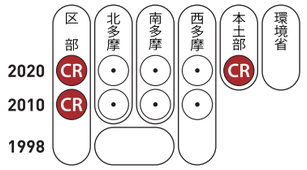
東京都外　2010年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

サルハマシギ
Calidris ferruginea

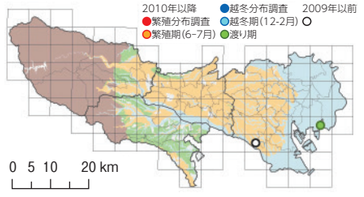
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**:全長21.5cm。雌雄同色。足は黒色､黒い嘴は下へ湾曲する小型のシギ。夏羽は頭部から胸部、腹部まで赤褐色で目立つ、背面は橙色、黒色、白色のまだら模様。冬羽は、頭部から背面にかけて灰褐色、白い眉斑がある。腹部は白色。旅鳥として、干潟や砂浜、水田などの湿地に渡来する。地表や地中から､ゴカイ類や甲殻類などを捕食する。東京都では、渡り期に沿岸部の人工湿地で少数の記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。



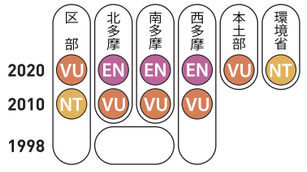
東京都外　2010 年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

ハマシギ
Calidris alpina

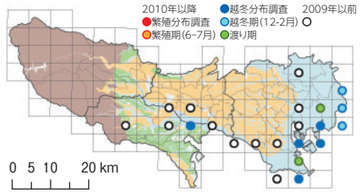
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長21cm。雌雄同色。足は黒色、黒い嘴は下へやや湾曲する小型のシギ。夏羽は頭頂、背面に赤褐色と黒色のまだら模様、側胸に黒い縦斑があり、腹部は白色地に黒い斑がある。冬羽は、頭部から背面にかけて灰褐色、白い眉斑がある。腹部は白色。旅鳥として、干潟や砂浜、河口などの湿地に渡来し、地表や地中から、ゴカイ類や甲殻類などを捕食する。東京都では、主に冬期に河川、沿岸部の河口や人工湿地で記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。



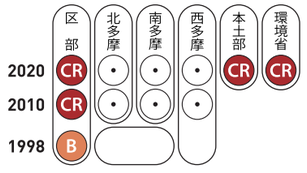
東京都外　2022 年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

ヘラシギ
Eurynorhynchus pygmeus

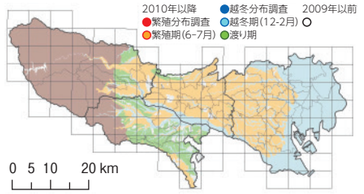
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長15cm。雌雄同色。足は黒色、先端がスプーン状の特徴的な黒い嘴を持つ小型のシギ。夏羽は頭部から胸部が赤褐色で、背面は赤褐色、黒色、白色のまだら模様、腹部は白色。冬羽は、頭部から背面にかけて灰褐色、白い眉斑がある。腹部は白色。旅鳥として、干潟や砂浜、河口などの湿地に渡来する。水中で嘴を振りながら、甲殻類や小魚などを捕食する。日本を含む東アジア地域にのみ生息する世界的希少種で、東京都の記録は稀。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟、砂浜などの浅海域に生息するため、河川や海岸開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟や砂浜を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。



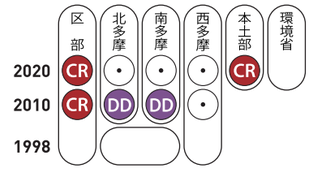
江東区　2007 年

執筆者 守屋年史

文献一覧 20, 53, 64

キリアイ
Limicola falcinellus

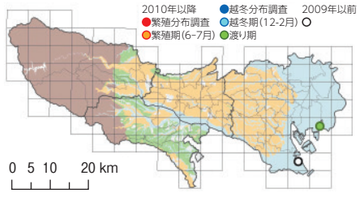
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長17cm。雌雄同色。足は黒色、下へやや湾曲し基部が太い嘴を持つ小型のシギ。顔の眉斑、頭側線が目立つ。夏羽は頭部から胸部、背面まで赤褐色、黒色、白色のまだら模様、腹部は白色。冬羽は、頭部から背面にかけて灰褐色、胸に縦斑があり、腹部は白色。旅鳥として、干潟や砂浜、水田などの湿地に渡来する。地表や地中から、昆虫類や甲殻類などを捕食する。全国的にも渡来数は多くない。東京都では、渡り期に沿岸部の人工湿地で少数の記録がある。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域、内陸湿地などに生息するため、河川や海岸開発、圃場や湿地開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟、内陸湿地を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。また、満潮時の休息場所の確保・設置などは生息環境を高めることに効果がある。



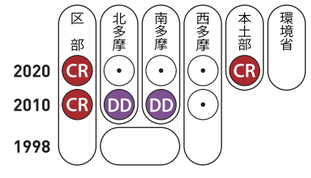
東京都外　2007 年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

エリマキシギ
Philomachus pugnax

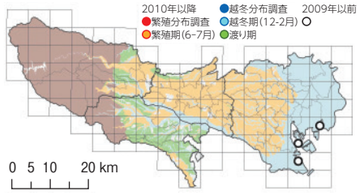
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長22-28cm。雄は雌よりも大きい。足は長く、頭長程度の短い嘴を持つ中型のシギ。雄夏羽は、襟巻のような飾り羽を持つものから雌によく似た色彩のものまで多様。嘴や足の色も様々である。冬羽は、雄雌ともに頭部から背面にかけて灰褐色で羽縁が白い、腹部は白色。主に旅鳥として、水田や湿原、干潟などの湿地に渡来する。地表や水面から、昆虫類や甲殻類などを捕食する。東京都では、沿岸部の人工湿地で記録があるが、2010年以降の記録はない。

■**生存を脅かす要因**：河口干潟などの浅海域、内陸湿地などに生息するため、河川や海岸開発、圃場や湿地開発による生息環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では生息環境が少ない。

■**特記事項**：河口部や沿岸部の干潟、内陸湿地を可能な限り保全する、あるいは人工海浜・公園の整備により生息環境を回復させることが望ましい。



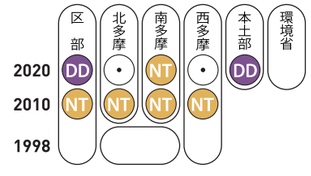
東京都外　2010 年

執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

アカエリヒレアシシギ
Phalaropus lobatus

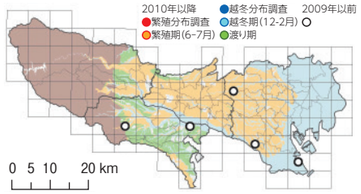
チドリ目 シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長18cm。雌が雄より鮮やかな色をしている。足は黒色、細く短い黒色の嘴を持つ小型のシギ。雌夏羽は、頭部、側脇が墨色、後頸が赤色で喉や腹部が白色。冬羽は、背面が灰色で顔や腹部は白色。目の周りから後方に伸びる黒斑がある。旅鳥として、近海や内湾の海洋上に生息し、内陸の湿地にも渡来する。水中や水面から、昆虫類や甲殻類などを捕食する。東京都では、沿岸部、内陸部で記録があるが、2010年以降の記録はない。

■**生存を脅かす要因**：主に海洋上に生息するため東京都への渡来は少なく、また渡来に適した内陸湿地も少ない。東京湾内の餌動物の不足など越冬環境がないことが、本種の生存を脅かす要因となっている可能性がある。

■**特記事項**：東京内湾の海洋環境の改善が図られることが望ましい。また照明塔のライトなどに誘引されて、球場やスポーツ施設に迷行することがある。

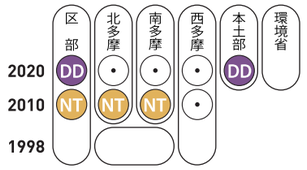


執筆者 守屋年史

文献一覧 53, 64

ハイイロヒレアシシギ
Phalaropus fulicarius

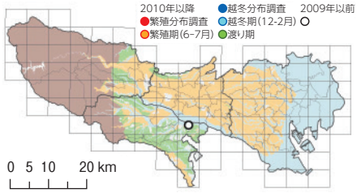
チドリ目
シギ科



■**種の特性と生息状況**：全長21cm。雌が雄より鮮やかな色をしている。足は黒色、やや太く短い黄色の嘴を持つ小型のシギ。雌夏羽は、頭部が黒色で顔は白色、喉から腹部まで茶褐色。背面は黒地に茶色の羽縁がある。冬羽は、背面が灰色で腹部は白色。目の周りに黒斑がある。旅鳥として、海洋上に生息し、内陸の湿地にも渡来する。水中や水面から、昆虫類や甲殻類などを捕食する。東京都では、沿岸部、内陸部で記録があるが、2010年以降の記録はない。

■**生存を脅かす要因**：主に海洋上に生息するため東京都への渡来は少なく、また渡来に適した内陸湿地も少ない。東京湾内の餌動物の不足など越冬環境がないことが、本種の生存を脅かす要因となっている可能性がある。

■**特記事項**：東京内湾の海洋環境の改善が図られることが望ましい。また照明塔のライトなどに誘引されて、球場やスポーツ施設に迷行することがある。



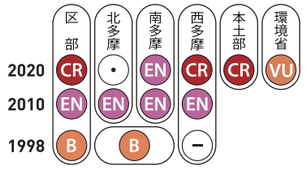
東京都外　2010 年

執筆者　守屋年史

文献一覧　53, 64

タマシギ
Rostratula benghalensis

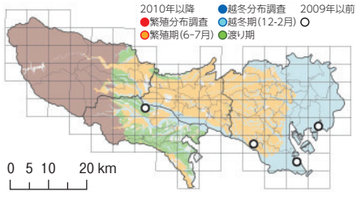
チドリ目
タマシギ科



■**種の特性と生息状況**：全長23.5cm。雌が雄より鮮やかな色をしている。足は緑黄色、やや太く長い黄色の嘴を持つ中型のシギ。雌夏羽は、頭部は黒褐色で、眼の周囲の勾玉模様や肩にある線は白色。背面は灰褐色、腹部は白色。留鳥・漂鳥として、水田などの農地や湿原に生息する。地中や水中から、ミミズ類や昆虫類、種子などを採食する。東京都では、沿岸部、丘陵地で記録があるが、2010年以降の記録はない。2016-2021年に行われた東京都鳥類繁殖分布調査では繁殖の可能性の高い記録はなかった。

■**生存を脅かす要因**：水田や湿原などの淡水湿地で生息するため、河川改修や圃場整備による生息環境の減少や変化が、本種の生存を脅かす要因である。東京都では極端に生息環境が少ない。

■**特記事項**：休耕田などの内陸湿地の減少に影響を受けており、圃場整備や湿地開発に際し、できるだけ湿性環境を保全・回復させることが望ましい。また河川改修の際に、垂直護岸を避け湿地環境が陸上から水辺へ連続的につながるよう配慮することが望ましい。



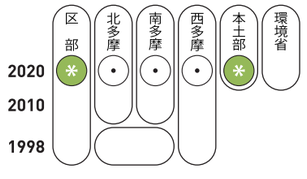
東京都外　2020 年

執筆者　守屋年史

文献一覧　31, 53, 64

ウミネコ
Larus crassirostris

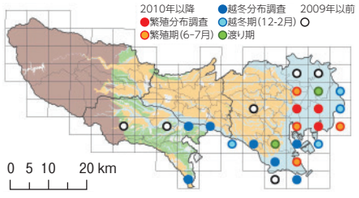
チドリ目
カモメ科



■**種の特性と生息状況**：体長47cm。成鳥は全身が白く、黄色の嘴の先端に黒と赤の斑点がある。海岸の浜辺や港湾で主に魚や鳥、獣の死体を採食し、離れ島や海岸の草地に集団で営巣する。北海道から本州の海岸の広い地域で繁殖し、冬は南下する。都内では湾岸地域で越冬し、夏を越すものもある。近年は上野から浅草周辺のビルの屋上や湾岸の杭の上で営巣するものがある。

■**生存を脅かす要因**：ビルの屋上緑化草地では、集団で営巣する場合があるが、騒音・悪臭により追い払われることがある。湾岸の営巣可能な杭は少ない。

■**特記事項**：近年の営巣拡大であるが、人為的要因で営巣が不安定であるので、注目種とした。



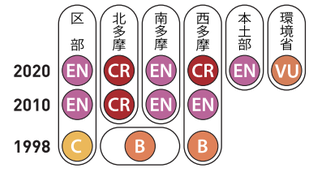
東京都外　2020 年

執筆者　金井裕

文献一覧　8, 46

コアジサシ
Sterna albifrons

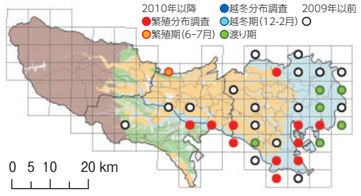
チドリ目
カモメ科



■**種の特性と生息状況**：体長28cm。成鳥夏羽は頭頂から後頭が過眼線とつながり黒い。体下面にかけては白い。河口、河川、湖沼などの河原や砂州などに生息し、魚類を食べる。海岸の砂洲や河川の中州などの裸地で営巣する。本州、四国、九州、南西諸島で夏鳥。都内では海岸や河川、池沼で採食しているのがよく見られる。海岸の埋立地や河川の中州で営巣するが、昭和島の水再生センターの屋上に整備された繁殖地以外の営巣地は極めて限られている。全国的にも急減していることが全国鳥類繁殖分布調査により明らかにされている。

■**生存を脅かす要因**：営巣地となる裸地の減少、集団繁殖地の規模が小さくなったため集団防衛機能が不十分になりカラス類や猛禽類、ノネコ等による卵や雛の捕食が増加していること、レジャー活動での営巣地への立入りによるかく乱などが、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：現存の生息地を可能な限り保全することや、必要に応じて、捕食者対策、営巣地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。



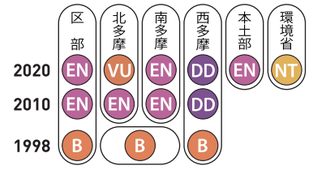
2004 年

執筆者　植田睦之

文献一覧　8, 10

ミサゴ
Pandion haliaetus

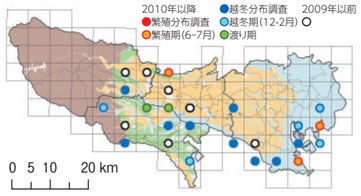
タカ目
ミサゴ科



■**種の特性と生息状況**：体長59cm。雌雄同色で雌の方がやや大きい。成鳥の上面は黒褐色で下面は白色。留鳥として、海岸付近や内陸の河川、湖沼などに生息し、魚類を捕食する。以前から東京湾や多摩川などで見られることが多く、羽田空港付近では一年を通して見られる。最近は江戸川区の葛西海浜公園の池で観察される事例が多い。都内での繁殖の記録はない。

■**生存を脅かす要因**：魚食専門の猛禽で、近年大型の魚が増えたためか全国的に生息が拡大している。しかし、羽田空港ではバードストライクの防止対策として、常時バードパトロールがされ、追い払いなどが実施されている。

■**特記事項**：



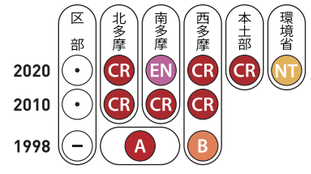
江戸川区　2015 年

執筆者　川内博

文献一覧　52, 58

ハチクマ
Pernis ptilorhynchus

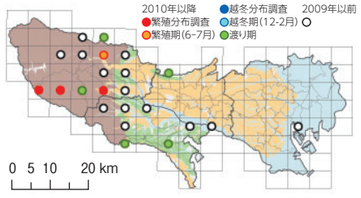
タカ目
タカ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄57cm、雌60.5cm。上面は暗褐色であるが、体下面は白色の淡色型から黒褐色の暗色型のあいだで多様。丘陵地から低山地の樹林で繁殖する。スズメバチ類の幼虫や蛹、両生類、爬虫類などを食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。西多摩の丘陵から山地の山林でごく少数の繁殖が確認されている。南多摩でも繁殖の可能性があると考えられるが、北多摩では近年の状況が不明である。春と秋には渡りの途中と思われる個体は多摩部各地で見られる。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採、道路建設、渡りの目的地（繁殖地・越冬地）および経路の環境悪化。

■**特記事項**：営巣が確認された場合には、営巣地周辺の立入りを避け、繁殖活動中の個体へのかく乱を少なくすることが望ましい。



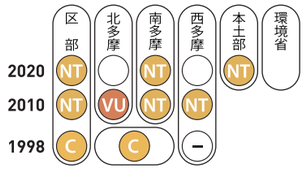
東京都　2010 年

執筆者　御手洗望

文献一覧　3, 14, 16, 61, 67

トビ
Milvus migrans

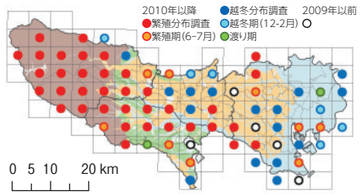
タカ目
タカ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄59cm、雌69cmと雌雄で大きさが違う。雌雄とも全体茶褐色で尾が凹型。全国に留鳥として生息し繁殖している。東京では西多摩から南多摩にかけての多摩川沿いの樹木で営巣し、主に動物の死肉やネズミ類、ヘビ類などの小動物を採食する。最近は区部でもその姿を見ることが増えた。

■**生存を脅かす要因**：かつては食物が共通しているカラスとの競合で、市街地にはほとんど生息していなかったが、区部を中心にハシブトガラスの衰退により変化が見られる。しかし、空港におけるバードストライクの問題で、駆除されることの多い鳥である。また、体が大きいだけに、営巣に用いる大木が減少しているのもマイナス要因となっている。

■**特記事項**：



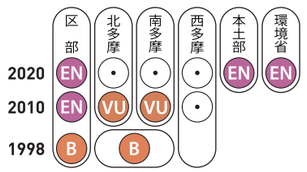
2010年

執筆者 川内博

文献一覧 8, 54

チュウヒ
Circus spilonotus

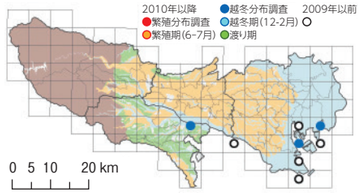
タカ目
タカ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄48cm、雌58cm。翼と尾が長く見える。羽色に個体差があるが、体上面は茶褐色。平地の草地、干拓地、水田・耕作地、ヨシ原などに生息する。ネズミ類や小鳥、カエル類などを食べる。北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州では冬鳥。都内では海岸の埋立地や河川敷の広大なヨシ原、草地に渡来していたが、現在では稀に見られるのみ。

■**生存を脅かす要因**：海岸の埋立地や河川敷の広大なヨシ原や草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する広大なヨシ原、草地を可能な限り保全することや、こうした草地環境を創出すること、また、現存する草地への人の立入りや車の乗入れについて、必要に応じて注意喚起を行うことが望ましい。

■**特記事項**：



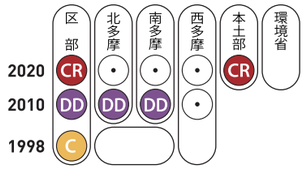
2007年

執筆者 金井裕

文献一覧 8, 54

ハイイロチュウヒ
Circus cyaneus

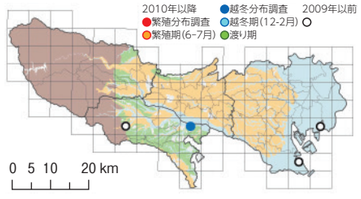
タカ目
タカ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄43cm、雌53cm。雄成鳥は頭部からの上面と顔から胸までが灰色で、体下面は白い。冬に河口周辺や干拓地などの広大な湿地環境に局地的に渡来し、ネズミ類や小鳥、カエル類などを食べる。北海道、本州、四国、九州で冬鳥。都内では海岸の埋立地や河川敷の広大なヨシ原、草地に渡来していたが、現在では稀に見られるのみ。

■**生存を脅かす要因**：海岸の埋立地や河川敷の広大なヨシ原や草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する広大なヨシ原、草地を可能な限り保全することや、こうした草地環境を創出すること、また、現存する草地への人の立入りや車の乗入れについて、必要に応じて注意喚起を行うことが望ましい。

■**特記事項**：



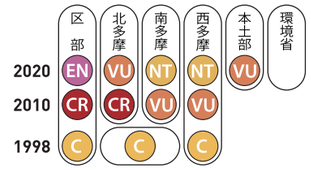
東京都外　2010年

執筆者 金井裕

文献一覧 54

ツミ
Accipiter gularis

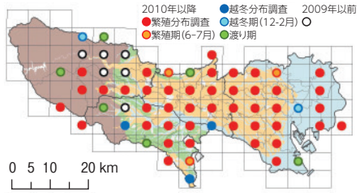
タカ目
タカ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄27cm、雌30cm。雄成鳥は頭部からの上面が暗青灰色で体下面は白く、胸から脇は淡橙色。平地から山地の樹林に生息し、繁殖する。主にスズメ、シジュウカラなどの小鳥や昆虫類を食べる。北海道、本州（東北）では夏鳥。本州（関東以南）、四国、九州、南西諸島では留鳥。平地や丘陵地、山地などの樹林や緑地に生息するが、個体数は少ない。最近は市街地の公園などの樹林での営巣が多い。市街地での繁殖は1980年代から関東地方から中部地方にかけてみられ、一時カラス類との競合で減少傾向にあったが、近年は再び増加傾向にある。

■**生存を脅かす要因**：増加傾向にあるといっても、分布域は限られており、ハシブトガラスによる繁殖の失敗、写真撮影や観察などの人為的ストレスによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。近年は、オオタカの分布拡大に伴い、営巣しなくなった営巣地も増えている。

■**特記事項**：ごみ処理を適正に行うことで、ハシブトガラスの生息密度を低く抑える必要がある。また緑地の更新で伐採する場合は営巣できる高木が残るような段階的な伐採が望まれる。市街地の公園などで営巣している場合、必要に応じて営巣場所に接近する観察者などへの注意喚起を行うことが望ましい。



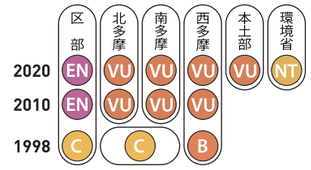
2005年

執筆者 植田睦之

文献一覧 6, 8, 10

ハイタカ
Accipiter nisus

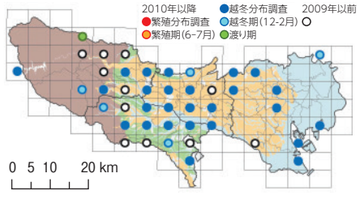
タカ目
タカ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄31.5cm、雌39cm。雄成鳥は体上面が青灰色で、体下面は白く、胸から腹に橙褐色の横斑がある。平地から山地の樹林、耕作地、河川敷に生息し、山林や防風林などに営巣する。主にスズメ、シジュウカラなどの小鳥を食べる。北海道、本州、四国では留鳥または漂鳥、九州では冬鳥。本土部では各地の山林、河川、海岸で越冬期に観察されるほか、渡りの時期にもみられる。西多摩では繁殖期にも観察例があり、繁殖の可能性はあるが状況はわかっていない。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採、道路建設。

■**特記事項**：西多摩での繁殖期の生息状況の把握が必要である。営巣が確認された場合には、営巣地周辺の立入りを避け、繁殖活動中の個体へのかく乱を少なくすることが望ましい。



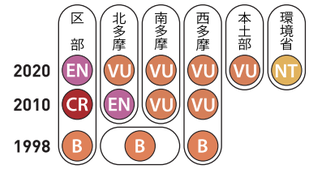
2009年

執筆者 御手洗望

文献一覧 14, 16, 54, 61

オオタカ
Accipiter gentilis

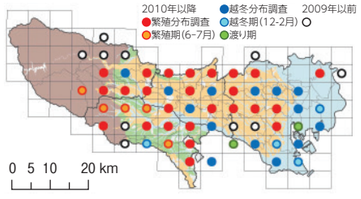
タカ目
タカ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄50cm、雌56.5cmと雌雄で大きさが違う。頭部からの体上面は暗青灰色から灰褐色で、体下面は白く細い暗灰色の横帯がある。平地から山地の樹林に生息し、樹上で繁殖する。ハト類やカモ類など主に中型の鳥類を捕食する。北海道、本州、四国、九州で留鳥または漂鳥。主に多摩部の台地から丘陵に生息・繁殖しているが、2000年代から区部でも繁殖し、営巣地数も徐々に増加している。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採、観光開発等、市街地開発、道路建設などの開発行為の他、林業施業・里山保全活動による営巣林の改変、繁殖地でのカメラマンによるかく乱の影響がある。外国産の別亜種と考えられる個体の生息情報もあり、影響が懸念される。

■**特記事項**：主要な生息地である多摩部の丘陵地では、2010年代になって営巣地が減少している地域がある。



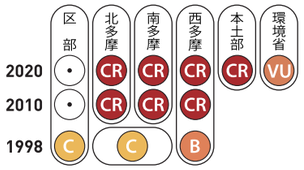
東京都　2021年

執筆者 御手洗望

文献一覧 14, 16, 55, 61

サシバ
Butastur indicus

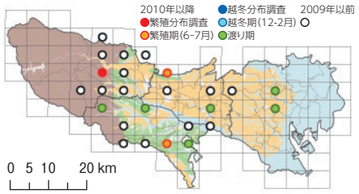
タカ目
タカ科



■**種の特性と生息状況**：体長49cm。体上面、胸は茶褐色、体下面は白く、茶褐色の横斑がある。丘陵から山地の樹林で繁殖し、カエル類やヘビ類、昆虫などを食べる。本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では冬鳥または旅鳥。渡りの時期には本土部各地で観察されるが、西多摩の山地にごく少数が繁殖するのみである。西多摩では水田がない山地に生息し、伐採跡地や路傍の草地などを採食環境としている。南多摩の丘陵地では繁殖の可能性がある。北多摩では過去に繁殖していたが、近年の状況は不明である。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採、湿地開発、圃場整備、草地開発、土地造成、道路建設、管理放棄、遷移進行・植生変化、渡りの目的地（繁殖地・越冬地）および経路の環境悪化。特に採食環境としての水田の減少の影響が大きい。

■**特記事項**：伐採跡地は植林木や低木が繁茂して、数年経過すると利用されなくなる。地域全体でまとまった草地環境の維持が必要である。



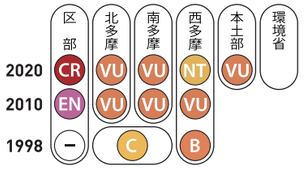
東京都　2019 年

執筆者　御手洗望

文献一覧　3, 14, 61, 67, 70, 90

ノスリ
Buteo buteo

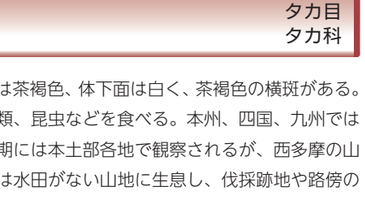
タカ目
タカ科



■**種の特性と生息状況**：体長54cm。体全体が淡褐色で細かい斑がある。尾は短く円尾で下面に細い横帯がある。山地の樹林で繁殖し、冬は開けた干拓地、河川敷、耕作地などで越冬する。主にネズミ類などの小動物を食べる。北海道、本州、四国では留鳥または漂鳥。九州では冬鳥。本土部では各地の山林、河川、海岸で越冬期に観察されるほか、渡りの時期にもみられる。西多摩・南多摩では丘陵から山地の樹林で繁殖が確認されている。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採、土地造成、道路建設。従来から山地での繁殖は確認されているが、近年は丘陵での繁殖が増加している。

■**特記事項**：営巣環境を巡ってオオタカと競合している可能性があり、今後の動向に注意が必要である。



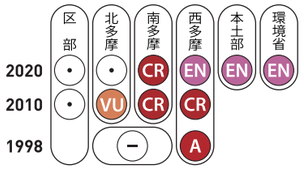
東京都　2017 年

執筆者　御手洗望

文献一覧　14, 16, 54, 61

クマタカ
Nisaetus nipalensis

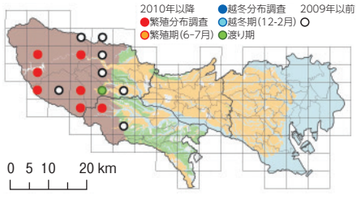
タカ目
タカ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄72cm、雌80cm。成鳥は額から頭頂、顔が黒褐色で、後頭には冠羽がある。両翼および尾には黒褐色の横帯がある。低山地から亜高山帯の樹林に周年生息し、大径木樹上で繁殖する。中型の哺乳類や鳥類、爬虫類を捕食する。北海道、本州、四国、九州で留鳥。西多摩の山地全域と南多摩の一部に30つがい前後が生息している。毎年繁殖することはほとんどなく、大部分が隔年～数年間隔で繁殖する。繁殖成功率は増減が大きく不安定である。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採・道路建設・過剰利用。道路・砕石事業等の比較的規模の大きい山林開発による影響を受ける。また、林道・砂防・治山等の規模の小さい工事でも営巣地との位置関係によっては影響がある。カメラマン・テレビ撮影・環境アセスメント調査による営巣地への接近によるかく乱も懸念される。

■**特記事項**：本種の繁殖状況を把握するためには長期間にわたる繁殖成功率の推移の把握が必要である。



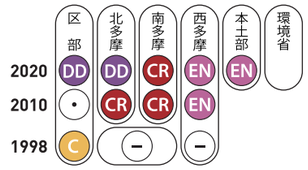
東京都　2016 年

執筆者　御手洗望

文献一覧　72, 78, 79

オオコノハズク
Otus lempiji

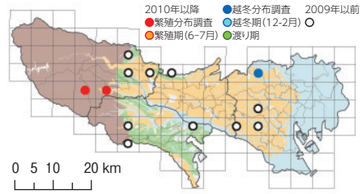
フクロウ目
フクロウ科

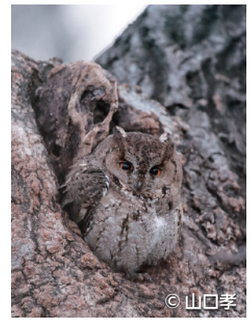


■**種の特性と生息状況**：体長23.5～26cm。成鳥は全体に黒褐色で、複雑な虫食い状の斑紋がある。平地から山地の樹林に生息し、昆虫類やネズミ類、小鳥、トカゲ類、カエル類などを食べる。北海道、本州では留鳥または漂鳥。四国、九州、南西諸島では留鳥。西多摩の山地では繁殖している。南多摩・区部では古い繁殖記録があるが現状は不明である。越冬期には本土部の各地で生息記録があるが少ない。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採、道路建設、過剰利用、在来種による競争（競合）、基質・基物の減少および消失。特に、繁殖に利用される樹洞がある大径木の消失、繁殖地や越冬地でのカメラマンやテレビ撮影によるかく乱による影響が大きい。

■**特記事項**：夜行性鳥類のため、繁殖期・越冬期ともに生息状況が十分に把握されていない。





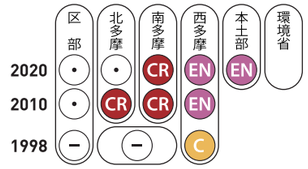
東京都　2006 年

執筆者　御手洗望

文献一覧　2, 50, 61, 67

コノハズク
Otus sunia

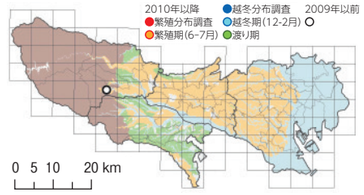
フクロウ目
フクロウ科



■**種の特性と生息状況**：体長18.5～21.5cm。全体が褐色の個体と赤みを帯びる個体がいる。黒褐色、淡橙色、白色などの複雑な模様がある。山地の樹林に生息し、昆虫類やミミズ類、小鳥、トカゲ類、カエル類などを食べる。北海道、本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では留鳥。西多摩の山地のブナ帯を中心に少数が繁殖している。西多摩でも御岳山のように1990年代末まで連続して記録されていた場所でも確認されなくなった場所がある。南多摩では高尾山で繁殖期に記録されていたが、やはり近年は確認されていない。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採、道路建設、在来種による競争（競合）、基質・基物の減少および消失。特に、繁殖に利用される樹洞がある大径木の減少と、それらを巡っての他種との競合の影響が大きいと考えられる。

■**特記事項**：夜行性鳥類のため、特に山地上部での生息状況が十分に把握されていない



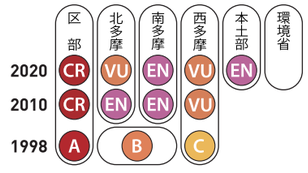
東京都　2012 年

執筆者　御手洗望

文献一覧　16, 61, 80

フクロウ
Strix uralensis

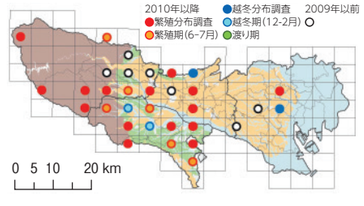
フクロウ目
フクロウ科



■**種の特性と生息状況**：体長50cm。雌雄同色で、背面は灰褐色で下面は淡色。ともに縦斑がある。頭部は大きく羽角はない。九州以北で留鳥として平地から山地の樹林に生息する。ネズミ類、鳥類などを獲り、主に樹洞で営巣するが、巣箱や猛禽類の古巣、人家の屋根裏などを利用することもある。西多摩で記録が多いが、最近区部でもその生息が知られている。

■**生存を脅かす要因**：大木の減少で、巣穴となる樹洞の不足が最大のマイナス要因で、かつてはそのために減少したと思われる。しかし、最近の繁殖期調査では増加傾向も見られている。しかし、夜間に活動する鳥のため、その実態を知ることが困難で、営巣状況、採食活動など不明な点が多い。

■**特記事項**：

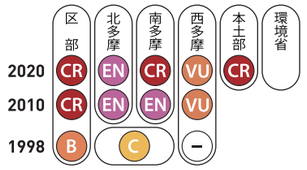


執筆者　川内博

文献一覧　4, 8

アオバズク
Ninox scutulata

フクロウ目
フクロウ科



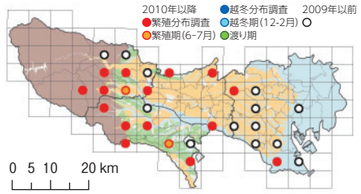
■**種の特性と生息状況**：体長29cm。雌雄同色で、体の上面は茶色みがかった黒褐色、下面は白っぽく縦斑がある。夏鳥として、全国の平地から山地の雑木林や社寺林、屋敷林などの樹洞で営巣する。巣箱も利用する。大型昆虫類を好み、街灯に集まったガ、甲虫などを捕る。夕刻から夜半にかけて見通しのいい枝や電線、テレビアンテナなどに止まりホッホッと鳴く。

■**生存を脅かす要因**：繁殖に必要な大きな木の樹洞がなくなったことや、食物である大型昆虫類が少なくなったため、その生息は都内全域で減少の一途であった。しかし、最近区部での繁殖が確認される例が出てきた。夜間活動をする鳥なので、その実態は正確にはつかめていない。

■**特記事項**：

執筆者 川内博

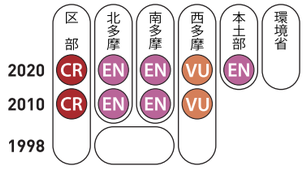
文献一覧 8, 24



練馬区　2021年

トラフズク
Asio otus

フクロウ目
フクロウ科



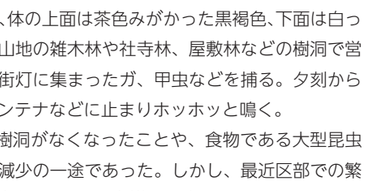
■**種の特性と生息状況**：体長35～40cm。羽角が長い。翼は長く、飛翔時の翼上面は初列風切基部の淡い橙褐色が目立つ。平地から山地の樹林、河畔林、耕作地、草地などに生息し、ネズミ類や小鳥などを食べる。北海道では夏鳥。本州（中部以北）では留鳥。本州（中部以南）、四国、九州、南西諸島では冬鳥。樹洞やカラスなどの古巣を利用して局所的に繁殖する。都内では埋め立て地や河川敷など低木が混在する草地で採食し、大きな公園の樹林や竹林でねぐらをとる。

■**生存を脅かす要因**：採食地となる埋め立て地や河川敷などの草地の減少のほか、ねぐらでの写真撮影などの人為的ストレスによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：現存する生息環境を可能な限り保全することや、河川改修の際には河川敷の草地環境とともに河畔林が維持されるよう配慮すること、また、ねぐらが特定できた場合には、必要に応じて人の接近について注意喚起を行うことが望ましい。

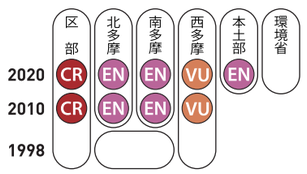
執筆者 植田睦之

文献一覧 6, 8, 10



コミミズク
Asio flammeus

フクロウ目
フクロウ科



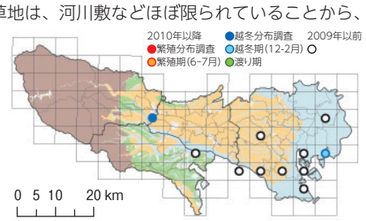
■**種の特性と生息状況**：体長35～41cm。羽角が短い中型のフクロウ類。成鳥は翼が長く、静止時は翼先が尾を越える。平地から山地の草地、耕作地、河原、埋立地などに生息し、ネズミ類や小鳥、昆虫類を食べる。北海道、本州、四国、九州で冬鳥。北海道大黒島で繁殖記録がある。都内では以前は、海岸の埋立地や造成地の広大な草地などでも生息していたが、最近は河川敷などの草地で少数が見られるだけである。

■**生存を脅かす要因**：生息地となる広大な草地の減少と、生息地への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：東京都本土部で本種が生息可能な草地は、河川敷などほぼ限られていることから、現存する生息地を可能な限り保全することや、冬に渡来が確認された場所では、人・車などの立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

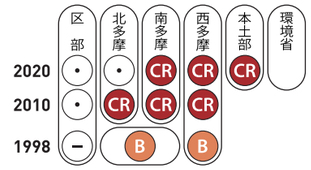
執筆者 植田睦之

文献一覧 10, 68, 69



アカショウビン
Halcyon coromanda

ブッポウソウ目
カワセミ科



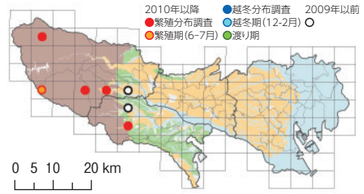
■**種の特性と生息状況**：体長28cm。全体に赤橙色で嘴は赤く、雌雄同色。夏鳥として全国の山地の林や渓流、湖沼、池などに生息。薄暗い林内を好み、サワガニや両生・爬虫類、昆虫類を捕り、枯木に巣穴を掘り繁殖する。1980年代までは減少の一途であったが、最近西多摩や南多摩で繁殖期に記録されることが増え、復活の兆しがある。

■**生存を脅かす要因**：彼らが好んで生息していた付近に高速道路などが建設されたり、宅地化されたりして、乾燥化が進み生息しなくなった。しかし最近西多摩で繁殖期の記録が増えてきた。この鳥については営巣地でのカメラマンのよる撮影による繁殖妨害が考えられる。何らかの対策が必要である。

■**特記事項**：

執筆者 川内博

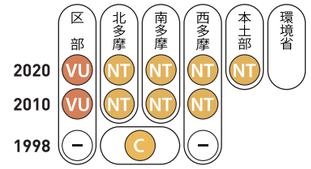
文献一覧 8, 21



東京都外　2003年

カワセミ
Alcedo atthis

ブッポウソウ目
カワセミ科



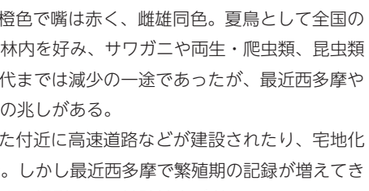
■**種の特性と生息状況**：体長17cm。雌雄ほぼ同色で、体の上面は金属光沢のある青系の美しい羽色、腹部はオレンジ色である。ほぼ全国の海岸線から山地の河川、池、湖沼に留鳥または漂鳥として生息・繁殖する。1970年ごろまでは、環境悪化で衰退の一途であったが、水質などが改善されると、各地の水辺に普通にいる鳥となっている。

■**生存を脅かす要因**：復活した理由は水質改善による小魚、水生動物の増加であるが、土の崖に営巣するこの鳥にとって、適切な営巣場所が少なく、とくに都市部においては、排水穴など人工的なものを利用する例が増えている。また、人工崖を造成した場合は、その維持管理が必要であるが、営巣が継続している例が少ない。

■**特記事項**：

執筆者 川内博

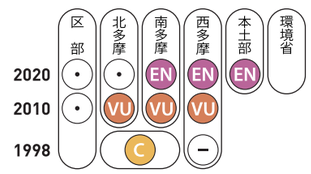
文献一覧 8, 22, 85



町田市　2020年

ヤマセミ
Megaceryle lugubris

ブッポウソウ目
カワセミ科



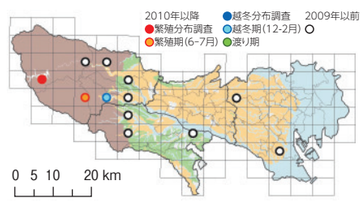
■**種の特性と生息状況**：体長38cm。雌雄ほぼ同色。大きな冠羽が目立ち、日本のカワセミ類では最大である。九州以北の山地の渓流や海岸、河川、湖沼、池などに留鳥として生息する。水辺の横枝や岩、電線などに止まり、停空飛行をしながら水中に飛び込み魚類を捕る。かつては多摩川の中流域でも繁殖していたが、最近は西多摩でもその数が減っている。

■**生存を脅かす要因**：釣り人とカメラマンが営巣地に近づきすぎて、巣を放棄する事例が多い。とくにカメラマンは執拗に長時間居続けるため影響が大きい。秋川での事例は関根（2010年）に詳しい。

■**特記事項**：

執筆者 川内博

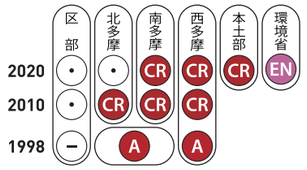
文献一覧 8, 19, 38



東京都外　2017年

ブッポウソウ
Eurystomus orientalis

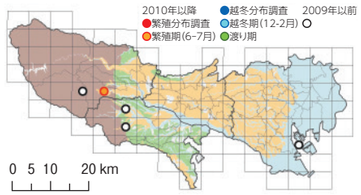
ブッポウソウ目
ブッポウソウ科

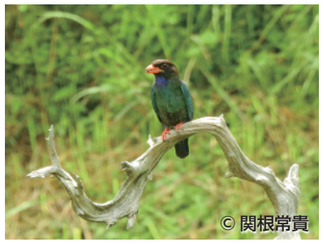


■**種の特性と生息状況**：体長29.5cm。成鳥は全体が金属光沢のある青色で、頭部や顔は黒褐色。平地から低山地の樹林、集落や耕作地に隣接する樹林などに生息し、主に飛翔性昆虫類を食べる。本州、四国、九州で夏鳥。南多摩では1980年代初めまで、西多摩では2000年代末まで繁殖していたが、その後繁殖は見られなくなった。近年は散発的に目撃情報があるのみで、現在繁殖地は確認されていない。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採、過剰利用、在来種による競争（競合）、基質・基物の減少および消失。特に、繁殖に利用される樹洞がある大径木の消失、繁殖地や越冬地でのカメラマンによるかく乱による影響が大きい。

■**特記事項**：現在も各地で記録があることから、生息状況の把握が必要である。





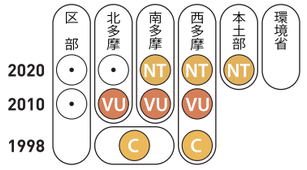
東京都　2020 年

執筆者　御手洗望

文献一覧　2, 16, 61

オオアカゲラ
Dendrocopos leucotos

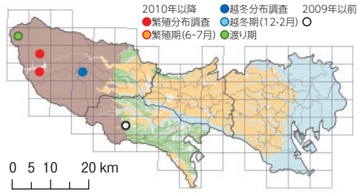
キツツキ目
キツツキ科



■**種の特性と生息状況**：体長28cm。成鳥は後頸から尾までが黒く、腰は白い。腹から下尾筒までは淡赤色。雄の頭頂は赤い。平地から山地の高木の多い樹林に生息し、昆虫類を食べる。北海道、本州、四国、九州で留鳥または漂鳥。都内では南多摩および西多摩のブナ帯の自然林に生息し、繁殖している。冬は低山地まで漂行する。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採。山地の広葉樹林の伐採が、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

■**特記事項**：近年丘陵地での観察例減少が指摘されており、もともと生息分布情報が少ないため情報の蓄積が望まれる。



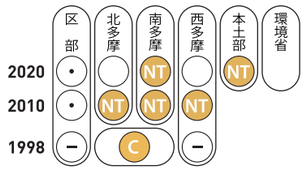
東京都外　2015 年

執筆者　田畑伊織

文献一覧　8, 16, 61, 62

アカゲラ
Dendrocopos major

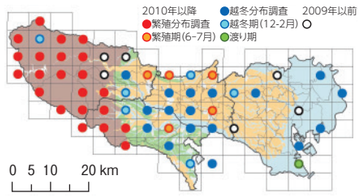
キツツキ目
キツツキ科



■**種の特性と生息状況**：体長24cm。雌雄同大で、雄の後頭部には赤い羽毛があり識別できる。四国以北の森林に留鳥または漂鳥として生息し、主に木の中にすむ昆虫類やその幼虫を食べる。枯木に巣穴を掘り繁殖する。全国的に生息分布が拡大しているようで、東京でも西多摩での記録が増えている。南多摩でも冬季に標高の低い丘陵地や河川敷の林などでも観察されている。

■**生存を脅かす要因**：生息域が比較的狭く、また枯木の残る自然林の減少で生息環境の悪化が考えられる。

■**特記事項**：



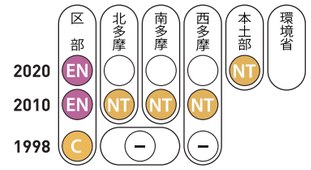
2010 年

執筆者　川内博

文献一覧　8, 10

アオゲラ
Picus awokera

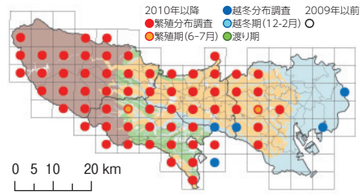
キツツキ目
キツツキ科



■**種の特性と生息状況**：体長29cm。成鳥は顔から頸が灰色、背面は黄緑色。額と眼先は黒く後頭は赤い。平地から山地の樹林に生息し、昆虫類やクモ類、ムカデ類などを食べる。本州、四国、九州で留鳥。都内では多摩地域の丘陵地から山地の樹林に生息し、繁殖している。近年は都市部の公園緑地の樹林でも局地的に営巣が確認されている。

■**生存を脅かす要因**：開発や植林による営巣可能な枯れた大径木の減少や、営巣場所周辺での写真撮影など人為的ストレスによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。大径木の保全を図り、枯死木を残すことや、営巣が確認された場合には、必要に応じて立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

■**特記事項**：



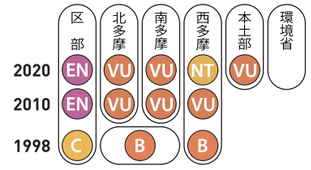
2010 年

執筆者　金井裕

文献一覧　8, 54

チョウゲンボウ
Falco tinnunculus

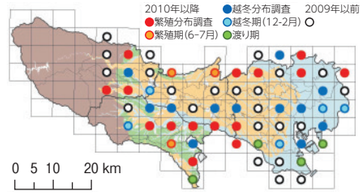
ハヤブサ目
ハヤブサ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄30cm、雌33cm。雄成鳥は頭頸部、顔、腰から尾にかけて青灰色。背、翼上面は茶褐色。平地から山地の崖のほか、橋脚や煙突などの人工建造物で繁殖する。ネズミ類や小鳥、昆虫類を食べる。北海道、本州（中部以東）では留鳥または漂鳥。本州（近畿以西）、四国、九州、南西諸島では主に冬鳥。山地の崖に営巣していたが、1990年代以降は平地の都市部にあるビルや橋などの人工物にも営巣することも多くなった。都内では海岸の埋立地や河川敷の草地、丘陵地や低山地の耕作地や造成地、住宅地などで見られ、営巣もしており、分布は局所的だが増加傾向にある。

■**生存を脅かす要因**：食物となるネズミ類や小鳥、昆虫類の豊富な広大な草地環境の減少、ハシブトガラスによる卵やヒナの捕食が、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：現存するヨシ原、草地を可能な限り保全することや、こうした草地環境を創出すること、また、現存する草地への人の立入りや車の乗入れについて、必要に応じて注意喚起を行うことが望ましい。



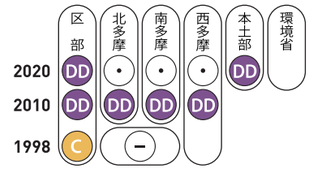
稲城市　2021 年

執筆者　植田睦之

文献一覧　8, 10

コチョウゲンボウ
Falco columbarius

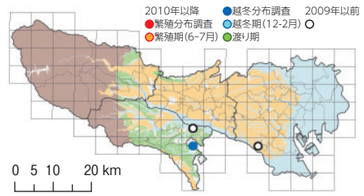
ハヤブサ目
ハヤブサ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄28cm、雌31cm。雄成鳥は頭頂、背の上面が鮮やかな青灰色。喉は白く、胸からの体下面は橙褐色で、黒褐色の縦斑がある。耕作地、干拓地、草地など開けた場所に生息し、主に小鳥を食べる。北海道、本州、四国、九州で冬鳥。都内では海岸の埋立地、河川敷の広大な草地や低木林などで少数見られるが、実際の生息状況は不明。

■**生存を脅かす要因**：埋立地や河川敷に見られる広大な草地、低木林の減少が、本種の生存を脅かす要因である。こうした草地や樹林が混在する環境を可能な限り保全することが望ましい。

■**特記事項**：



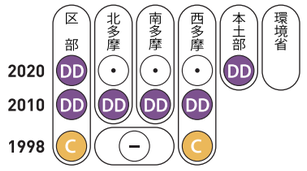
東京都外　2009 年

執筆者　金井裕

文献一覧　43, 49

チゴハヤブサ
Falco subbuteo

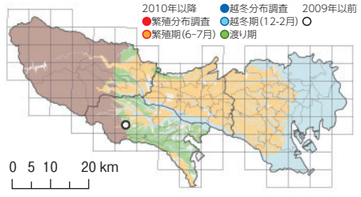
ハヤブサ目
ハヤブサ科



■**種の特性と生息状況**：体長28～31cm。成鳥は頭頂からの上面が青灰黒色。喉からの体下面は白く、黒色縦斑がある。下腹、下尾筒、脛毛は赤褐色。一般に平地から低山地の樹林で繁殖する。軽快に飛びながら小鳥や昆虫類を食べる。北海道、本州（北部）では夏鳥。本州、四国、九州、南西諸島では旅鳥。都内では春秋に海岸の埋立地や河川敷の広大な草地において、渡りの途中と思われる個体が見られる。西多摩で見られることもあるが、繁殖については不明。

■**生存を脅かす要因**：渡りの途中に利用する埋立地や河川敷の低木が混在する広大な草地を、可能な限り保全することが望ましい。渡り時期も含め、調査がほとんど行われていないため生息状況は不明である。詳細な状況の把握が望まれる。

■**特記事項**：



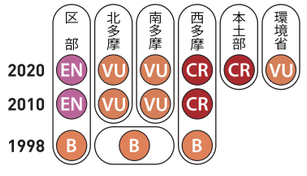
東京都外　2020 年

執筆者　金井裕

文献一覧　43, 49

ハヤブサ
Falco peregrinus

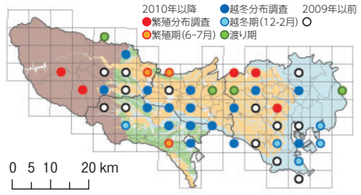
ハヤブサ目
ハヤブサ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄 56cm、雌61cm。成鳥は上面が青黒色で、眼から頬にはひげ状の黒斑がある。平地から山地の海岸、河口、河川、湖沼、耕作地などに生息し、崖地の岩棚や横穴、高層ビルなどで繁殖する。主に飛んでいる鳥類を捕食する。北海道、本州、四国、九州では留鳥または漂鳥。南西諸島では冬鳥。西多摩の山地では自然崖・採石場で複数の営巣地が確認されている。区部や南多摩、北多摩では主に越冬期に観察されるが、区部では繁殖の可能性がある。

■**生存を脅かす要因**：石灰採掘、過剰利用。石灰岩等の採掘は営巣環境を提供しているが、採掘事業の拡張等により営巣地が破壊される可能性がある。ロッククライミングなどのレジャーによる影響も確認されている。

■**特記事項**：区部での繁殖は高層建築物を利用している可能性があり、繁殖が確認された場合は施設管理に際して配慮が必要である。



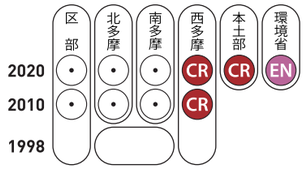
文京区　2021 年

執筆者　御手洗望

文献一覧　54, 61, 63, 71

ヤイロチョウ
Pitta nympha

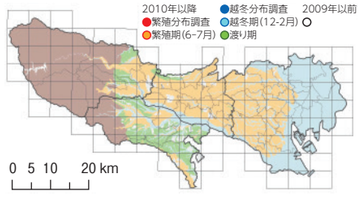
スズメ目
ヤイロチョウ科



■**種の特性と生息状況**：体長18cm。成鳥の羽色は色彩に富み、非常に美しい。主に山地の常緑広葉樹林やマツ林、植林地に生息し、昆虫類やミミズ類などを食べる。本州（東北以南）、四国、九州で夏鳥として渡来する。西多摩の山地で繁殖期に複数の記録があり、一定期間連続した観察例もあることから通過でなく繁殖の可能性がある。

■**生存を脅かす要因**：渡りの目的地（繁殖地・越冬地）および経路の環境悪化。渡来する個体数がごく少なく、今後繁殖が確認された場合には観察者やカメラマンの集中が懸念される。

■**特記事項**：南多摩では渡りの時期の記録があるが、通過と考えられることから「非分布」として扱った。西多摩での繁殖期の生息状況の把握が必要である。



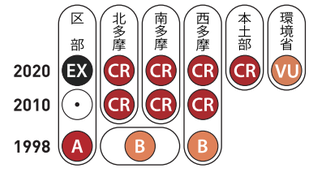
東京都

執筆者　御手洗望

文献一覧　16, 28, 36

サンショウクイ
Pericrocotus divaricatus divaricatus

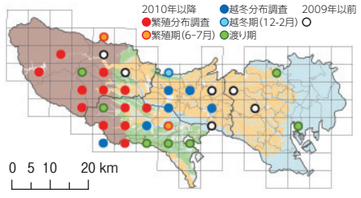
スズメ目
サンショウクイ科



■**種の特性と生息状況**：体長20cm。雄成鳥は額、喉から側頸と体下面は白く、背面は灰色。翼と尾は黒褐色。頭頂から後頸、過眼線は黒くつながっており、嘴と足は黒色。平地から山地の広葉樹林に生息し、昆虫類やクモ類を食べる。本州、四国、九州で夏鳥。北海道での記録も少数ある。1970年代から1990年代にかけては、特に太平洋側で減少し、環境省のレッドリストにも選定されたが、2010年代は一転して大幅に増加している。都内では以前は都心部の樹林で繁殖期の記録があり、南多摩や西多摩の樹林に生息していた。全国と同様に一時激減し、渡りの途中の個体が見られるのみとなっていたが、近年は南多摩や西多摩の樹林で繁殖期にも生息するようになっている。

■**生存を脅かす要因**：樹林性鳥類であるので、平地から低山地の広葉樹の高木を有する樹林の減少が、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

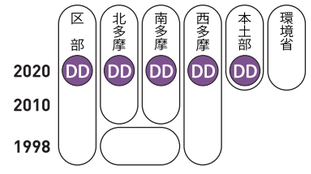
■**特記事項**：現存する広葉樹の高木の保全と合わせ、平地から低山地までの人工林を広葉樹林へ転換していくことが望ましい。



執筆者　植田睦之　文献一覧　8, 10

リュウキュウサンショウクイ
Pericrocotus divaricatus tegimae

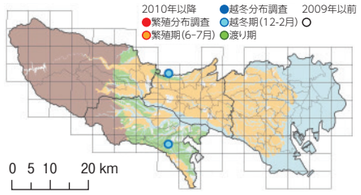
スズメ目
サンショウクイ科



■**種の特性と生息状況**：サンショウクイの1亜種でサンショウクイと比べ、全体に黒色味が強い。胸が灰色をしていること、嘴の付け根からおでこにかけての白色部が小さい点が特徴である。従来は南西諸島や九州南部に留鳥として分布していたが、1990年代に亜種サンショウクイが減少した太平洋側を中心に分布を拡大し、関東地方でも見られるようになった。都内では2010年代から見られるようになり、最初は越冬期の記録が多かったが、現在は繁殖期も見られるようになっている。

■**生存を脅かす要因**：近年になって記録されるようになった亜種のため、詳細は不明である。

■**特記事項**：2010年代から分布するようになった種のため、今後の動向についてモニタリングしていく必要がある。



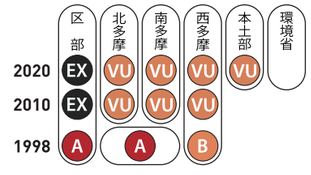
東京都外　2022 年

執筆者　植田睦之

文献一覧　8, 10, 66

サンコウチョウ
Terpsiphone atrocaudata

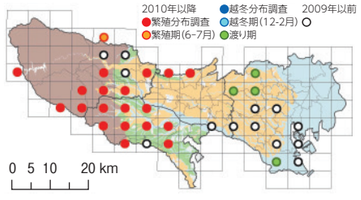
スズメ目
カササギヒタキ科



■**種の特性と生息状況**：体長雄44.5cm、雌17.5cm。雄成鳥は頭から胸にかけて黒紫色で、後頭に短い冠羽がある。体下面は白く、尾は黒色で中央の2枚が非常に長い。平地から低山地の薄暗い樹林に生息し、飛翔性昆虫類などを食べる。本州、四国、九州、南西諸島で夏鳥。都内では西多摩や南多摩の丘陵地や山地の樹林に渡来し繁殖している。渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。全国的に1970年代から1990年代にかけて減少したが、その後回復傾向にある。都内でも1990年代には急減したが、回復傾向にある。

■**生存を脅かす要因**：現存する生息地の環境は可能な限り保全することや、人工林へ広葉樹の移植を行い食物資源の回復を図るとともに、枝打ちを行って採食のための林内空間を確保すること、また、営巣が確認された場合には、必要に応じて立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

■**特記事項**：現存する広葉樹の高木の保全と合わせ、平地から低山地までの人工林を広葉樹林へ転換していくことが望ましい。

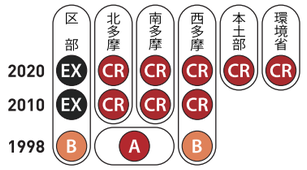


2004 年

執筆者　植田睦之　文献一覧　8, 10

チゴモズ
Lanius tigrinus

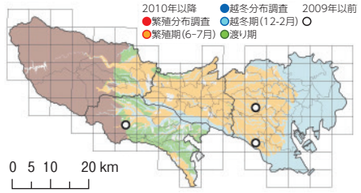
スズメ目
モズ科



■**種の特性と生息状況**：体長18.5cm。雄成鳥は額から後頸にかけて青灰色で、過眼線は太く黒い。背面や翼は茶褐色で体下面は白い。平地から山地のアカマツ林や雑木林の林縁や開けた林内などに生息し、昆虫類やミミズ類、両生・爬虫類などを食べる。本州で夏鳥。以前は太平洋側にも分布していたが、1980年代以降、分布が縮小し、日本海側の地域に局所的に分布する状況になっている。都内では以前は北多摩の丘陵地から平地の雑木林や公園・墓地、耕作地などで繁殖していたが、近年の記録はない。

■**生存を脅かす要因**：全国的に分布が縮小しており、中継地や越冬地など国外の要因が関係している可能性が高い。また、疎林に生息するため、耕作地、特に植木畑の減少が、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

■**特記事項**：大河川の河川敷や大規模な公園の緑地において、可能な限り疎林が成立するような管理を行うことが望ましい。



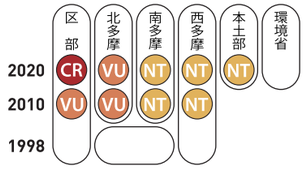
東京都外　2013 年

執筆者　植田睦之

文献一覧　8, 10

モズ
Lanius bucephalus

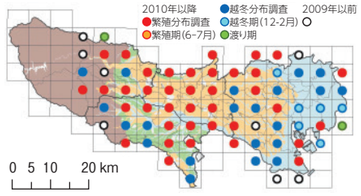
スズメ目
モズ科



■**種の特性と生息状況**：体長20cm。雄成鳥は頭部から後頸が茶褐色で、過眼線は黒い。背面は灰色、翼と尾は黒褐色。平地から山地の疎林、耕作地、河畔林、公園などで、草地と樹林が混在する環境に生息し、昆虫類やミミズ類、両生・爬虫類などを食べる。秋にはキーキーと鳴く高鳴きが聞かれる。北海道、本州、四国、九州では留鳥または漂鳥。都内では高標高地を除く、西多摩から湾岸まで広く生息し繁殖するが、宅地化が進む23区と北多摩地域では1990年代に急減した。北多摩ではやや回復傾向にあるが、23区では湾岸の公園や河川沿いで記録されているのみである。

■**生存を脅かす要因**：開発により、丘陵地の低木林や草地、耕作地といった本種の繁殖できる環境が減少したことが本種の生存を脅かす要因と考えられる。

■**特記事項**：現存する繁殖環境は可能な限り保全することや、公園内や耕作地の周囲に草本類が繁茂し、昆虫類が増えるように、可能な範囲で草刈り頻度の減らすことや殺虫剤を使用しないなど配慮することが望ましい。

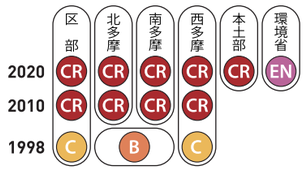


執筆者　植田睦之・金井裕

文献一覧　8, 30, 45

アカモズ
Lanius cristatus

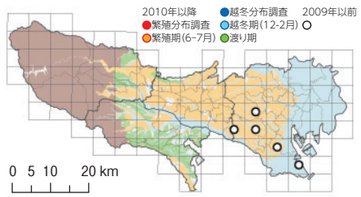
スズメ目
モズ科



■**種の特性と生息状況**：体長20cm。雄成鳥は頭頂から背、肩羽、腰、尾までが赤茶色で翼は黒褐色。体下面は白く、嘴と足は黒い。平地から山地の明るい樹林や低木のある草地、林縁、耕作地などに生息し、昆虫類やミミズ類、両生・爬虫類、鳥類などを食べる。北海道、本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では旅鳥または冬鳥。1980年代以降急激に減少し、現在の全国の生息数は150つがい程度と推定されている。都内では以前は丘陵地から平地の明るい雑木林や、大河川中流域の低木が混じる河川敷の草地で繁殖していたが、近年は記録がない。

■**生存を脅かす要因**：全国的に分布が縮小しており、中継地や越冬地など国外の要因が関係している可能性がある。また、疎林や草地環境、耕作地の減少が、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

■**特記事項**：大河川の河川敷や大規模な公園の緑地において、可能な限り疎林や草地が成立するような管理を行うことが望ましい。



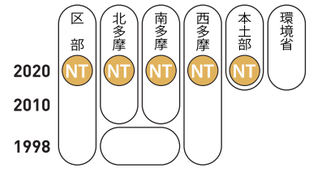
東京都外　2021 年

執筆者　植田睦之

文献一覧　8, 10, 89

オナガ
Cyanopica cyanus

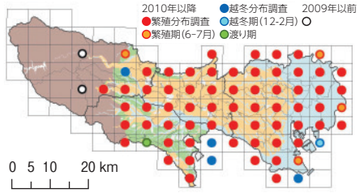
スズメ目
カラス科



■**種の特性と生息状況**：体長32～39cm。尾が長い。頭部が黒く、背から肩羽、腰、尾までが水色。体下面は白く、嘴と足は黒い。平地から山地の雑木林、市街地の公園などに生息し、昆虫類や果実などを食べる。東北地方から中部地方で留鳥。全国鳥類繁殖分布調査、モニタリングサイト1000里地調査ともに減少傾向が示されている。都内では丘陵部から区部にかけて分布しており、区部では分布を拡げ増加しているものの、多摩地域では減少傾向にある。

■**生存を脅かす要因**：樹高の高い樹木と耕作地などの開けた場所が組み合わさった場所に生息しており、区部では公園の樹木が生長したことで、そうした環境が増えたのが増加している要因と考えられる。反対に多摩地域では耕作地の減少により、生息環境が減少しており、それが本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

■**特記事項**：樹高の高い木が残るようにするとともに、耕作地が減少しないような施策をすすめていく必要がある。



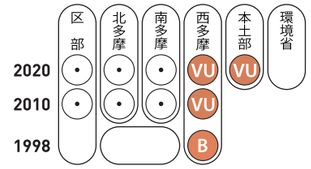
東京都外　2018 年

執筆者　植田睦之

文献一覧　8, 10, 27

ホシガラス
Nucifraga caryocatactes

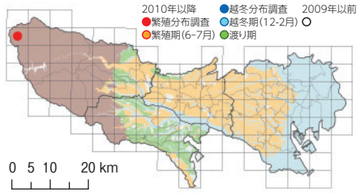
スズメ目
カラス科



■**種の特性と生息状況**：体長34.5cm。成鳥は頭頂、翼、尾を除いて黒褐色地に細かな白斑が密にある。亜高山帯から高山帯の針葉樹林に生息し、ハイマツやシラビソ、ブナなどの種子や昆虫類などを食べる。北海道、本州、四国、九州で留鳥または漂鳥。都内では西多摩の亜高山帯で目撃されることがある。冬は、山地帯の樹林まで移動してくることもある。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採・局所分布。高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすい。都には少ない亜高山・高山帯の鳥であり、生息状況に不明な点が多いので、詳細な状況の把握が望まれる。

■**特記事項**：



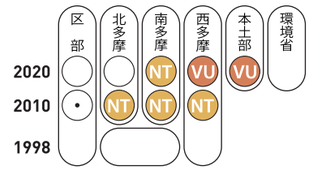
奥多摩町　2010 年

執筆者　田畑伊織

文献一覧　8, 16

キクイタダキ
Regulus regulus

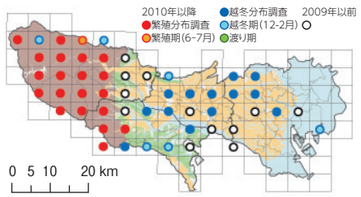
スズメ目
キクイタダキ科



■**種の特性と生息状況**：体長10cmと、日本最小の鳥のひとつで、雌雄ほぼ同色。雄の頭頂部には赤い羽毛がある。本州中部以北の山地から亜高山帯にかけて留鳥として、主に針葉樹林に生息している。秋冬期には里山や平地の針葉樹の多い緑地に下りる。年によっては区部の緑地まで来ることがある。非繁殖期にはカラ類やエナガなどと混群をつくる。食物は小さな虫や幼虫、クモ類などで、ホバリングして枝先の虫などを捕食することもある。

■**生存を脅かす要因**：現時点では生存を脅かす要因はないと思われるが、情報が少なく、判断できない。

■**特記事項**：



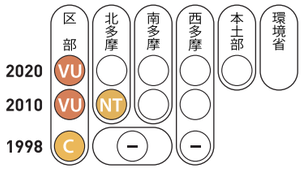
東京都外　2009 年

執筆者　川内博

文献一覧　8

ヤマガラ
Poecile varius

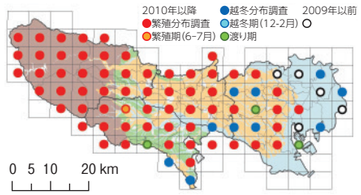
スズメ目
シジュウカラ科



■**種の特性と生息状況**：体長14cm。雌雄同色で、ほぼ全国に留鳥として分布する。常緑広葉樹林を好むが山地の混交林や都市公園の緑地などにも生息し、樹洞や巣箱、ときに人工物の穴などを利用して繁殖する。秋冬期には貯食行動も見られる。最近、郊外だけでなく区部の緑地でも繁殖分布を広げている。人になれやすく、食物をねだったり、手に止まって食物をもらったりする行為が目に付く。

■**生存を脅かす要因**：現在、都内全域で個体数が増え、分布を広げているので、生存が脅かされる環境的要因は見当たらない。また籠で飼って芸を仕込むなどのために密猟の対象となったりしている。

■**特記事項**：



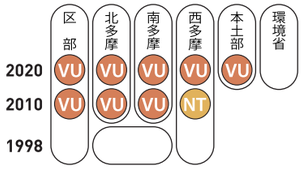
東京都外　2008 年

執筆者 川内博

文献一覧 8, 75

ヒバリ
Alauda arvensis

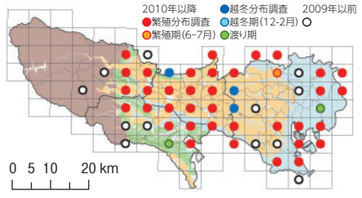
スズメ目
ヒバリ科



■**種の特性と生息状況**：体長17cm。全体に褐色で、後頭に冠羽がある。翼は黒褐色で、濃いバフ色の羽縁がある。眼の後方から耳羽を囲むように細い黒線がある。草地、耕作地などに生息し、植物の種子や昆虫類などを食べる。北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。都内では以前は山地を除く全域で見られ繁殖していたが、現在は広い草地が存在する河川敷や造成地などに限られる。全国的にはその分布の縮小は止まったか回復傾向にあると考えられているが、東京では継続して縮小傾向にある。

■**生存を脅かす要因**：草丈が30cm 程度までの広い草地の減少や、生息地への人や犬の立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。また、作物が麦から野菜類にかわったことも耕作地に分布しなくなった原因と考えられる。

■**特記事項**：現存する生息地では、草地環境を可能な限り保全することや、必要に応じて人の立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。また、耕作地周辺や河川の堤防では、草地を残すため草刈り頻度の調節を行うなどの配慮が望まれる。



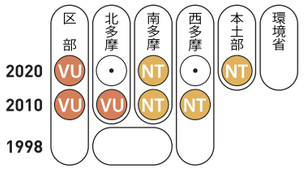
江戸川区　2014 年

執筆者 植田睦之

文献一覧 8, 9, 10

コシアカツバメ
Hirundo daurica

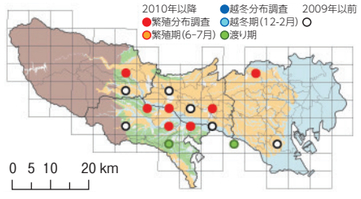
スズメ目
ツバメ科



■**種の特性と生息状況**：体長19cm。雌雄同色で、ツバメより少し大きく、尾も長い。夏鳥として西日本を中心に渡来する。東京では南多摩の5階建ての住宅団地の最上階の天井に造巣する例が多く、繁殖分布は限られている。2000年ごろは生息が衰退したが、最近はやや復活している。ただし、全国的に見れば衰退傾向が見られている。

■**生存を脅かす要因**：団地の階段上などで営巣するため、糞害で住民に嫌われることが多く、場合によっては巣を落とされることがある。また、営巣場所に好みがあるため、適切な環境が得られないことがある。

■**特記事項**：



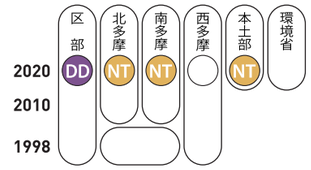
東京都外　2010 年

執筆者 川内博

文献一覧 8, 10, 61

イワツバメ
Delichon dasypus

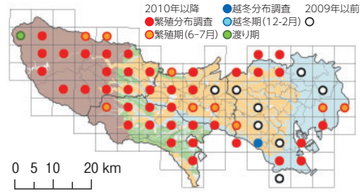
スズメ目
ツバメ科



■**種の特性と生息状況**：体長13cm。雌雄同色で、ツバメより小さい。全国に夏鳥として、平地から山地まで渡来する。巣はコンクリート建築物に造り、集団営巣する。食物は空中にいる昆虫類を飛びながらとる。生息は主に西多摩・南多摩だが、北多摩や区部の周辺部にも営巣地が広がっている。

■**生存を脅かす要因**：コンクリート製の橋げた、鉄道の橋梁、駅舎、校舎など人工建造物に集団で営巣し繁殖する。巣の下には大量の糞が落ちるため、糞害を嫌がる住民や利用者、所有者による巣落としなどが行われている。また、ハシブトガラスによる営巣地への襲来、スズメ・ヒメアマツバメによる巣の乗っ取りなどがある。

■**特記事項**：



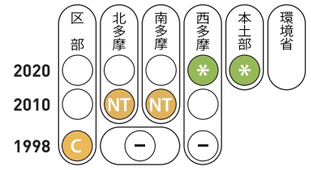
東京都外　2015 年

執筆者 川内博

文献一覧 8, 35, 59

ウグイス
Cettia diphone

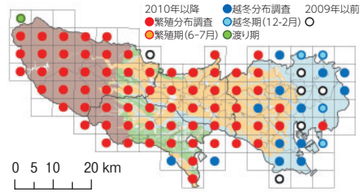
スズメ目
ウグイス科



■**種の特性と生息状況**：体長14 ～ 15.5cm。成鳥は頭部から尾までの背面と翼が暗い黄緑色。白色の眉斑と淡黒褐色の過眼線がある。平地から山地のササなどが茂る樹林に生息し、昆虫類や植物の種子、果実などを食べる。北海道や高標高の場所では夏鳥。本州、四国、九州、南西諸島では留鳥。都内では丘陵地や山地の林床にササなどが繁茂した樹林で繁殖している。平地の樹林では冬に見られるのみだったが、近年は繁殖期にも生息するようになっている。

■**生存を脅かす要因**：開発などによる樹林の減少、林床植生の刈払いが本種の生存を脅かす要因である。シカの増加による林床植生への食害や開花後の実生の摂食による回復の阻害もウグイスの生息地を減らす大きな要因で、都内にあるモニタリングサイト1000の調査地でも林床植生の減少により個体数が大きく減少していることがわかっている。

■**特記事項**：現存する生息環境を可能な限り保全することや、シカによる植生変化を防止すること、樹林管理を行っている林分では林床植生が繁茂する区画を設けるなど配慮することが望ましい。



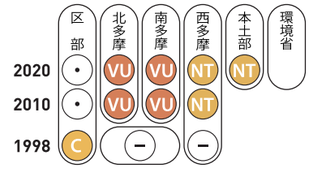
2010 年

執筆者 植田睦之

文献一覧 7, 8, 10

ヤブサメ
Urosphena squameiceps

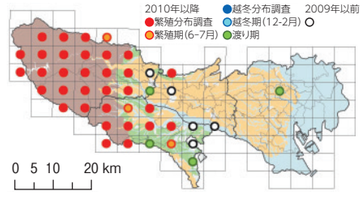
スズメ目
ウグイス科



■**種の特性と生息状況**：体長10.5 cm。成鳥は頭部から尾までの背面と翼が茶褐色で、眉斑は淡色で明瞭。平地から山地の林床植生が繁茂した樹林に生息し、昆虫類などを食べる。北海道、本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では冬鳥。都内では北多摩・南多摩・西多摩の丘陵地や山地で繁殖している。渡りの時期には、通過個体が平地の樹林でも見られる。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採・シカの食害。生息地の環境変化、特に低木層、草本層の植生の衰退が本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

■**特記事項**：近年のシカの増加やササの一斉開花による枯死による下層植生の変化も、本種の生息状況に影響を与えている可能性がある。



文京区　2020 年

執筆者 田畑伊織

文献一覧 8, 16, 61, 62

メボソムシクイ
Phylloscopus xanthodryas
スズメ目
ムシクイ科

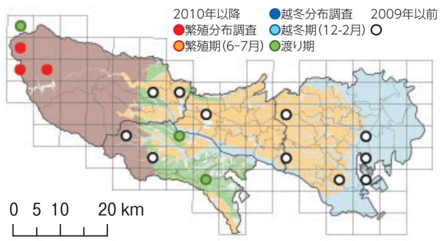
	区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
2020	・	・	・	VU	VU	
2010	・	・	・	VU		
1998						

■種の特性と生息状況：体長13 cm。成鳥は頭部から腰までの背面が暗緑色で、過眼線は暗色。体下面は淡黄色。主に亜高山帯の針葉樹林に生息し、昆虫類などを食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。都内では西多摩の亜高山帯に5月に渡来する。春・秋の渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。

■生存を脅かす要因：森林伐採・局所分布。高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすいが、生息状況については不明な点が多いので、詳細な状況の把握が望まれる。

■特記事項：近年のシカの増加やササの一斉開花による枯死による下層植生の変化も、本種の生息状況に影響を与えている可能性がある。

執筆者 田畑伊織
文献一覧 8, 16



東京都外　2008年

エゾムシクイ
Phylloscopus borealoides
スズメ目
ムシクイ科

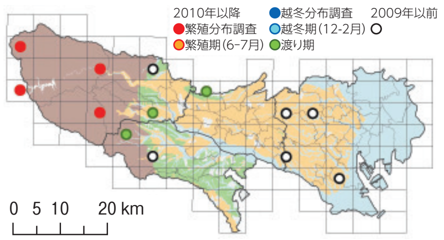
	区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
2020	・	・	・	VU	VU	
2010	・	・	・	VU		
1998						

■種の特性と生息状況：体長11.5 cm。成鳥は頭頂から後頸が暗灰褐色で、翼や尾は黒褐色。眉斑は白く明瞭で過眼線は暗褐色。山地の針広混交林・針葉樹林に生息し、昆虫類などを食べる。北海道、本州（中部以北）、四国で夏鳥。都内では西多摩の山地帯上部から亜高山帯に4月に渡来する。春・秋の渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。

■生存を脅かす要因：森林伐採・局所分布。高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすいが、生息状況については不明な点が多いので、詳細な状況の把握が望まれる。

■特記事項：近年のシカの増加やササの一斉開花による枯死による下層植生の変化も、本種の生息状況に影響を与えている可能性がある。

執筆者 田畑伊織
文献一覧 8, 16



東京都外　2010年

センダイムシクイ
Phylloscopus coronatus
スズメ目
ムシクイ科

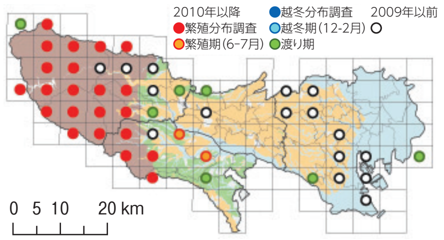
	区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
2020	EX	CR	VU	VU	VU	
2010	・	VU	VU	VU		
1998						

■種の特性と生息状況：体長13cm。雌雄同色で、九州以北の山地の落葉広葉樹林に夏鳥として渡来する。渡りの時期には丘陵地や市街地の林でもその姿が見られる。食物は昆虫類や節足動物などで、葉陰にいるものを捕る。東京での繁殖地は西多摩と南多摩の一部で、繁殖している可能性があるという記録が増えている。これは全国鳥類繁殖分布調査と一致する傾向である。

■生存を脅かす要因：シカの増加で、林床植物が食べられ、環境が悪化した場所では、本種の減少が報告されているが、現在のところその現象は見られていない。しかし、シカの食害は拡大しているので、今後を注視する必要がある。

■特記事項：

執筆者 川内博
文献一覧 8, 10



文京区　2018年

オオセッカ
Locustella pryeri
スズメ目
センニュウ科

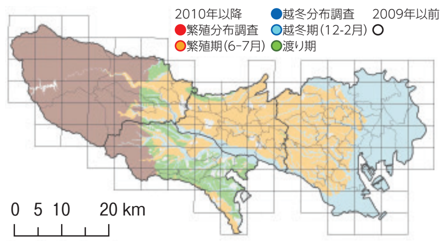
	区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
2020	CR	・	・	・	CR	EN
2010	CR	・	・	・		
1998	B					

■種の特性と生息状況：体長13cm。成鳥は頭部から尾までの背面と翼が濃茶色で、黒褐色の縦斑がある。眉斑と眼先は淡色。海岸や河口、河川、湖沼などのヨシ原やそれに続く草原に生息し、昆虫類やクモ類などを食べる。本州で留鳥（青森、茨城、千葉で局地的に繁殖。東北以南で越冬）。都内では海岸の埋立地や河川敷のヨシ原で記録があり、越冬している可能性がある。

■生存を脅かす要因：埋立て、浚渫、河川改修、アレチウリの繁茂などによるヨシやスゲ類が混生する広大な湿性草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。ヨシ原とその他の草地が混在する場所を可能な限り広域に保全することや、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。

■特記事項：

執筆者 金井裕
文献一覧 48, 58



東京都外　2015年

オオヨシキリ
Acrocephalus orientalis
スズメ目
ヨシキリ科

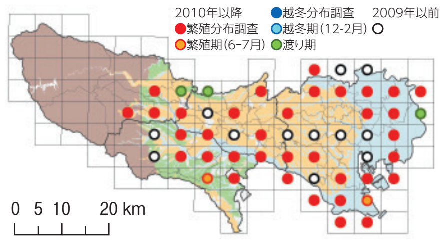
	区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
2020	CR	VU	VU	VU	VU	
2010	VU	VU	VU	NT		
1998						

■種の特性と生息状況：体長18.5cm。成鳥は頭部から尾にかけての背面が灰褐色で、体下面は淡色。河口、河川、湖沼のヨシ原などに生息し、昆虫類やクモ類などを食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。都内では河川敷や海岸の埋立地などのヨシ原で繁殖している。渡りの時期には、平地の池のある公園などで見られることがある。1970年代から1990年代にかけて大きく減少し、その後は大きな変化はないが23区の河川流域でやや減少傾向にある。

■生存を脅かす要因：埋立て、浚渫、河川改修、アレチウリの繁茂などによる広大なヨシ原の減少が、本種の生存を脅かす要因である。

■特記事項：広大なヨシ原が現存する場所を可能な限り保全することや、必要に応じてヨシ刈りや火入れなどにより、生育を補助すること、また、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。

執筆者 植田睦之
文献一覧 8



あきる野市　2005年

コヨシキリ
Acrocephalus bistrigiceps
スズメ目
ヨシキリ科

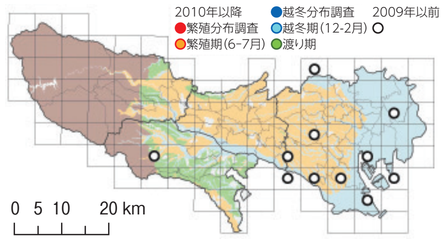
	区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
2020	・	・	DD	DD	DD	
2010	EN	NT	NT	NT		
1998	−	C		−		

■種の特性と生息状況：体長14cm。雌雄同色、九州以北の高原の湿地や草原などには夏鳥として渡来する。都内では2000年代初めまでは、東京港の中央防波堤埋立地で繁殖期にさえずりが複数記録されているが、それ以後はない。また、東京湾岸の葛西臨海海浜公園では、2000年代には繁殖期の観察事例があるが、最近はまったく記録がない。多摩川などの河川敷で渡り途中の個体が観察される程度である。

■生存を脅かす要因：かつては区内のごみの最終処分場の中央防波堤埋立地に広大な葦原があったときに繁殖した可能性があった。逐次整地され生息環境がなくなった。多摩川や荒川河川敷の植生を本種の生息に適したものに改良されることが望まれる。

■特記事項：

執筆者 川内博
文献一覧 37, 73

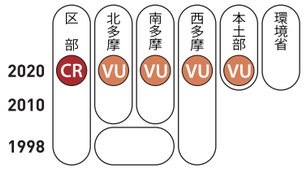


東京都外　2008年

植物
藻類
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
淡水魚類
昆虫類
甲殻類
クモ類
貝類

セッカ
Cisticola juncidis

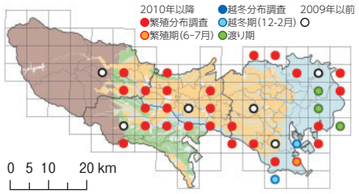
スズメ目
セッカ科



■**種の特性と生息状況**：体長11.2～13.0cm。上面が褐色で下面は淡い。頭部は濃く、白い眉斑がある。尾の下面は先端が白く、その内側に黒い帯があり目立つ。繁殖期には飛びながらヒッヒッヒッと鳴きながら上昇し、チャチャッチャチャッと鳴きながら下降する特徴的なさえずりを行う。ヨシやチガヤやススキの草原に生息し、昆虫類やクモ類などを食べる。本州、四国、九州、南西諸島で留鳥。都内では河川敷や海岸の埋立地などのヨシ原で繁殖している。1970年代以降減少し続けており、近年では23区の河川沿いでの減少が顕著である。

■**生存を脅かす要因**：埋立て、浚渫、河川改修、アレチウリの繁茂などによる広大なヨシ原の減少が、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：ヨシ原等の現存する生息地を可能な限り保全することや、必要に応じてヨシ刈りや火入れなどにより、生育を補助すること、また、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。

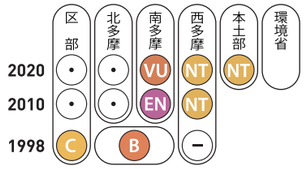


東京都外　2015 年

執筆者　植田睦之
文献一覧　8, 10, 11

ゴジュウカラ
Sitta europaea

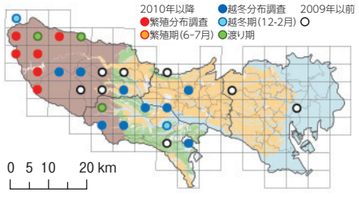
スズメ目
ゴジュウカラ科



■**種の特性と生息状況**：体長13.5 cm。成鳥は頭部から肩にかけての背面が青灰色で、黒い過眼線がある。体下面は白く、脇は淡橙色。低山地から亜高山帯の落葉広葉樹林に生息し、昆虫類やクモ類、植物の種子などを食べる。北海道、本州、四国、九州で留鳥。都内では南多摩や西多摩のブナ帯の自然林に生息する。冬はより低い樹林でも見られることがある。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採。開発や植林などによる、大径木が多い自然林の伐採が、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

■**特記事項**：

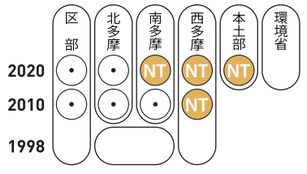


東京都外　2010 年

執筆者　田畑伊織
文献一覧　8, 16, 61, 62

キバシリ
Certhia familiaris

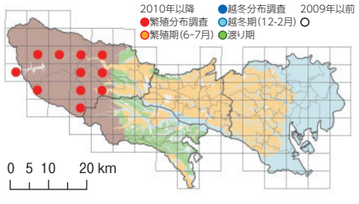
スズメ目
キバシリ科



■**種の特性と生息状況**：体長14cm。雌雄同色で、九州以北の山地に留鳥として生息する。主に針葉樹林地や混交林にすみ、樹木の根元から幹をのぼりながら樹皮の間に潜む昆虫類やクモ類などを捕る。秋冬期にも繁殖地にとどまるようで、ふもとに下りることは少ない。繁殖期の記録は、かつては雲取山付近だけだったが、最近は分布を広げたようで、西多摩でひろく記録されている。

■**生存を脅かす要因**：山中の森林にだけ生息するため、人目につきにくく、その生態については不明な点が多い。全国鳥類繁殖分布調査の結果を見ると全国的にも繁殖分布が標高の低い方に拡大しているようだがその原因はわからない。さらなる調査が必要な鳥である。

■**特記事項**：

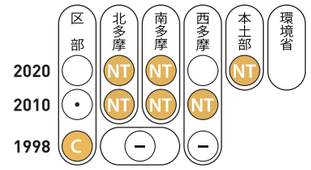


東京都外　2010 年

執筆者　川内博
文献一覧　8, 10

ミソサザイ
Troglodytes troglodytes

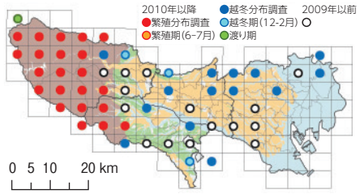
スズメ目
ミソサザイ科



■**種の特性と生息状況**：体長11cm。雌雄同色で、屋久島以北の全国に留鳥として生息する。低山から亜高山の針葉樹林・混交林などを好み、渓流沿いで繁殖する。秋冬期には山麓に下り、ときに市街地の公園などでも越冬する。全国的には繁殖分布が広がっているが、東京では従来から生息している西多摩・南多摩での状況はあまり変化がない。

■**生存を脅かす要因**：沢沿いに営巣する傾向があるので、渓谷や沢の樹林を含む環境変化は極力避け、一定の範囲の保護策を講じる必要ある。また、針葉樹の人工林から広葉樹林への転換をしていくことが望ましい。

■**特記事項**：

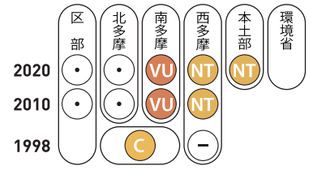


東京都外　2016 年

執筆者　川内博
文献一覧　16, 61

カワガラス
Cinclus pallasii

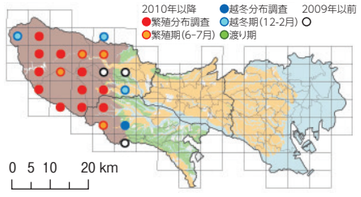
スズメ目
カワガラス科



■**種の特性と生息状況**：体長22cm。成鳥は全体がこげ茶色。水中に潜り、カワゲラやカゲロウなどの水生昆虫や魚類を捕食する。山地の渓流や沢、河川の上流域から中流域など石や岩の多い環境に生息する。北海道、本州、四国、九州で留鳥。南多摩の浅川流域、西多摩の多摩川・秋川・荒川流域の各地で繁殖記録がある。多摩川本流では、安定的に生息する範囲が上流に後退しつつある。

■**生存を脅かす要因**：河川開発、ダム建設、水質汚濁、地球環境の変化に伴う温暖化や異常気象災害。釣り、カヌーなどの河川を利用したレジャーの影響も考えられる。

■**特記事項**：落差工や砂防ダムの水抜き穴を営巣場所として利用することがあるため、これらの改修を行う際には営巣環境を維持するよう配慮する必要がある。

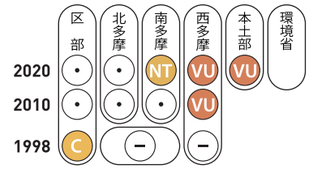


東京都　2014 年

執筆者　御手洗望
文献一覧　16, 58, 61

マミジロ
Zoothera sibirica

スズメ目
ヒタキ科



■**種の特性と生息状況**：体長23.5cm。雄成鳥はほぼ全体が黒色で、白色で太く目立つ眉斑がある。嘴は黒く、足は黄橙色。低山地から亜高山帯までの樹林に生息する。昆虫類やミミズ類、植物の種子などを食べる。北海道、本州（中部以北）で夏鳥。都内では西多摩の標高1000m前後の自然林に渡来し、繁殖しているが局所的。春・秋の渡りの時期には、丘陵地の樹林でも見られることがある。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採。植林のための自然林の伐採などが、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

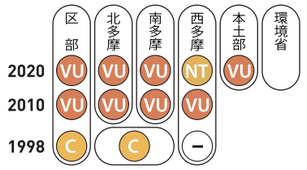
■**特記事項**：

2010 年

執筆者　田畑伊織
文献一覧　2, 8, 16, 60, 61, 62

トラツグミ
Zoothera dauma

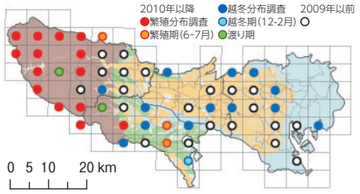
スズメ目
ヒタキ科



■**種の特性と生息状況**：体長29.5cm。頭部から腰までの背面と翼は黄褐色で黒い小斑が密にある。低山地から亜高山帯までの樹林に生息し、冬は山麓地域に下る。昆虫類やミミズ類、植物の果実などを食べる。北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州、南西諸島では留鳥。都内では南多摩や西多摩の山地で繁殖し、冬は丘陵地や平地の樹林で越冬する。渡りの時期には、都市部の公園でも見られる。東京都鳥類繁殖分布調査では1970年代から1990年代にかけて記録が減少したが、その後2010年代にかけて増加している。夜に鳴く種のため、現状の把握の難しい種だが、全国的にも記録が増加しており、森林の成熟とともに回復している可能性がある。

■**生存を脅かす要因**：回復傾向にあるが、生息地は限られており、山地では植林のための自然林の伐採、丘陵地から平地の越冬地の樹林では伐採や低木の刈払いが、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：現存する生息環境を可能な限り保全することが望ましい。また、繁殖期のさえずりが夜間であり生息状況の把握が難しいため、さらなる状況の把握が望まれる。



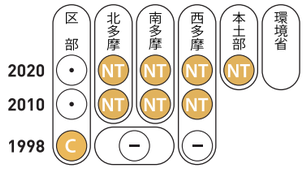
執筆者 植田睦之

文献一覧 8, 10

文京区　2021年

クロツグミ
Turdus cardis

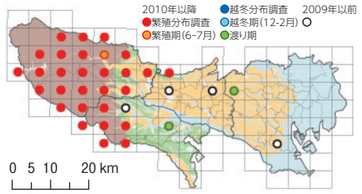
スズメ目
ヒタキ科



■**種の特性と生息状況**：体長21.5cm。雄成鳥は頭部から尾までの背面や翼、喉から胸までが暗灰色。体下面は白く、胸から脇にかけて黒斑がある。平地から山地までの樹林に生息し、昆虫類やミミズ類、植物の種子などを食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。都内では多摩地域の丘陵地や山地の自然林で、繁殖している。渡りの時期には、通過個体が平地の樹林でも見られる。東京都鳥類繁殖分布調査では1970年代から1990年代にかけてもほかの種と比べると減少度合いは低く、2010年代にかけてはやや増加していた。全国的にも記録が増加しており、森林の成熟とともに回復している可能性がある。

■**生存を脅かす要因**：回復傾向にあるが、生息地は限られており、植林による自然林の伐採などが、本種の生存を脅かす要因になる。

■**特記事項**：現存する生息環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくことが望ましい。



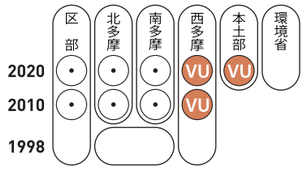
執筆者 植田睦之

文献一覧 8, 10

練馬区　2019年

コマドリ
Luscinia akahige

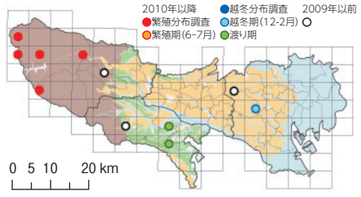
スズメ目
ヒタキ科



■**種の特性と生息状況**：体長14cm。雄成鳥は額から後頸と背面は茶褐色で、顔から頸、上胸までは赤橙色。体下面は白く、胸には黒帯がある。ササなどが茂る針葉樹林や混交林に生息し、昆虫類やクモ類、ミミズ類などを食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。西多摩のブナ帯の渓谷や自然林に4月に渡来し、繁殖している。渡りの時期には、平地の公園の樹林などでも見られる。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採・シカの食害・その他。植林のための自然林の伐採や、シカの採食による林床植生の衰退が、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

■**特記事項**：過去にはカメラマンの影響による営巣放棄の事例もあり、対策が望まれる。



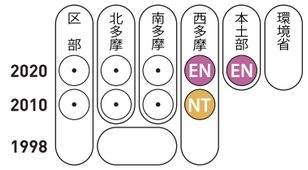
執筆者 田畑伊織

文献一覧 8, 16, 61, 62

東京都外　2009年

コルリ
Luscinia cyane

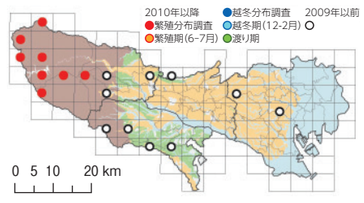
スズメ目
ヒタキ科



■**種の特性と生息状況**：体長14cm。雄成鳥は頭部から尾までの背面や翼の一部が青色で、体下面は白色。嘴は黒い。山地から亜高山帯のササなどが茂る落葉広葉樹林や混交林に生息し、昆虫類やクモ類、ミミズ類などを食べる。北海道、本州（中部以北）で夏鳥。都内では西多摩のブナ帯の林床植生が繁茂した自然林に渡来し、繁殖している。渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採・シカの食害。植林のための自然林の伐採や、シカの採食による林床植生の衰退が、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

■**特記事項**：



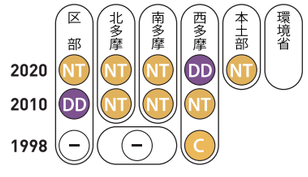
執筆者 田畑伊織

文献一覧 8, 16, 61, 62

練馬区　2006年

イソヒヨドリ
Monticola solitarius

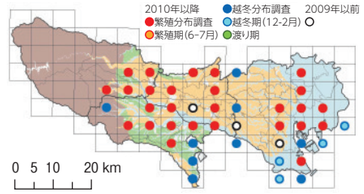
スズメ目
ヒタキ科



■**種の特性と生息状況**：体長26cm。雄は上面が青色で、腹部はレンガ色、雌は全体が褐色。かつては全国の海岸線に留鳥として生息していたが、近年は内陸部でも繁殖するようになった。地上性の昆虫類・小型の爬虫類、クモ・ムカデ類などを捕り、ビルやマンション、一般住宅の隙間で営巣する。2009年以降は、八王子・日野市一帯で繁殖活動が活発に見られ、周辺部に拡大している。また、西多摩・北多摩・区部でも生息・繁殖が多数報告されるようになっている。

■**生存を脅かす要因**：大型商業施設の駐車場やビル、一般住宅などに営巣し、早朝などに大きな声でさえずるため、騒音として嫌われる傾向が出てきている。営巣への妨害行為が考えられる。

■**特記事項**：

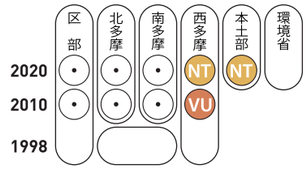


執筆者 川内博

文献一覧 16, 23, 61

サメビタキ
Muscicapa sibirica

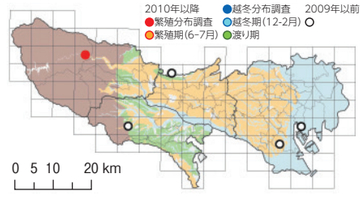
スズメ目
ヒタキ科



■**種の特性と生息状況**：体長13.5cm。成鳥は顔、頭部から尾までの背面が暗灰褐色で、尾や翼は黒褐色。白色のアイリングがある。亜高山帯の針葉樹林に生息し、昆虫類などを食べる。北海道、本州（中部以北）で夏鳥。都内では西多摩の標高 1,700m 以上の亜高山帯の自然林に渡来する。春・秋の渡りの時期には、平地の樹林でも見られることがある。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採・局所分布。高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので環境変化の影響を受けやすいが、生息状況については不明な点が多いので、詳細な状況の把握が望まれる。

■**特記事項**：



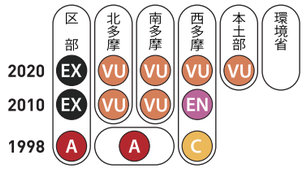
執筆者 田畑伊織

文献一覧 8, 16, 62

東京都外　2017年

コサメビタキ
Muscicapa dauurica

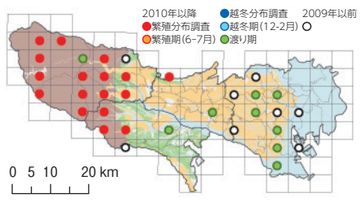
スズメ目
ヒタキ科



■**種の特性と生息状況**：体長13cm。成鳥は頭部から尾までの背面が灰褐色で翼は黒褐色。アイリングと眼先が白い。体下面は白色。平地から山地の落葉広葉樹林に生息し、昆虫類などを食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。都内では西多摩や南多摩の丘陵地や山地の広葉樹林で繁殖している。渡りの時期には平地の樹林でも見られる。東京都鳥類繁殖分布調査では1970年代から1990年代にかけて急減したが、2010年代にかけては大きく増加した。全国的にも記録が増加しており、森林の成熟とともに回復している可能性がある。

■**生存を脅かす要因**：回復傾向にあるが、生息地は限られており、開発や植林などによる広葉樹林の減少が、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：現存する生息地の樹林環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくこと、また、林内を飛びながら昆虫類を捕食するため、必要に応じて、枝打ちや下草刈りを行い、林内空間の確保をすることが望ましい。

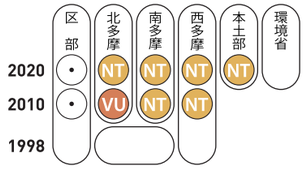


東京都外　2008 年

執筆者 植田睦之　文献一覧 8, 10

オオルリ
Cyanoptila cyanomelana

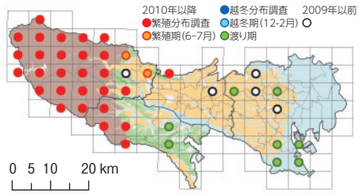
スズメ目
ヒタキ科



■**種の特性と生息状況**：体長16.5cm。雄成鳥は頭部から尾までの背面が青色で、顔から喉、胸、脇にかけては黒い。体下面は白色。低山地から山地にかけての樹林に生息し、渓谷に沿った樹林を好む。昆虫類などを食べる。北海道、本州、四国、九州で夏鳥。都内では南多摩や西多摩の山地の渓流沿いの自然林に渡来し、繁殖している。春・秋の渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。東京都鳥類繁殖分布調査では1970年代から1990年代にかけてやや減少していたが、2010年代にかけては大きく増加した。全国的にも記録が増加しており、森林の成熟とともに回復している可能性がある。

■**生存を脅かす要因**：回復傾向にあるが、生息地は限られており、開発や植林などによる広葉樹林の減少が、本種の生存を脅かす要因になる。

■**特記事項**：現存する生息地の樹林環境を可能な限り保全することが望ましい。また、姿や鳴き声が美しいため、飼い鳥として密猟されることがあり、厳しい取締りが望まれる。

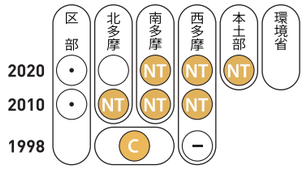


文京区　2021 年

執筆者 植田睦之　文献一覧 8, 10

カヤクグリ
Prunella rubida

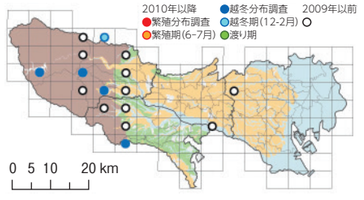
スズメ目
イワヒバリ科



■**種の特性と生息状況**：体長14cm。雌雄同色で全身茶褐色。四国以北の亜高山帯の低木林やハイマツ林で繁殖する鳥で、秋冬期には低山や丘陵地の林で観察される。西多摩での観察では越冬地は局所的である。南多摩にある高尾山での日本野鳥の会東京の探鳥会記録では、2000年以降観察記録が激減している。多摩川の河川敷でもかつては毎年記録されていたが、近年は報告が少ない。まれに区部の緑地での観察がされている。

■**生存を脅かす要因**：越冬期の観察が少なく情報が足りない。越冬地が局所的で限定されていることから、まず越冬地での状況調査ととりあえずの生息環境維持が肝要と思われる。

■**特記事項**：

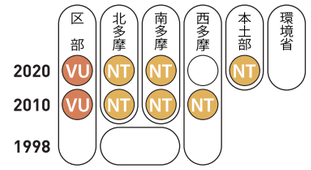


東京都外　2010 年

執筆者 川内博
文献一覧 42, 81

セグロセキレイ
Motacilla grandis

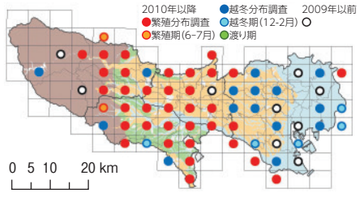
スズメ目
セキレイ科



■**種の特性と生息状況**：体長21cm。成鳥は背面や頸、胸などが黒く、眉斑と喉、体下面は白い。平地から山地の河川、湖沼、耕作地などに生息し、昆虫類を食べる。北海道、本州、四国、九州で留鳥。都内では平地から丘陵地の河川沿いに生息し、繁殖している。都市部の小河川沿いでも見られることがある。東京都鳥類繁殖分布調査では1970年代から1990年代、2010年代と継続して分布が縮小傾向にある。全国的にも同様の傾向にあり、主要な生息地である礫河原の減少や環境悪化が影響している可能性がある。

■**生存を脅かす要因**：グラウンド利用、植生遷移などに伴う礫河原の減少、河川改修による石積みなどの営巣可能な空洞の減少や、コンクリート化などによる川底の単純化で食物となる水生昆虫の減少、水田など農耕地の減少が本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：主要な生息地である礫河原を保全すること、河川改修時には、石積護岸の採用などによる営巣可能な空洞の確保に留意すること、河床全面をコンクリートで固める工法は避けるなど配慮することが望ましい。

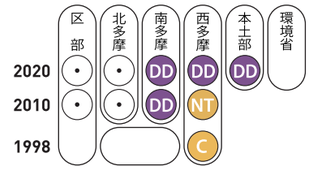


昭島市　2020 年

執筆者 植田睦之　文献一覧 8, 10

ハギマシコ
Leucosticte arctoa

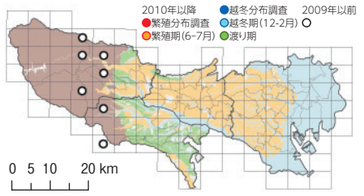
スズメ目
アトリ科



■**種の特性と生息状況**：体長16cm。雌雄同大でほぼ同色。九州以北の平地から山地の岩場や草原に冬鳥として渡来する。群れて行動することが多く、主に草の種子を食べる。都内では西多摩地区で記録され、奥多摩湖周辺の道路わきで観察されることが多い。その他、御岳山などでの越冬記録がある。西多摩地域以外での記録もあるがごく少数である。

■**生存を脅かす要因**：渡来地が局所的であるので、その場所の環境保全が一番重要である。ただし、飛来する要因が何かということがよくわかっていないので、詳しい調査が必要である。また、近年飛来数や頻度に減少傾向が見られているので緊急に対応することが肝要である。

■**特記事項**：

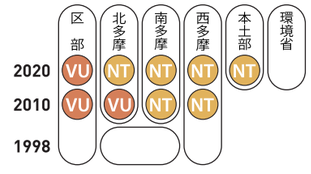


東京都外　2012 年

執筆者 川内博
文献一覧 16, 41, 61

ベニマシコ
Uragus sibiricus

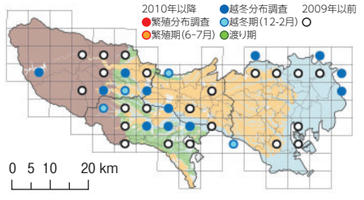
スズメ目
アトリ科



■**種の特性と生息状況**：体長15cm。雄は頭部から腹部にかけて紅色の羽毛が目立ち、雌は全体に茶褐色である。雌雄とも翼に2本の白帯が目立つ。主に北海道で繁殖し、全国には冬鳥として渡来する。都内では主に西多摩・南多摩・北多摩の丘陵地や河川敷の草地等に飛来し、セイダカアワダチソウやヨモギ、イタドリなどの種子や昆虫類を食べる。

■**生存を脅かす要因**：越冬場所としている草原や葦原などの埋立て、浚渫、改修などによる環境の変化がもっとも生存を脅かす要因となる。飛来地が限定されているので、その場所の保全がもっとも重要である。そのため、刈払いや火入れなどの際に、本種の食物確保への配慮が必要である。なお、越冬地での情報が少ないので、詳細な状況の把握が望まれる。

■**特記事項**：

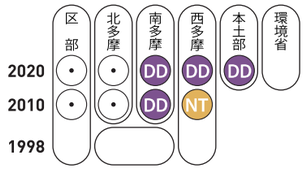


東京都外　2021 年

執筆者 川内博
文献一覧 16, 61

オオマシコ
Carpodacus roseus

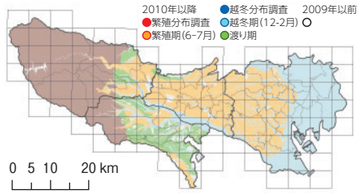
スズメ目
アトリ科



■**種の特性と生息状況**：体長18cm。雄は全体に紅色で、前頭とのどに銀白色部がある。雌は全体淡褐色。ほぼ全国に冬鳥として渡来し、山地や丘陵地、河原などで少数記録されている。観察は御岳山など主に西多摩地域で、南多摩の丘陵地や公園でも少数記録されている。飛来地は限定的で、ハギやアザミの種子を好み、群れで食べあさっているのが見られている。

■**生存を脅かす要因**：越冬地が限定されているので、開発や植林、剪定などにより、生息環境の変化が一番生息に影響する。現存する越冬地の環境を保全するとともに、人工林から広葉樹林などへの転換が望まれる。なお、越冬状態の記録が少ないので、詳細な状況把握が必要である。

■**特記事項**：観察地が限定され、年によって渡来数は変動する。まったく記録されない年もある。

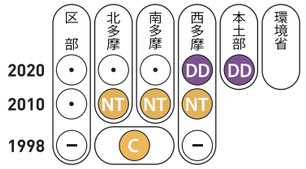


奥多摩町　2013 年

執筆者 川内博
文献一覧 16, 61

イスカ
Loxia curvirostra

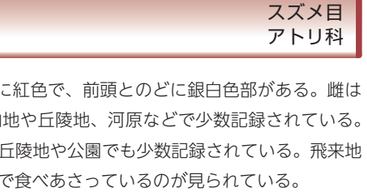
スズメ目
アトリ科



■**種の特性と生息状況**：体長16.5cm。雄成鳥はほぼ全体が暗朱赤色で翼と尾は黒褐色。体下面は白く、下尾筒には黒褐色の斑がある。平地から山地に生息し、マツやモミなどの針葉樹の種子などを食べる。北海道、本州、四国、九州で冬鳥（一部で留鳥）。都内では年により、西多摩の山地で通過もしくは少数渡来することがあるが局地的。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採・局所分布。開発や植林、マツ枯れなどによる、越冬場所となるアカマツ林やアカマツ混交林の減少が、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。

■**特記事項**：渡来数は年により増減の幅が大きいため、越冬期の詳細な状況の把握が望まれる。

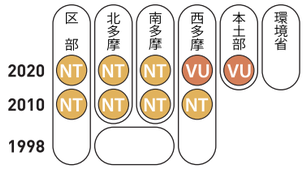


東京都外　2007 年

執筆者 田畑伊織
文献一覧 16

ウソ
Pyrrhula pyrrhula

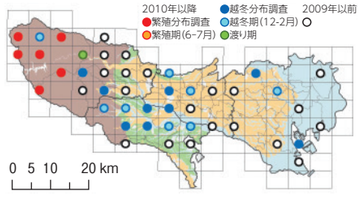
スズメ目
アトリ科



■**種の特性と生息状況**：体長15.5cm。雄成鳥は額から後頸、眼のまわり、腮が黒色で、喉から頬、耳羽までが紅色。繁殖期は亜高山帯の針葉樹林、冬は平地から山地の樹林に生息し、樹木の芽やつぼみ、種子、昆虫類などを食べる。北海道、本州（中部以北）では留鳥もしくは漂鳥。四国、九州では冬鳥。都内では西多摩の亜高山帯で少数が繁殖している。秋・冬には低山地や丘陵地の樹林に移動、もしくは冬鳥として渡来し、平地の公園緑地で見られることもあるが年による個体数の変動が激しい。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採・局所分布。高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすいが、生息状況については不明な点が多いため、詳細な状況の把握が望まれる。

■**特記事項**：

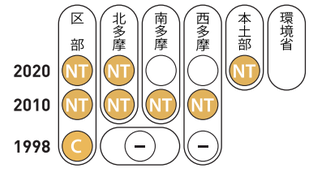


文京区　2020 年

執筆者 田畑伊織
文献一覧 8, 16, 61, 62

イカル
Eophona personata

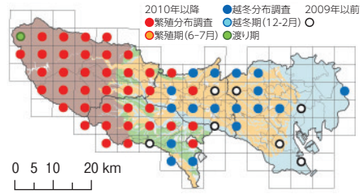
スズメ目
アトリ科



■**種の特性と生息状況**：体長23cm。成鳥は頭部が黒色で、顔や後頭から背、腰、喉から腹までは灰褐色。嘴は黄色で、太く大きい。平地から山地の落葉広葉樹林に生息し、木の実や種子を食べる。冬は暖地に移動する。北海道では夏鳥。本州、四国、九州では留鳥または漂鳥。都内では北多摩、南多摩、西多摩の自然林に周年生息し、繁殖している。冬は平地の樹林にも移動する。東京都鳥類繁殖分布調査では1970年代から1990年代には分布が縮小傾向にあったが、2010年代には大きく回復した。反面、北多摩地域においては1990年代に増加したが、2010年代には繁殖期にはほとんど見られなくなった。

■**生存を脅かす要因**：植林のための自然林の伐採などが、本種の生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：現存する生息環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくことが望まれる。また、公園緑地が越冬地および渡りの中継地として重要な機能を果たしているので、食物になる種子をつけるエノキ、ヌルデ、ハゼ、サクラ、カエデなどが減少しないような配慮が望まれる。

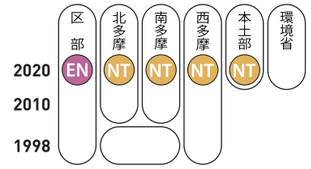


東京都外　2009 年

執筆者 植田睦之
文献一覧 8

ホオジロ
Emberiza cioides

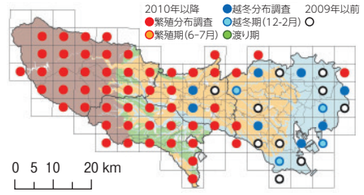
スズメ目
ホオジロ科



■**種の特性と生息状況**：体長16cm。前面から背面にかけて赤褐色で、雄は過眼線から頬、顎線が黒く、雌は褐色。平地から山地の林縁、農耕地、草地、河川敷などに生息し、昆虫類や種子を食べる。本州、四国、九州で留鳥。北海道で夏鳥。都内では平地から山地に生息し、繁殖している。東京都鳥類繁殖分布調査では1970年代以降減少しており、特に平地で減少しており、河川敷以外では見られなくなっている。全国的には最も分布の広い種の一つだが減少傾向にあるのは同様である。

■**生存を脅かす要因**：開発により、丘陵地の低木林や草地、耕作地といった本種の繁殖できる環境が減少したことが本種の生存を脅かす要因である。また、樹木の生長により、伐採地に成立していた若齢林の減少も山地部での減少につながっている。

■**特記事項**：現存する繁殖環境は可能な限り保全することや、公園内や耕作地の周囲に草本類が繁茂し、昆虫類が増えるように、可能な範囲で草刈り頻度の減らすことや殺虫剤を使用しないなど配慮することが望ましい。

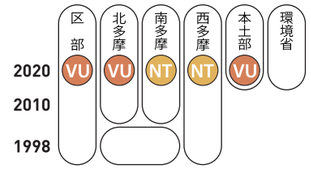


東京都外　2006 年

執筆者 植田睦之
文献一覧 8, 10

カシラダカ
Emberiza rustica

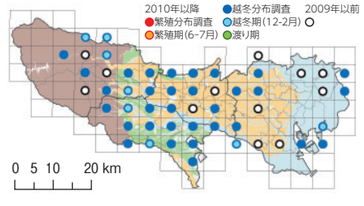
スズメ目
ホオジロ科



■**種の特性と生息状況**：体長15cm。背面から脇にかけて赤褐色で、過眼線から頬、顎線も赤褐色で短い冠羽がある。平地から山地の林縁、農耕地、草地などに生息し、種子などを食べる。本州、四国、九州で冬鳥。都内では平地から山地で越冬する。日本でも全国的に減少傾向にあり、また世界的にも急減していることが知られておりIUCNのレッドリストでも絶滅危惧II類に選定されている。

■**生存を脅かす要因**：世界的に減少した原因としては、渡り途中での狩猟捕獲の影響が考えられている。また国内では特に本種が多く生息する水田と林がセットとしてある谷戸田などが耕作放棄や開発などにより減少したことが生存を脅かす要因である。

■**特記事項**：世界的な減少をとめるためには、原因を究明し、国際的な協力体制を作って保全を進めることが急務である。また現存する生息環境を可能な限り保全することや、耕作地や草地と樹林をセットとして残すことが重要である。

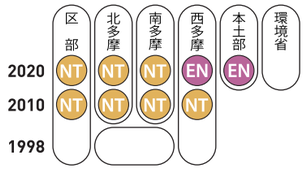


文京区　2020 年

執筆者 植田睦之
文献一覧 82, 86

クロジ
Emberiza variabilis

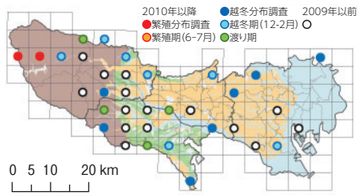
スズメ目
ホオジロ科



■**種の特性と生息状況**：体長17cm。雄成鳥夏羽は全体が灰黒色で、体下面はやや淡色。北海道では夏鳥。繁殖期は山地のササが茂る樹林、冬は平地から低山地の暗い樹林に生息し、植物の種子や昆虫類などを食べる。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州、南西諸島では冬鳥。都内では西多摩の高標高地でさえずりが確認されており、少数が繁殖していると思われる。冬は低山から丘陵地の薄暗い雑木林などで越冬している。

■**生存を脅かす要因**：森林伐採・シカの食害・渡りの目的地（繁殖地・越冬地）および経路の環境悪化。高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすいが、生息状況については不明な点が多いため、詳細な状況の把握が望まれる。

■**特記事項**：日本固有種。都内越冬地に関しては記録・分布とも増加傾向だが、繁殖地では、近年のシカの増加やササの一斉開花による枯死による下層植生の衰退により、減少している可能性がある。

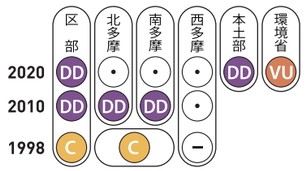


東京都外　2005 年

執筆者　田畑伊織
文献一覧　8, 16, 61

コジュリン
Emberiza yessoensis

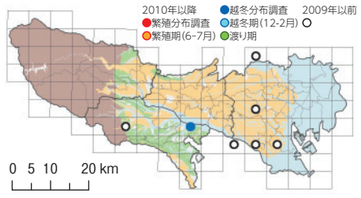
スズメ目
ホオジロ科



■**種の特性と生息状況**：体長14.5cm。雄成鳥夏羽は、頭部は黒色、背と肩羽の軸斑や翼は黒褐色。低地の湿原や山地の高原に生息し、昆虫類や植物の種子などを食べる。本州、九州では留鳥または漂鳥。四国では冬鳥。都内では河川敷や海岸の埋立地のヨシ原やオギ・ススキ草地に、秋・冬に少数渡来する。これらの場所では越冬している可能性があるが、近年の埋め立て地内での調査が少なく、生息状況は不明な点が多い。

■**生存を脅かす要因**：河川改修などによる、ヨシ原やオギ・ススキ草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する広大なヨシ原やオギ・ススキ草地を可能な限り保全することが望ましい。

■**特記事項**：

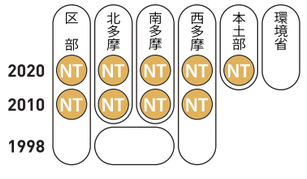


2004 年

執筆者　金井裕
文献一覧　43, 49

オオジュリン
Emberiza schoeniclus

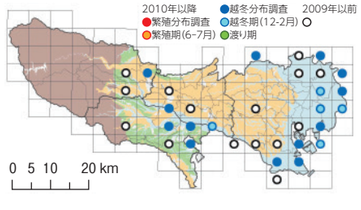
スズメ目
ホオジロ科



■**種の特性と生息状況**：体長16cm。雄成鳥夏羽は頭部、顔、喉から上胸までが黒く、体下面は白い。背面は赤褐色で黒とバフ色の縦斑がある。平地の湿原、ヨシ原、草原に生息し、植物の種子や昆虫類などを食べる。北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州では冬鳥。都内では大河川の河川敷や海岸の埋立地の広いヨシ原に渡来し、越冬しているが減少傾向にある。

■**生存を脅かす要因**：埋立て、浚渫、河川改修、アレチウリの繁茂などによる、広大なヨシ原の減少が、本種の生存を脅かす要因である。ヨシ原が広域に現存する場所を可能な限り保全することや、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。

■**特記事項**：



東京都外　2008 年

執筆者　金井裕
文献一覧　43, 49, 58

文献一覧

1. 赤羽根文男・鈴木弘行 編（2004）葛西の野鳥：葛西臨海公園・葛西海浜公園鳥類目録：10 年間の記録（1994 年～ 2003 年）．自刊：35pp.
2. あきる野市環境委員会自然環境調査部会 編（2013）あきる野市自然環境調査報告書（平成 21 年度～ 23 年度）．あきる野市：146pp.
3. あきる野市環境経済部環境政策課環境の森推進係（2013）生物多様性・5 希少種の特別調査．平成 22 ～ 24 年度 森林レンジャーあきる野 活動報告書：145-151．あきる野市環境経済部環境政策課環境の森推進係.
4. 井上裕由（2021）東京区部の緑島におけるフクロウ観察 URBAN BIRDS，38：62-75．都市鳥研究会．
5. 植田睦之（2004）生態図鑑 ホウロクシギ．バードリサーチニュース，1（3）：5-6.
6. 植田睦之（2013）第 4 章 ツミの分布と環境利用の変遷．樋口広芳 編 日本のタカ学 生態と保全：70-81．東京大学出版会.
7. 植田睦之・岩本富雄・中村豊・川崎慎二・今野怜・佐藤重穂・高美喜男・高嶋敦史・滝沢和彦・沼野正博・原田修・平野敏明・堀田昌伸・三上かつら・柳田和美・松井理生・荒木田義隆・才木道雄・雪本晋資（2014）全国規模の森林モニタリングが示す 5 年間の鳥類の変化．Bird Research, 10：F3-F11.
8. 植田睦之・佐藤望（2021）東京都鳥類繁殖分布調査報告 2016-2021．NPO 法人 バードリサーチ：177pp.
9. 植田睦之・松野葉月・黒沢令子（2005）東京におけるヒバリの急激な減少とその原因．Bird Research, 1：A1-A8.
10. 植田睦之・植村慎吾（2021）全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021 年．鳥類繁殖分布調査会：175pp.
11. 上田恵介（2006）生態図鑑 セッカ．バードリサーチニュース，3（5）：2-3.
12. 内田博（2007）生態図鑑 イカルチドリ．バードリサーチニュース，4（6）：4-5.
13. 浦達也（2007）生態図鑑 オオジシギ．バードリサーチニュース，4（10）：4-5.
14. 青梅自然誌研究グループ（2017）青梅市の猛禽類．青梅自然誌研究グループ会報，6：55pp．青梅自然誌研究グループ．
15. 荻野豊（1980）狭山丘陵の鳥．さきたま出版会：80pp.
16. 奥多摩支部目録作成チーム（2014）多摩の鳥 鳥類目録 2000-2012．日本野鳥の会奥多摩支部：295pp.
17. ㈱オリエンタルコンサルタンツ（2017）H29 外環動植物調査業務報告書．
18. 笠原里恵（2020）生態図鑑 イカルチドリ．バードリサーチニュース，17（4）：1-2.
19. 笠原里恵・加藤和弘（2007）ヤマセミ *Ceryle lugubris* の育雛に釣り人の存在が与える影響．日本鳥学会誌，56：51-57
20. 柏木実（2010）生態図鑑 ヘラシギ．バードリサーチニュース，7（11）：4-5.
21. 粕谷和夫（2016）2016 年も高尾山にアカショウビン 1 ヶ月滞在．かわせみ，第 57 号．八王子・日野カワセミ会．
22. 川内 博（2015）カワセミ 一時は姿を消した東京のカワセミ．ユリカモメ，No.719．日本野鳥の会東京.
23. 川内 博（2016）新・東京の鳥 3 イソヒヨドリ 謎だらけの内陸部進出．ユリカモメ，No.735．日本野鳥の会東京.
24. 川内博（2021）アオバズクが東京都区部で今夏も繁殖．ユリカモメ，No792．日本野鳥の会東京.
25. 川名国男（2012）ミゾゴイ：その生態と習性．自刊：165pp.
26. ガンカモ類の生息調査．環境省．https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html
27. 環境省生物多様性センター（2019）重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）里地調査 2005-2017 年度とりまとめ報告書．環境省自然環境局生物多様性センター．
28. 神田忠良（2010）検証結果その 2・東京都産鳥類に認定した鳥 ヤイロチョウ．ユリカモメ，No.661：18．日本野鳥の会東京．
29. 桑原和之（2000）多摩川河口域における水鳥相の解析―特に東京湾の干潟環境との対応について（研究助成・学術研究，VOL. 28-No.198）．㈱とうきゅう環境浄化財団：557pp.
30. 国土交通省河川局．河川水辺の国勢調査．多摩川（データベース）．
31. 小田谷嘉弥（2020）生態図鑑 タマシギ．バードリサーチニュース，17（11）：3.
32. 小田谷嘉弥（2014）生態図鑑 ヤマシギ．バードリサーチニュース，11（11）：4-5.
33. 佐原雄二（2013）生態図鑑 ヨシゴイ．バードリサーチニュース，10（1）：4-5.
34. 澤祐介（2016）生態図鑑 ミヤコドリ．バードリサーチニュース，13（12）：1-2.
35. 清水徹男（2012）高尾山野鳥観察史．けやき出版：277p.
36. 鈴木浩克（2019）IC レコーダーを利用した多摩川上流部及び東京都山間部における絶滅危惧鳥類と希少鳥類の生息調査（研究助成・一般研究，VOL. 41- No. 241）．（公財）東急財団：129pp.
37. 鈴木弘行・中村忠昌・川原章・川原光子（2014）葛西鳥類目録－葛西臨海公園・葛西海浜公園の鳥　1994 年～ 2013 年（Ver.1）．日本野鳥の会東京・研究部：20pp.
38. 関根常貴（2010）おくたまのとり 9・ヤマセミ．多摩の鳥，No.196．日本野鳥の会奥多摩支部．
39. 関根常貴（2014）おくたまのとり・マイ・フィールドノートからカイツブリ．多摩の鳥，No.219．日本野鳥の会奥多摩支部．
40. 関根常貴（2014）おくたまのとり 31・アオバト．多摩の鳥，No.218．日本野鳥の会奥多摩支部．
41. 関根常貴（2016）おくたまのとり 29・ハギマシコ．多摩の鳥，No.216．日本野鳥の会奥多摩支部．
42. 関根常貴（2016）おくたまのとり 46・カヤクグリ．多摩の鳥，No.233．日本野鳥の会奥多摩支部．
43. （一財）世田谷トラストまちづくり 野鳥ボランティア世田谷の鳥 2015 編集委員会 編（2017）世田谷の鳥 2015 －世田谷区鳥類目録－．（一財）世田谷トラストまちづくり：284pp.
44. 高橋雅雄（2008）生態図鑑 ケリ．バードリサーチニュース，5（11）：4-5.
45. 東京都環境保全局自然保護部緑化推進室（1998）東京都鳥類繁殖状況調査報告書．東京都環境保全局：108pp.
46. 東京都環境局（2021）東京湾水生生物調査報告書（1986 年～ 2020 年）．
47. 東京都公害局（1980）東京都鳥類繁殖調査報告書：107pp.
48. 東京都公害局 編（1975）東京の鳥 東京都産鳥類目録．日本野鳥の会：223pp.
49. 東京都産鳥類目録作成委員会 編（2009）東京都産鳥類目録 2000 自治体編 Ver．1．日本野鳥の会東京支部．
50. 中西悟堂（1941）武蔵野の鳥．田村剛・本田正次 編 武蔵野：284-351．科学主義工業社．
51. 中村文夫（2007）皇居外苑濠のカモ類の個体数変化－東京都千代田・皇居外苑・北の丸公園　とうきょうのカモたち・その 1 カモ・シンポジウム報告書・2007．日本野鳥の会東京．
52. 中村文夫（2020）東京国際空港（羽田）の有害鳥獣駆除～国交省との面談結果について．ユリカモメ，No.732．日本野鳥の会東京．
53. 中村登流・中村雅彦（1995）原色日本野鳥生態図鑑〈水鳥編〉．保育社：304pp.
54. 日本野鳥の会東京・研究部（2016）東京の野鳥たち～月例探鳥会 7 か所・20 年間の記録～．日本野鳥の会東京：129pp.

55. 日本野鳥の会東京・研究部（2018）東京の野鳥たち・2 ～月例探鳥会 3 か所・20 年の記録および明治神宮・高尾山・新浜の長期記録～．日本野鳥の会東京：183pp.

56. 奴賀俊光（2008）生態図鑑 ミユビシギ．バードリサーチニュース，5（10）：4-5.

57. バードリサーチ．東京都鳥類繁殖分布調査（データベース）.

58. 蓮尾純子・多摩川鳥類カウントグループ（2021）多摩川鳥類カウント再現（研究助成・一般研究，VOL. 43-No.255）．（公財）東急財団：258pp.

59. 八王子・日野カワセミ会 30 周年記念事業 数え上げた浅川流域の野鳥Ⅲ編集委員会（2016）V．イワツバメの営巣調査：145-149. 八王子・日野カワセミ会 .

60. 八王子・日野カワセミ会 30 周年記念事業 数え上げた浅川流域の野鳥Ⅲ編集委員会（2016）数え上げた浅川流域の野鳥Ⅲ 八王子・日野カワセミ会 30 年間の観察記録：202pp．八王子・日野カワセミ会 .

61. 八王子市・日野市鳥類目録編集委員会 編（2016）八王子市・日野市 鳥類目録．八王子・日野カワセミ会：182pp.

62. 八王子市市史編集専門部会自然部会 編（2016）八王子市動植物目録 新八王子市史自然調査報告書．八王子市市史編さん室：562pp.

63. 葉山嘉一（2016）都会に進出する鳥たちの最新事情 . 緑と水の広場，81：16-17.（公財）東京都公園協会 .

64. 真木広造・大西敏一・五百沢日丸（2014）決定版 日本の野鳥 650．平凡社：792pp.

65. 真下弘（2007）多摩湖のカモたち―東京都東大和市多摩湖―．とうきょうのカモたち・その 1　カモ・シンポジウム報告書・2007：50-53. 日本野鳥の会東京支部 .

66. 三上かつら・植田睦之（2011）西日本におけるリュウキュウサンショウクイの分布拡大．Bird Research, 7：A33-A44.

67. 瑞穂自然科学同好会 編（2006）瑞穂の動植物．瑞穂町教育委員会：154 pp.

68. 御手洗望・荒井悦子・今井多可代・御手洗文代・三好ゆき江・山口孝（2008）横田基地でのコミミズク *Asio flammeus* の観察記録．青梅自然誌研究グループ会報，3：1-3.

69. 御手洗望・荒井悦子・今井多可代・御手洗文代・三好ゆき江・山口孝（2009）横田基地でのコミミズク *Asio flammeus* の観察記録（その 2）．青梅自然誌研究グループ会報，4：7-8.

70. 御手洗望・山口孝（2013）東京都における近年のサシバの繁殖事例．Strix 29：113-118.

71. 御手洗望・山口孝（2018）多摩川流域（東京都域）における絶滅危惧種ハヤブサの生態に関する調査研究（研究助成・一般研究，VOL. 41 No.239）．（公財）とうきゅう環境財団：7pp.

72. 御手洗望・山口孝・清水盛通（2011）八王子市におけるクマタカの繁殖記録．八王子市史研究，1：150-153．八王子市総合政策部市史さん室 .

73. 三間久豊（2018）中央防波堤埋立地の鳥類記録．日本野鳥の会東京・研究部 東京の野鳥たち・2 ～月例探鳥会 3 か所・20 年間の記録 および 明治神宮・高尾山・新浜の長期記録～．日本野鳥の会東京 .

74. 守屋年史（2014）生態図鑑 シロチドリ．バードリサーチニュース，11（1）：2-3.

75. 柳澤紀夫・川内博（2013）シジュウカラ・ヤマガラの繁殖期における数の調査．鎮座百年第二次明治神宮境内総合調査報告書．明治神宮社務所 2 .

76. 柳澤紀夫・川内博（2013）明治神宮の鳥類 第 2 報 鎮座百年記念第二次明治神宮境内総合調査報告書．明治神宮社務所：510pp.

77. 山口孝・御手洗望（2018）東京都の伐採地と採石場におけるヨタカの生息状況．Strix，34：17-25.

78. 山口孝（2018）東京都内でのクマタカの生息状況調査「クマタカは都内に 27 つがい以上生息」．ユリカモメ，No.751. 日本野鳥の会東京 .

79. 山口孝・御手洗望（2013）東京都に生息するクマタカについて．Strix，29：95-103.

80. 山口孝・今井多可代・御手洗望・御手洗文代（2009）東京都内の多摩川源流部におけるコノハズク *Otus scops* の観察記録．青梅自然誌研究グループ会報，4：6．青梅自然誌研究グループ .

81. 吉邨隆資（2018）高尾山探鳥会の長期記録．日本野鳥の会東京・研究部 東京の野鳥たち・2 ～月例探鳥会 3 か所 020 年間の記録および 明治神富・高尾山・新浜の長期記録～．日本野鳥の会東京 .

82. 米田重玄・上木泰男（2002）環境庁織田山一級ステーションにおける標識調査．山階鳥研報，34：96-111

83. 脇坂英弥・江崎保男（2021）農業活動にともなう撹乱を回避して繁殖するケリ *Vanellus cinereus*．日本鳥学会誌，70：131-137.

84. 渡辺朝一（2015）生態図鑑 ムナグロ．バードリサーチニュース，12（5）：4-5.

85. 渡邊宏之（2021）目黒区でのカワセミの初繁殖記録．ユリカモメ，No.791．日本野鳥の会東京 .

86. *Edenius*, L., Choi, C. Y., Heim, W., Jaakkonen, T., DE Jong, A., Ozaki, K., and Roberge, J. M. (2017) The next common and widespread bunting to go? Global population decline in the Rustic Bunting *Emberiza rustica*. Bird Conservation International, 27: 35–44.

87. Johnson, O. W., Fielding, L., Fisher, J. P., Gold, R. S., Goodwill, R. H., Bruner, A. E., Furey, J. F. Brusseau, P. A., Brusseau, N. H., Johnson, P. M., Jukema, J., Prince, L. L., Tenney, M. J. & Fox, J. W. (2012). New insight concerning transoceanic migratory pathways of Pacific Golden-Plovers (*Pluvialis fulva*): the Japan stopover and other linkages as revealed by geolocators. Wader Study Group Bulletin, 119(1): 1-8.

88. Kawakami, K. & Higuchi, H. (2003) Population trend estimation of three threatened bird species in Japanese rural forests: Japanese Night Heron *Gorsachius goisagi*, Goshawk *Accipiter gentilis* and Grey-faced Buzzard *Butastur indicus*. Journal of Yamashina Institute for Ornithology, 35:19-29.

89. Kitazawa, M., Senzaki, M., Matsumiya, H., Hara, S., and Mizumura, H. (2022) Drastic decline in the endemic brown shrike subspecies *Lanius cristatus* superciliosus in Japan. Bird Conservation International, 32:78-86.

90. Ueta, M., Kurosawa, R. & Matsuno, H. (2006) Habitat loss and the decline of Grey-faced Buzzards (*Butastur indicus*) in Tokyo, Japan. Journal of Raptor Research, 40: 52-56.

写真提供者一覧（鳥類）

井上孝明、井上裕由、浦島淳吉、小澤重雄、川上岳郎、川内博、慶野友和、清水盛通、鈴木弘行、関根常貴、田畑伊織、土橋信夫、仲野遵、特定非営利活動法人 NPO birth、パブロ・アパシリオ、水内誠、御手洗望、三間久豊、村石健一、山口孝、吉田巧